世界代表司教会議　第12回通常総会
報　告

「教会生活と宣教における神のことば」

（2008年10月5日～26日）

カトリック中央協議会

【 目 次 】

1．はじめに…… 3
2．高見三明大司教　世界代表司教会議（シノドス）に参加して…… 5
3．開催概要…… 8
4．参加者・開催日程 ……14
5．教皇ベネディクト十六世　開会ミサ説教 ……18
6．教皇ベネディクト十六世　10月5日の「お告げの祈り」のことば ……24
7．高見三明大司教の発表 ……26
8．教皇ベネディクト十六世の発表 ……29
9．最終メッセージ（要約）……32
10. 最終メッセージ ……36
11. 提言 ……54
12. 教皇ベネディクト十六世　閉会ミサ説教 ……86
13. 教皇ベネディクト十六世　10月26日の「お告げの祈り」のことば……92

資料１　世界代表司教会議第12回通常総会提題解説
　　「教会生活と宣教における神のことば」……95
資料２　第12回通常シノドス提題解説に対する日本カトリック司教
　　協議会公式回答 ……162

1．はじめに

世界代表司教会議（Synodus Episcoporum＝シノドス）第12回通常総会は、2008年10月5日から26日まで、ローマで開催された。期間は第10回までは4週間であったが、第11回から足かけ3週間になった。今回のテーマは「教会生活と宣教における神のことば」である。日本の司教協議会からは、2006年度臨時司教総会（2007年2月）で代表者に選出された長崎教区の髙見三明大司教が参加した。

世界代表司教会議（シノドス）とは

「シノドス」とは、「ともに歩む」という意味のギリシア語で、一定時に会合する司教たちの集会のことである。教皇と司教たちとの関係を深め、信仰および倫理の擁護と向上、規律の遵守と強化のための助言をもって教皇を補佐する。また、世界における教会の活動に関する諸問題を研究する。

世界代表司教会議は、第二バチカン公会議教父たちの要望にこたえて、公会議の体験によって生まれた積極的な精神を生き生きと保つために、1965年、教皇パウロ六世が自発教令『アポストリカ・ソリチトゥード』（1965年9月15日）によって設置した。『カトリック新教会法典』では、342条～348条に世界代表司教会議に関する規定が述べられている。なお、今回のシノドスでは2006年に改訂された『シノドス規則』が実施された。

世界代表司教会議は、提起された問題を討議し、教皇に意見を具申するが、決定機関ではない。会議に関する権限は、すべて教皇にある。会議の招集、代議員の指名・任命、会議要綱の決定、会議の主宰、閉会、延期、解散などは教皇の権限で行われる。

世界代表司教会議には、通常総会と臨時総会がある。特定地域または複数の地域に直接に関連する問題を取り扱う特別会議が開催されることもある。通常シノドスは1967年の第1回からほぼ2～4年ごとに開かれている。前回の第11回通常総会は2005年10月に「教会生活と宣教の源泉と頂点である聖体」をテーマに行われた。臨時シノドスは1969年と85年に、地域別の特別シノドスは1980年のオランダ特別シノドス以来7回行われている。特に大聖年の2000年を前に集中的に開催された。アフリカ（1994年）、レバノン（1995年）、アメリカ（1997年）、アジア（1998年）、オセアニア（1998

年)、ヨーロッパ（1999年）などである。

「提題解説」と「討議要綱」

世界代表司教会議が開催される前に、教皇庁シノドス事務総局は、準備文書を各国司教協議会にあらかじめ送付する。この準備文書は「提題解説」（Lineamenta）と呼ばれる。シノドス事務総局は、今回の世界代表司教会議のための「提題解説」を2007年3月25日付で各国司教協議会に送り、同年11月末までに、シノドス事務総局宛、「提題解説」の質問事項に対する「回答」を送るよう指示した。

日本カトリック司教協議会はこの「提題解説」を全訳し、全司教に配布した。全司教は2007年6月に開催された2007年度定例司教総会において協議を行い、同司教総会で出された意見を元に、「提題解説」に対する公式回答を作成することを決議した。司教総会の後、司教協議会は「提題解説」の全訳をカトリック中央協議会ホームページに掲載するとともに、各教区・修道会の意見を聴取した。2007年8月末日までに各教区と男女修道会・宣教会総長管区長会から提出された諸意見に基づき、シノドス代表参加者の高見三明大司教が回答を作成した。回答書は特別臨時司教総会（2007年10月5日）で検討した結果、第一部（リネアメンタに対する日本司教団の提言）と第二部（リネアメンタの質問に対する回答まとめ）の構成とし、最終的に11月1日の常任司教委員会で決定し、11月末に教皇庁シノドス事務総局に提出した。

シノドス事務総局は、各国の司教協議会の「回答」に基づき、2008年5月11日付で「討議要綱」（Instrumentum Laboris）を発表した。この「討議要綱」がシノドスの議論の材料として用いられた。

なお、世界代表司教会議の議長は教皇が務めるが、実際の司会は3名の議長代理が毎日交代して行う。総書記は、分団会·全体会で議論するために、参加者から指摘された議題をまとめて報告する。また、総書記と特別秘書は、シノドス教父の提言をまとめて、教皇に提出する。これらの提言を踏まえて、教皇はシノドス後の使徒的勧告を発表する。

2．世界代表司教会議（シノドス）に参加して

高見三明　大司教

1．今回のシノドスの重要性

今回全教会レベルで聖書のみに集中して議論されたのは、教会史上稀に見ることだったろうと思います。第二バチカン公会議以後、これまでのシノドスの通常総会では次のようなテーマが取り扱われました。第1回：カトリック信仰の保持と強化［教会法の改訂ほか］（1967年）、第2回：司祭職と世の正義（1971年）、第3回：福音宣教（1974年）、第4回：カテケージス（1977年）、第5回：キリスト者の家庭（1980年）、第6回：回心と和解（1983年）、第7回：信徒（1987年）、第8回：司祭養成（1990年）、第9回：奉献生活（1994年）、第10回：司教（2001年）、第11回：聖体（2005年）。この第11回シノドスの教父たちが次回シノドスのテーマを「神のことば」とするよう要望し、その前の9月に行われた「『啓示憲章』発布40周年国際会議」の参加者も一致して同じ考えでした。第二バチカン公会議が、「教会は主の聖体と同様に、聖書を常に尊敬し、特に典礼において不断に、神のことばとキリストのからだの食卓から生命の糧を取り、信者に与えてきた」（『啓示憲章』21）と教えているように、教会の歴史の中で常に中心にあった聖体の秘跡に次いで、これもまた教会生活に不可欠の糧である聖書について討議されることはごく自然のことだったと思います。これらのきわめて大切な教会の要素がなぜもっと早い時期に取り上げられなかったのか、その理由は精確にはわかりませんが、教会が直面している重要な課題を順次取り上げた後、ここに来てその源泉にさかのぼることになったということなのでしょう。中でも、神のことばの恵みの力に目が注がれつつあります。

ともあれ、メッセージ（長短二種類）に反映されているように、今回のシノドスは神のことばについて多角的かつ全体的に把握する有意義な会議であったといえます。特に司牧的、実践的視点から、いかに神のことばに触れ、神のことばによって生かされるためにどうすればよいか、ということが教父たちの最大の関心事でした。

2．会議の進め方

本報告書3－4頁、および8頁以下で説明されているように、まずその時の「提題解説」をもとに全世界の司教たちを通して教会全体から集められた意見をまとめてシノドス事務総局で「討議要綱」が作成されます。それをも

とに、シノドスは、さらに全体会議での公式発表や自由討議、分団会の諸意見を徐々にまとめて「提言」を作成し、投票した後、それを教皇に差し上げます。教皇は、それをもとに「使徒的勧告」を発表し、全教会を駆り立てることになります。議長代理の3名の枢機卿が毎日交代してラテン語で議事を進めました。「提言」の中間発表と最終発表もラテン語でした。前回まで6分だった各司教の発表時間は今回から5分、それ以外のかたの発表は3分でした。短くした分の時間は自由討議などに利用され、より有意義な会議になったと思います。

3. 内容について

特に印象に残った点をいくつか挙げてみましょう。

⑴ 聖体と聖書の関係についてより明確な理解と説明がなされる必要がある。カトリック教会は常に聖体と聖書によって養われてきたとはいえ、一般に、聖書に親しみ、聖書に生きることについての伝統は長くはない。その事実を認めつつ、神のことばと感謝の祭儀（聖体の秘跡）との密接な関連を深く理解し、生活の中で生きることによって、カトリック教会の新しい伝統を創造する時が来たと思われる。これに関して、バルトロマイ一世世界総主教の話は、大変示唆に富むものだった。

⑵ 典礼におけるみことばの重要性の再認識とそれに呼応する実践が必要：朗読聖書の仕様、朗読者の養成、発声、音響効果などにさらに努力が求められる。東方教会の神のことばに対する特別な尊敬の念には学ぶものが多い。

⑶ みことばに基づいた説教の周到な準備、内容の深さ、具体性、適当な長さなどに特別留意する。

⑷ 神学生の神のことばに関する養成（読書、黙想、説教）は大変重要。

⑸ “Lectio divina”あるいは「祈りを伴う聖書の朗読」が全キリスト者にあらゆるレベルで促進されなければならない。聖書は読み、黙想し、祈り、生活において実践するために与えられているからである。今回、5大陸における神のことばに関する報告で明らかにされたように、国や地域によって状況が異なっている。しかし、一方で、他の国や地域の取り組みなどが参考になることがある。たとえば、アフリカの国々、イラク、インド、ベトナム、ミャンマーなど、政治・経済・社会・宗教などの面で困難な状況にある国で神のことばが力になっているということなど。

一方、全体会議や提言の中でキリスト者自身とすべての人々の「福音化」

の意味での「福音宣教」ということばが看過されたようで残念であった。
⑹ 聖書の普及も大切である。会期中に、聖書協会世界連盟とカトリック聖書連盟（Catholic Biblical Federation）とが聖書の普及のために協力する契約を結んだ。聖書協会は本来聖書の普及に力を注ぐため、カトリック聖書連盟は聖書を読んで生きることを促進するために創設された。それぞれの創設理念を生かしながら、聖書を普及させるために協力し合うことになった。

ちなみに、教皇から、多言語聖書、シュトゥットガルト発行のヘブライ語旧約聖書・ギリシア語新約聖書・ギリシア語70人訳旧約聖書のセット、ボドメールのルカとヨハネのパピルス写本断片の複製が参加者全員に贈られた。
⑺ 聖書の合理主義的な解釈や種々のセクトの拡大に対処する必要がある。

4．交わり

シノドスは、確かに、教皇と司教（カトリック東方典礼を含む）、また司教同士、司教と修道者や信徒や諸運動の人たちなどと交わる機会でもあります。教皇は大多数の全体会議に出席されて、熱心に耳を傾け、最初の昼の祈りで詩編について説教され、一度意見も述べられました。サン・パオロ大聖堂でのコンサートとパウロ六世ホールでの教皇ヨハネ・パウロ二世の映画鑑賞の際には、中央の席に座られましたし、分団会別に個人謁見（名前を申し上げる程度でしたが）を賜り、最後の昼食でもご一緒されました。会議の前後、午前中の30分のお茶の時間、外での食事会などは参加者相互の交わりの場になりました。わたしは、188殉教者の列福式の準備のためにも動き回る必要がありましたが、フォコラーレの招きで、ほかの司教や信徒のかたがたと一緒にカステル・ガンドルフォで有意義なひと時を過ごすことができました。また天正少年使節が立ち寄ったというマドンナ・デッロルト教会でラヨロ枢機卿様や長崎教区の二人の神父たちなどと一緒にミサを行うことができました。敬愛するヨハネ二十三世教皇選出50周年記念日にそのご遺骸の祭壇で共同司式できたことも幸せなことでした。

ちなみに、日本と縁の深い参加者、たとえばイエズス会総長ニコラス師、クラレチアン宣教会総長アベイラ師、宮崎カリタス修道女会総長シスター志村百合子もそれぞれ意義深い発表をされました。

最後に、教皇様が発表される使徒的勧告を楽しみにしながら、それを弾みに日本の教会が神のことばによりいっそう親しむことを期待したいと思います。

3．開催概要

世界代表司教会議（シノドス）第12回通常総会は10月5日午前9時30分からサン・パオロ・フオリ・レ・ムーラ大聖堂で行われた、教皇ベネディクト十六世司式の開会ミサをもって始まった。世界代表司教会議開催に先立って、シノドス事務総局のニコラ・エテロヴィッチ事務総長は、10月3日、今回のシノドスの開催概要を発表した。以下はその全文の翻訳である（原文はイタリア語）。なお、第1回全体会議ではこれより長い14頁に及ぶ「事務総局の報告書」が事務総長によって読み上げられた。

「むしろ、幸いなのは神のことばを聞き、それを守る人である」（ルカ11・28）。イエス・キリストはこのように女にこたえました。女はイエスが権威をもって行った（ルカ4・32参照）奇跡と、その教えに驚き、自慢すべき息子をもったその母をたたえようと望みました。しかし主はこう宣言します。幸いなのは、神のことばを聞き、それを守る人である。神のことばを聞くとは、告げ知らされたことを理解し、黙想して、このことばが具体的な生活の一部となるようにすることです。別のときに、主イエスは、あらゆる誤解を避けるために、はっきりとこういわれました。「わたしの母、わたしの兄弟とは、神のことばを聞いて行う人たちのことである」（ルカ8・21）。

それゆえ、イエス・キリストの家族、すなわち教会の一員となるためには、神のことばを聞いて、それを実行しなければなりません。ところで、神のことばとはイエスご自身です。イエスは肉となった永遠のみことばであり（ヨハネ1・14参照）、永遠のいのちのことばをもっておられるからです（ヨハネ6・68参照）。イエス・キリストの神秘を理解するには、聖書を知らなければなりません。すなわち、イエスの到来を準備した旧約聖書と、新約聖書、特に4福音書です。4福音書はイエスの生涯を語り、過越の神秘を述べ――主イエスはこの過越の神秘によって世を救いました――、イエスが創立した教会の始まりを物語るからです。

教皇ベネディクト十六世の招集により、シノドス教父は2008年10月5日から26日までローマで開催される世界代表司教会議（シノドス）第12回通常総会に集まります。それは、神のことばと、教会生活において神のこと

ばがもつ中心的な意味と、神のことばがキリスト者を宣教へと促す力を考察するためです。キリスト者は、ことばと生活の模範をもって、復活した主イエスがわたしたちのただ中におられるという福音を告げ知らせます。御父から遣わされたイエスは「神のことばを話される。神が〝霊〟を限りなくお与えになるからである」（ヨハネ 3 ・34）。聖霊の恵みによって、信じる者はイエスが教会の中に、祈りの中に、みことばの祭儀の中に、そして特別なしかたで聖体の中におられるのを見いだすことができます。

教皇ベネディクト十六世が司式する感謝の祭儀は、重要な機会においてシノドスに同伴します。シノドスの主宰者である教皇は、 4 回の感謝の祭儀を司式します。シノドスの開会式は、10月 5 日にサン・パオロ・フオリ・レ・ムーラ大聖堂で行われます。シノドスがサンピエトロ大聖堂以外の場所で開会されるのは初めてのことです。この理由ははっきりしています。シノドス第 12 回通常総会は教皇が 2008 年 6 月 29 日に開始したパウロ年の期間中に行われるからです。シノドス閉会式は 10 月 26 日にサンピエトロ大聖堂で行われます。同じ枠組の中で 2 回の感謝の祭儀が行われます。10 月 12 日、 4 名の福者が列聖されます。この 4 名は神のことばを聞いて、実行する上で優れていたからです。すなわち、司祭ガエタノ・エリコ（1791－1860年）、 2 名の修道女の、マリア・ベルナルダ・ビュトラー（1848－1924 年）と無原罪の御宿りのアルフォンサ（1910－1946 年）、信徒のナルキサ・ディ・ヘス・マルティッヨ・モラン（1832－1869 年）です。これは、神のことばによって聖霊に導かれながら、大変ではあるけれども心をかきたてる、至福と聖性の道を歩みなさいという、シノドス教父と信者を含めたすべての人に対する招きです。10月 9 日、ローマ司教は神のしもべピオ十二世（1876－1958年、在位1939 －没年）の 50 回目の命日祭を記念するミサを司式します。ピオ十二世は何よりも聖書研究に対する関心の刷新に貢献しました。10 月 19 日に、ポンペイの聖なるロザリオの聖母の教皇巡礼所でささげられるミサも、教皇がシノドス教父のためにおとめマリアの執り成しを祈る機会となります。それは、司教たちが、神のことばを聞き、これに仕え、これを心に納めて黙想した、イエス・キリストの弟子であるかたの模範に従うことができるためです（ルカ 2 ・19参照）。

恒例のように予定されている 24 回の全体会議は、祈りに始まり、祈りで終わります。特に午前の会議では 3 時課の典礼と、シノドス教父による短い

説教が行われます。

10月18日（土）のエキュメニカル集会でも祈りが行われます。教皇ベネディクト十六世と世界総主教バルトロマイ一世は年間第29主日の前晩の祈りを司式します。続いて二人は、特にパウロ年との関連において、神のことばというテーマについて講話を行います。世界総主教がシノドス教父に講話を行うのは初めてです。世界総主教は、異邦人の使徒がローマに来て殉教する前に創立した部分教会を代表してあいさつを行います。ローマ司教である教皇ベネディクト十六世も、世界総主教を歓迎しながら、聖パウロがローマで行った宣教の重要性を示します。ローマは、ペトロとパウロという教会の二つの柱の亡骸と、二人が伝えた豊かな使徒伝承を大切に誇りをもって守ります。

祈りと、神のことばに敬虔に耳を傾けるこのような雰囲気の中で、第12回通常総会は行われます。13の自主権を有するカトリック東方教会、113の司教協議会、25の教皇庁省庁、修道会宣教会総長連盟を代表する253名のシノドス教父が会議に参加します。

253名のシノドス教父の内訳は、アフリカから51名、アメリカから62名、アジアから41名、ヨーロッパから90名、オセアニアから9名です。シノドス教父はさまざまな資格で通常総会に参加します。173名は選出された参加者、38名は職務上の参加者、32名は教皇の任命による参加者、10名は修道会宣教会総長連盟によって選出された参加者です。それゆえシノドス教父の72.3%が選出された参加者、15%が職務上の参加者、12.6%が教皇の任命による参加者です。253名のうち総大司教8名、枢機卿52名（いくつかの分類は重複して数えられます。なぜなら、たとえば、枢機卿は4名の総大司教と1名の〔東方カトリック教会の〕上級大司教を含むためです）、上級大司教2名、大司教79名、司教130名です。職務上の参加者は、自主権を有する東方教会の長10名、司教協議会会長30名、ローマ教皇庁省庁代表24名、裁治権者185名、補佐司教17名です。

シノドス教父の最高齢は88歳（マロン典礼教会の総主教ピエール・ナスララー・スフェイル枢機卿）、最年少は39歳（オーストリア・ザンクト・ペルテン補佐司教のアントン・ライヒトフリート師）です。それゆえシノドスの考察は、高齢の兄弟の経験と若い兄弟の力に支えられます。ちなみにシノドス教父の平均年齢は約63歳です。

21か国の専門家41名、26か国のオブザーバー37名もシノドス総会に参加します。専門家のうち6名は女性です。またオブザーバーのうち19名は女性で、男性より1名多くなっています。

10の教会・教会共同体を代表する友好使節もシノドス総会に参加します。これらの友好使節はカトリック信者とともに聖書を愛し礼拝するからです。（コンスタンチノープルの）世界総主教のほか、モスクワ、セルビア、ルーマニアの総主教、ギリシア正教会とアルメニア使徒教会、聖公会、ルーテル世界連盟、ディサイプルズ教会、世界教会協議会が参加します。

教皇ベネディクト十六世が招いた3名の特別招待者も参加します。一人はハイファ首席ラビのシェアル・ヤシュヴ・コーエン師です。コーエン師は10月6日午後、ユダヤ人が聖書――律法と預言者と知恵の書――をどう読み、解釈しているかについて発表します。これらの聖書の大部分は、旧約聖書と名づけられて、キリスト教徒が共有しているからです。ラビ、また非キリスト者がシノドス教父に演説を行うのは初めてのことです。次にイエズス会のアルベール・ヴァノワ枢機卿が、キリスト教徒によるユダヤ教の聖書の扱い方について発表します。そして、2001年の教皇庁聖書委員会文書『キリスト教徒の聖書におけるユダヤの民とその聖書』からいくつかの規定を説明します。

もう二人の特別招待者は聖書協会世界連盟の事務総長のミラー・ミロイ博士と、テゼ共同体のブラザー・アロイスです。

報道関係者に対しては5名の広報担当者からフランス語、英語、イタリア語、スペイン語、ドイツ語でシノドスの議事について定期的に発表が行われます。もちろん他の記者会見も行われます。

シノドスの議論はアシスタント、通訳、技術担当者、そして特にシノドス事務総局によって可能となります。総計400名余がシノドスに参加することになります。

シノドス第12回通常総会では、2006年に改訂された『シノドス規則』が初めて実施されます。改訂された『シノドス規則』は、40年間の経験を積んだシノドスの方法の発展を反映させて、それを法的規則に表そうとしたものです。もちろんこの改訂は1983年に公布された教会法と1990年に公布された東方教会法の規則を適用したものです。

変更点の詳細を説明するには長い時間が必要ですが、特に教会制度の発展

に関して法律の専門家が関心をおもちと思われます。この点については『規則』序文を注意深く読むのが有益です。序文は40年にわたるシノドスの方法が証明した、シノドスの神学的・法的側面を簡潔に述べます。ここでは以下の点を強調すれば十分だと思われます。

総書記と特別秘書の役割が明確化されました。今回の総書記はカナダ・ケベック大司教のマルク・ウエレット枢機卿です。カナダの司教が総書記を務めるのは今回が初めてです。

特別秘書はコンゴ民主共和国のキンシャサ大司教ローラン・モンセンゴ・パシンヤ師です。モンセンゴ師はアフリカの司教として初めてシノドス通常総会の特別秘書を務めます。モンセンゴ師は、最近亡くなったボルツァーノ=ブレッサノーネ司教ヴィルヘルム・エミール・エッガー師の代わりに特別秘書となりました。

上記の改訂『規則』で、自主権を有するカトリック東方教会の位置づけが明確になりました。自主権を有するカトリック東方教会は、それぞれの教会の長、もしくは、長がシノドス総会に参加できない場合は、自主権を有するカトリック東方教会の司教会議の合意によって長から選ばれた代理者が代表として参加します。さらに、25名以上の司教のいるカトリック東方教会はシノドス総会のためにもう一人の代表者を選ぶことができます。それゆえ、今回初めて、カトリック東方教会は3種類の代表者を参加させることになります。職務上の代表者、指名による代表者、そして選挙による代表者です。

シノドスの規定により、シノドス教父の文書による発表以外に、いわゆる自由討議が行われます。自由討議はすべての午後の全体会議の午後6時から7時まで行われます。さらに、シノドス教父に正式な発表の時間を5分しか与えないことによって、たとえば、基調講演、中間報告、最終メッセージの発表の後に行う、シノドス中の自由討議の時間が長くなりました。

5つの10分間の報告の後にも自由討議の時間が設けられます。この5つの報告の中では、5名の司教が、神のことばというテーマが5大陸でどのように受け取られたかを発表します。これは今回のシノドスの方法のもう一つの新しい点です。10月6日に予定されるこの報告によって、各大陸の部分教会の状況に関する正確な情報を知ることができます。

教皇ベネディクト十六世による最初のシノドス後の使徒的勧告『愛の秘跡』の受容に関する約30分間の報告も予定されています。報告者は、前回のシ

ノドスで総書記を務めたヴェネツィア総大司教のアンジェロ・スコラ枢機卿です。報告の後、このテーマに関する自由討議が行われます。

「教会生活と宣教における神のことば」をテーマとした世界代表司教会議第12回通常総会のいくつかの側面を示しました。わたしはすべてのかた、特に奉献生活者に、シノドスの成果が神のことばへの新たな愛を生み出すことができるよう、熱心に、また粘り強く祈ってくださるようお願いします。この愛は、聖書のうちに、確かなあかしと、未来に向けた教会の力と、福音宣教と人間性の推進という教会の使命とを見いだすからです。

終わりに、聖書の最後の書から引用したいと思います。それは、イエス・キリストを愛し、父である神から遣わされ、聖霊に導かれながら、諸聖人の交わりのうちに天の国に向けて歩む人々に、永遠のいのちへの希望を開きます。「この預言のことばを朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである。時が迫っているからである」（黙示録１・３）。

4．参加者・開催日程

開催期間

2008年10月5日（日）～26日（日）

会議場

バチカン、シノドス会議場（パウロ六世謁見ホールの建物内）

テーマ

「教会生活と宣教における神のことば」

投票権をもつ参加者（シノドス教父）

議長：教皇ベネディクト十六世

事務総長：ニコラ・エテロヴィッチ大司教（シノドス事務総長）

議長代理：ウィリアム・ヨゼフ・レヴェイダ枢機卿（教皇庁教理省長官）

ジョージ・ペル枢機卿（オーストラリア・シドニー大司教）

オディロ・ペドロ・シェーラー枢機卿

（ブラジル・サンパウロ大司教）

総書記：マルク・ウエレット枢機卿（カナダ・ケベック大司教）

特別秘書：ローラン・モンセンゴ・パシンヤ（コンゴ・キンシャサ大司教）

広報委員会委員長：ピーター・コドウォ・アッピア・タークソン大司教

（ガーナ・ケープコースト大司教）

副委員長：クラウディオ・マリア・チェッリ大司教

（教皇庁広報評議会議長）

メッセージ委員会委員長：ジャンフランコ・ラヴァージ大司教

（教皇庁文化評議会議長）

副委員長：ハイメ・シルバ・レタマーレス司教

（ベラ名義司教）

訴訟委員会委員長：レイモンド・レオ・バーク大司教

（教皇庁最高裁判所長官、米国・セントルイス名誉大司教）

副委員長：ヤン・バブヤク大司教

（スロバキア・プレソブ管区大司教）

ブロデリック・S・パビッロ司教（マニラ補佐司教）

東方教会から：17名

各国司教協議会　アフリカから：　43名

アメリカから：　46名
アジアから：　25名
ヨーロッパから：　47名
オセアニアから：　6名
修道会宣教会総長連盟代表：　10名
教皇庁各省庁代表：　24名
教皇による任命者：　32名

その他の参加者

専門家：　41名
オブザーバー：　37名
シノドス事務総局：　11名
アシスタント：　31名
広報担当：　7名

友好使節（キリスト教諸派）

11名

特別招待者（3名）

シェアル・ヤシュヴ・コーエン師（ハイファ首席ラビ）
A・ミラー・ミロイ博士（聖書協会世界連盟事務総長）
ブラザー・アロイス（テゼ共同体代表）

日程（準備期間を含む）

2006.10. 6　教皇ベネディクト十六世、世界代表司教会議第12回通常総会開催を発表。
2007. 4.27　**「提題解説」（Lineamenta）**教皇庁シノドス事務総局より発表。
2007.11.30　同回答書提出締切。
2008. 1.12　教皇ベネディクト十六世、シノドス総書記、特別秘書を任命（特別秘書はその後、エッガー司教の逝去のため2008年8月28日に交代）。
2008. 6.12　「討議要綱」（Instrumentum Laboris）発表。

2008. 6.24　教皇ベネディクト十六世、議長代理を任命。
2008. 9. 6　教皇ベネディクト十六世、シノドス参加者を任命。
2008.10. 5　シノドス開会、**教皇ベネディクト十六世主司式による開会ミサ**（サン・パオロ・フオリ・レ・ムーラ大聖堂）。
10. 6　第1回全体会議。議長代理あいさつ、事務総長報告、総書記による基調講演（Relatio ante disceptationem）、自由討議。
第2回全体会議、5大陸代表による発表、ユダヤ教ラビ・コーエン師とヴァノワ枢機卿の講話。
10. 7　第3回全体会議、メッセージ委員選挙（第1回）。
第4回全体会議、メッセージ委員選挙（第2回）、自由討議。
10. 8　分団会（第1回）：英語3、仏語3、伊語2、西語2、独語1。
第5回全体会議、自由討議。
10. 9　第6回全体会議、メッセージ委員選挙（第3回）、教皇ピオ十二世50回目の命日祭ミサ（教皇ベネディクト十六世主司式）。
第7回全体会議、自由討議。
10.10　第8回・第9回全体会議、使徒的勧告『愛の秘跡』に関する報告、自由討議。
10.11　ヨハネ二十三世教皇選出50周年記念ミサ（サンピエトロ大聖堂福者教皇祭壇、スコラ枢機卿主司式）。
第10回・第11回全体会議、自由討議。
10.12　4名の福者の列聖式ミサ（サンピエトロ広場）。
10.13　第12回全体会議、自由討議。
第13回全体会議：パウロ年とシノドスにささげられたウィーン・フィルハーモニー管弦楽団コンサート（サン・パオロ・フオリ・レ・ムーラ大聖堂）。
10.14　第14回全体会議、オブザーバー発表（第1回）。
第15回全体会議、友好使節発表、レクチオ・ディヴィナについての説明（レタマーレス司教）、自由討議。
10.15　第16回全体会議、オブザーバー発表（第2回）。
第17回全体会議、中間報告（Relatio post disceptationem）。
10.16　分団会（第2回･第3回）、提言作成。

10.17　第18回全体会議（分団会報告）。
分団会（第4回）：提言のまとめ・提出。
10.18　第19回全体会議、シノドス事務総局顧問会委員選挙（第1回）、シノドスのメッセージ草案発表（ラヴァージ大司教）。
晩課（教皇、コンスタンチノープル総主教バルトロマイ一世とともに、システィーナ礼拝堂）。
10.19　休み。教皇ベネディクト十六世、ポンペイ聖母巡礼所聖堂でミサ。事務総局で諸分団会の秘書らも加わって提言のとりまとめ。
10.20　休み。事務総局で諸分団会の秘書らも加わって提言のとりまとめ。
10.21　第20回全体会議、53提言の発表（ウエレット枢機卿とパシンヤ大司教）、シノドス事務総局顧問会委員選挙（第2回）。
分団会（第5回）、提言の修正。
10.22　分団会（第6回、第7回）：提言の修正および修正した提言の提出。
10.23　休み。事務総局で提言の最終的なまとめ。
コンサート（教皇内事管理室棟［Governatorato］の聖堂）。
10.24　第21回全体会議：シノドスの**メッセージ**最終案の採択（拍手）。
第22回全体会議：55の提言最終発表（ウエレット枢機卿とパシンヤ大司教）。
10.25　第23回全体会議：55の**提言**最終発表（続き）、投票。
教皇と参加者全員の昼食（パウロ六世謁見ホール・ロビー）。
10.26　**教皇主司式による閉会ミサ**（サンピエトロ大聖堂）

（太字の文書を本報告書に収録）

5．開会ミサ説教

教皇ベネディクト十六世

10月5日（日）午前9時30分から、サン・パオロ・フオリ・レ・ムーラ大聖堂で、教皇ベネディクト十六世司式の下、世界代表司教会議第12回通常総会開会ミサが行われた。ミサは52名の枢機卿、14名の東方教会代表者、45名の大司教、130名の司教、85名の司祭（うちシノドス教父12名、シノドス事務総局スタッフ5名、オブザーバー30名、専門家5名、広報担当者4名、アシスタント24名、通訳5名）が共同司式した。以下は、教皇がミサで行った説教の全文の翻訳である（原文はイタリア語）。

10月5日は年間第27主日で、聖書朗読箇所は、イザヤ書5・1－7、フィリピの信徒への手紙4・6－9、マタイによる福音書21・33－43だった。

預言者イザヤの書からとられた第一朗読は、マタイによる福音書の箇所と同じように、わたしたち会衆に聖書の意味深い象徴的なたとえを示します。それは、すでに以前の主日に朗読された、ぶどう畑のたとえです。福音書の物語の最初の節は、イザヤ書に見いだされる「ぶどう畑の歌」を参照しています。「ぶどう畑の歌」の背景となっているのは秋の収穫です。このユダヤ教の詩の傑作といえる小さな歌は、イエスの話を聞いていた人々によく知られていたに違いありません。他の預言者からの引用からもわかるように（ホセア10・1、エレミヤ2・21、エゼキエル17・3－10、19・10－14、詩編80・9－17参照）、この歌から、ぶどう畑とはイスラエルのことだということがわかります。神はご自分のぶどう畑、すなわちご自分の選んだ民を、妻に忠実な夫と同じように心にかけます（エゼキエル16・1－14、エフェソ5・25－33参照）。

それゆえ、ぶどう畑のたとえは、結婚のたとえと同じように、神の救いの計画を述べています。わたしたちはこれを神と神の民の契約に関する感動的なたとえと考えることができます。福音書の中で、イエスはイザヤの歌を取り上げます。しかしイエスはそれを、自分のことばを聞いている人々と、救いの歴史の新しい時にあてはめます。重点が置かれるのはもはやぶどう畑で

はなく、農夫たちです。ぶどう畑の主人の「しもべたち」は、主人に代わって農夫たちから小作料の支払いを求めます。しかし、農夫たちはしもべたちを虐待し、ある人を殺してしまいます。わたしたちは選ばれた民に起きた出来事のことを考えずにいられるでしょうか。そして、神が遣わした預言者たちの運命を思わずにいられるでしょうか。ついにぶどう畑の主人は最後の試みを行います。主人は、農夫たちが息子の話なら少なくとも聞いてくれるだろうと考えて、自分の息子を送ります。しかし、結果はその逆でした。小作人たちは、それが息子、すなわち跡取りであるがゆえに、息子を殺します。そうすれば、ぶどう畑を簡単に自分たちのものにできると考えたからです。こうしてわたしたちは、社会正義が踏みにじられたことへの非難によって、イザヤの歌から質的な飛躍が生じたのを目にします。ここでは、主人が与えた秩序の無視が、主人に対する無視に変わることがわかります。それは単なる神のおきてに対する不従順ではありません。それは真に固有の意味での神に対する拒絶なのです。ここに十字架の神秘が示されます。

福音書の箇所が明らかにすることは、わたしたちの考え方、行動のしかたに問いかけます。それは、キリストの「時」、すなわち過去の十字架の神秘について語るだけでなく、あらゆる時、あらゆる時代に十字架が存在することを語ります。特にそれは、福音の告知を受けた人々に問いかけます。歴史を顧みるなら、矛盾したキリスト信者がしばしば冷たく反抗するのを目にせざるをえません。そのため、神は決して救いの約束を破ることがないとはいえ、しばしば罰を与えなければなりませんでした。そこから、わたしたちは自然に福音が最初に告げ知らされたときのことを思い起こします。そのとき、最初の活発なキリスト教共同体が生まれました。後にこの宣教は消えてなくなり、今では歴史の本の中で思い出されるだけになりました。同じことは現代にも見られるのではないでしょうか。今日、かつて信仰と召命に恵まれた国々は、現代のある種の文化の有害かつ破壊的な影響を受けて、自らのあるべき姿を見失っています。ある人々は、「神は死んだ」ことにして、自らが「神」だと宣言します。彼らは自らが自分の運命の唯一の創造者であり、世界の絶対的な主人だと考えます。神から解放され、神に救いを求めない人間は、自分は好きなことを行うことができ、自分が自らと自らの行為の唯一の基準だと考えます。しかし、人間は、自らの視野から神を追い出し、神は「死んだ」と宣言することによって、本当により幸せになるのでしょうか。自分が自分

自身の絶対的な主人であり、被造物の唯一の所有者であることを宣言することによって、人間は、自由と正義と平和が支配する社会を真の意味で築くことができるのでしょうか。毎日のニュースが詳しく示しているように、権力の専横、利己主義的な利害、不正と搾取、あらゆる形態の暴力が拡大し続けているように見えないでしょうか。結局、人間が最終的に行き着く先は、いっそう深まった孤独と、より分裂し、混乱した社会です。

しかし、イエスのことばには約束が含まれています。ぶどう畑は破壊されません。主人は不忠実な農夫がその定めに赴くがままにします。しかし彼はぶどう畑を見捨てず、それを忠実な農夫にゆだねます。これは次のことを示します。ある地域で信仰が消滅するまでに弱まっても、いつも他の人々が信仰を進んで受け入れます。だからイエスは、詩編118を引用して、わたしたちに約束します。「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」（詩編118・22）。わたしの死は神の敗北を示すのではない。イエスは殺されても、墓の中にとどまりません。むしろ、完全な敗北と思われたことが、決定的な勝利の始まりを示します。十字架上の恐ろしい受難と死の後に、復活の栄光が訪れます。それゆえ、ぶどう畑はぶどうを作り続けます。そして、主人はそれを「季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに」（マタイ21・41）貸し与えます。

道徳的・教理的・霊的な意味をもったぶどう畑のたとえは、最後の晩餐の説教の中で再び語られます。主は使徒たちに別れを告げながらこういわれたからです。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていながら、実を結ばない枝は皆、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものは皆、いよいよ豊かな実を結ぶように手入れをなさる」（ヨハネ15・1－2）。それゆえ、復活の出来事から出発して、救いの歴史は決定的な転換を経験します。その代表があの「ほかの農夫たち」です。選ばれた枝として、まことのぶどうの木であるキリストに結ばれたこの人々は、永遠のいのちの豊かな実を結びます（集会祈願参照）。キリストに結ばれた者であるわたしたちもこの「農夫たち」の一人です。キリストは自ら「まことのぶどうの木」となることを望まれるからです。祈りたいと思います。聖体のうちにご自身の血を、すなわち御自らをわたしたちに与えてくださる主の助けによって、わたしたちが永遠のいのちのため、現代のために「実を結ぶ」ことができますように。

この聖書の箇所からわたしたちが与えられる慰めのメッセージは、次の確信です。最後に勝利を収めるのは悪と死ではありません。最後に勝利を収めるのはキリストです。それはいつもいえることです。教会は倦むことなくこの福音を告げ知らせます。今日も、この異邦人の使徒にささげられた大聖堂で行っているように。異邦人の使徒は小アジアとヨーロッパの広大な地域に初めて福音を伝えました。わたしたちは「教会生活と宣教における神のことば」をテーマとした世界代表司教会議第12回通常総会の中で、この宣教を意味のあるしかたで新たにします。ここでわたしは皆様に心からごあいさつ申し上げたいと思います。親愛なるシノドス教父の皆様。そして、専門家、オブザーバー、特別招待者としてこの会議に参加される皆様。さらに、他の教会・教会共同体の友好使節をお迎えできてうれしく思います。わたしたちは皆、この数か月の間大変な作業をしてくださったシノドス事務総長とその協力者のかたがたに感謝するとともに、これからの数週間になさるご苦労のためにも御礼を申し上げます。

神は、語りかけるときに、いつもこたえを求めます。神の救いのわざは人間の協力を求めます。神の愛は返事を期待しています。親愛なる兄弟姉妹の皆様。聖書のことばがぶどう畑について語ることは、起きてはならないことです。「よいぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった」（イザヤ５・２参照）。人間の心を奥底から造り変えることができるのは神のことばだけです。ですから、一人ひとりの信者と共同体が神のことばにいっそう親しむことが大事です。シノドス総会は教会生活と宣教にとって根本的なこの事実に目を向けます。神のことばに養われることは、教会にとって第一の根本的な務めです。実際、福音を告げ知らせることが教会の存在理由であり、使命であるなら、教会が自らの告げ知らせることを知り、生きることは不可欠です。それは、たとえ教会に属する者が無力で貧しくても、教会の宣教が信頼に足るものとなるためです。さらにわたしたちはこのことを知っています。キリストの学びやにおいて、みことばの宣教の内容は、神の国ですが（マルコ１・14－15参照）、神の国とはイエスという人ご自身です。イエスはそのことばとわざによって、すべての世の人に救いをもたらすからです。このことに関連して、聖ヒエロニモ（347－419／420年）の考察は興味深いものです。「聖書を知らない人は神の力も神の知恵も知らない。聖書を知らないことはキリストを知らないことである」（『イザヤ書注解』序文：

PL 24, 17)。

この聖パウロにささげた年にあたって、わたしたちは特別に異邦人の使徒の切迫した叫び声が響き渡るのを感じます。「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」（一コリント９・16)。この叫び声はすべてのキリスト者にとって、キリストへの奉仕に身をささげるようにという絶え間ない招きとなります。神である師は今日も繰り返していわれます。「収穫は多い」（マタイ９・37)。いまだにキリストと出会っておらず、これから福音が告げ知らされるのを待つ多くの人がいます。キリスト教的な教育を受けながら、熱意を失って、神のことばに表面的なかたちで触れるにすぎない人もいます。信仰に基づく行いから遠ざかって、新しい福音宣教を必要とする人もいます。また、正しい思いを抱く人も少なからずいます。彼らは生と死の意味に関する根本的な問いを発します。この問いに完全にこたえることのできるのはキリストだけです。ですから、すべての大陸に住むキリスト信者にとって不可欠なのは、自分の抱いている希望について説明を要求する人に、いつでもこたえられるよう備えていることです（一ペトロ３・15参照)。そして、喜びをもって神のことばを告げ知らせ、妥協することなく福音を生きなければなりません。

親愛なる敬愛すべき兄弟の皆様。主の助けによって、わたしたちがこれから数週間のシノドスの間、どうすればより効果的に現代において福音を告げ知らせることができるかを自らに問いかけることができますように。わたしたちは皆、神のことばをわたしたちの生活の中心に置くことがどれほど必要であるかを知っています。それは、わたしたちの唯一のあがない主であり、神の国を自ら実現したかたであるキリストを受け入れ、キリストの光を人間のいるあらゆるところで輝かせるためです。すなわち、家庭から学校、文化、職場、余暇、その他、社会と人生のさまざまな分野に至るまでです。わたしたちは感謝の祭儀にあずかりながら、神のことばを告げることと聖体のいけにえとが密接に結ばれていることをいつも自覚します。それは、わたしたちが観想するよう与えられる同じ神秘です。だから、第二バチカン公会議が明らかにしたように、「教会は主の聖体と同様に、聖書を常に尊敬し、特に典礼において不断に、ことばの食卓と聖体の食卓とからいのちの糧を取り、信者にも与えてきた」のです。公会議は適切にも終わりに次のようにいいます。「聖体の秘義にしばしばあずかることによって、教会の生命が成長するよう

に、『永遠に変わることがない』神のことばに対する尊敬が高まることによって、霊的生活への新しい刺激を期待することができる」（『神の啓示に関する教義憲章』21、26）。

主の恵みによって、わたしたちが、みことばの食卓とキリストのからだと血の食卓という二つの食卓に近づくことができますように。「これらの出来事をすべて心に納めて、思いめぐらしていた」（ルカ２・19）至聖なるマリアの執り成しによって、わたしたちがこの恵みを得ることができますように。聖書に耳を傾け、思いと心を切り離すことなく、内的に成長しながら聖書のことばを思いめぐらすことを、マリアがわたしたちに教えてくださいますように。また、聖人たち、特に使徒パウロもわたしたちを助けてくださいますように。今年わたしたちは、使徒パウロが神のことばの恐れを知らない証人また使者であることをますます知ろうとしているからです。アーメン。

6．10月5日の「お告げの祈り」のことば

教皇ベネディクト十六世

教皇ベネディクト十六世は、10月5日午前9時30分からサン・パオロ・フオリ・レ・ムーラ大聖堂で、世界代表司教会議（シノドス）第12回通常総会の開会ミサを司式した後、正午に、教皇公邸書斎の窓から、サンピエトロ広場に集まった信者とともに「お告げの祈り」を行った。以下は、祈りの前に教皇が述べたことばの全文の翻訳（原文イタリア語）。

「お告げの祈り」の後、教皇は、シノドスに関連した聖書朗読マラソンの企画の開催について、イタリア語で次のように述べた。

「今晩から、イタリア放送協会（RAI）による特別番組が始まります。この番組は『昼夜の聖書』というものです。この番組では、今日から10月11日までの7日7晩、テレビ中継による聖書全巻の連続朗読を行います。朗読は、ローマのサンタ・クローチェ・イン・ジェルザレンメ大聖堂で行われます。朗読するのは50か国の約1200人です。朗読者の一部はエキュメニカルな基準で選ばれましたが、大部分は進んで申し込んだ人々です。この番組は神のことばに関する司教シノドスに大変ふさわしいものです。そしてわたしも創世記の第1章の冒頭を朗読します。これはイタリア放送協会の1チャンネルで午後7時から放送されます。こうして神のことばは家庭に入り、家族と一人ひとりの人の生活に同伴することができます。適切に受け入れるなら、この種はかならず豊かな実を結ぶことでしょう」。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。

今朝、サン・パオロ・フオリ・レ・ムーラ大聖堂で行われたミサをもって、世界代表司教会議（シノドス）第12回通常総会が開会しました。このシノドスは、「教会生活と宣教における神のことば」をテーマとして、3週間にわたってバチカンで行われます。この特別な司教会議の意味と役割を皆様はご存じです。シノドス教父は全司教団を代表して選ばれます。司教たちは、ペトロの後継者を力強く支えるために集まって、教会の交わりを示し、また強めます。シノドスは、わたしの敬愛すべき前任者である神のしもべパウロ六世が第二バチカン公会議の最終会期中の1965年9月に設置した重要な機関

です（自発教令『アポストリカ・ソリチトゥード』参照）。それは、公会議の司教の任務に関する教令に書かれた指示を実現するためでした（『教会における司教の司牧任務に関する教令』5参照）。シノドスの目的はこれです。教皇と全世界の司教の緊密な一致と協力を助長すること。教会の状況と問題に関する直接かつ正確な情報を提供すること。教理や司牧活動に関する一致を助長すること。そして、重要性が大きい、現代的なテーマを考察することです。このさまざまな課題が常設の事務総局によって調整されます。事務総局はローマ司教の権限に直属しながら活動します。

シノドスの役割は教会にとって不可欠なものです。シノドスではすべての民族と文化がキリストのうちに一つになり、キリストに従って歩むために集まります。キリストはこういわれたからです。「わたしは道であり、真理であり、いのちである」（ヨハネ14・6）。実際、「シュノドス」というギリシア語は「ともに」を意味する「シュン」という接頭辞と、「道」を意味する「ホドス」から成ります。それゆえこのことばは「ともに道を歩む」という理想を表します。これはまさに救いの歴史において神の民が経験したことにほかなりません。今日から始まるシノドス通常総会のために、わたしは、権限のある人々の意見を取り入れて、神のことばをテーマとして選びました。それは、教会生活と宣教の中で、司牧的な観点から神のことばを深めるためです。広く全世界の部分教会がシノドス事務総局に意見を送ることにより、準備段階に参加しました。そこからシノドス事務総局は「討議要綱」を作成しました。この文書を253人のシノドス教父が考察します。シノドス教父の内訳は、アフリカから51名、アメリカから62名、アジアから41名、ヨーロッパから90名、オセアニアから9名です。これに、多くの男性と女性の専門家とオブザーバー、他の教会・教会共同体の「友好使節」、幾人かの特別招待者が加わります。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。皆様にお願いします。どうか皆様の祈りをもってシノドスの議論を支えてください。特におとめマリアの母としての執り成しを願い求めてください。おとめマリアは神のことばの完全な弟子だからです。

7．髙見三明大司教の発表

シノドス６日目の10月10日（金）午前に開催された第8回全体会議で、日本からの代表者である、長崎大司教区の髙見三明大司教の発表が行われた。以下はその発表内容全文である（原文は英語）。ただし、時間の都合上４の２）までしか発表できなかった。

今年は第二バチカン公会議の閉会ならびに『神の啓示に関する教義憲章』発布後43年にあたる。聖書に関する基礎知識の普及と聖書の司牧分野に関しては、さまざまなかたちで大きな進展が見られるものの、全教会がまだまだ多くの課題を抱えている。

わたしはいくつかの提言を申し上げるにとどめたいと思う。

1．聖書の統合的理解を目指す

シノドスは、旧約聖書と新約聖書のつながり、旧約聖書の難解な箇所の真の意味の読み取り、啓示の発展を考慮した聖書全体の明快な説明などについて、世界的視野で指導し、理解を促す必要がある。啓示、教導職、信条、典礼との有機的関係も考える必要がある。したがって、「聖書解釈学の適当な方法を奨励すること」（序論5番）も大切である。

2．聖体と聖書の関連についての明快な説明

聖体と聖書の密接な関連を理論的に説明すると同時に、生活の中でどのように結びつけるかを示す。

3．信仰教育（カテケージス）と聖書の関係

教会はかつて教義の証明のために聖書を単に援用していた嫌いがある。またこれまでは要理教育が重要視されてきた（その点『カトリック教会のカテキズム』は聖書と聖伝とのつながりを考慮し、聖書と要理を統合した理想のかたちに近づけようとしていると思われる）。しかし、これからは信仰を支えるためにまずは聖書と向き合うという姿勢が大切であろう。ところが、現段階ではまだ聖書を軸とした要理教育はまとめ上げられていない。

信仰宣言の根拠づけを聖書で補強するのではなく、聖書を出発点として信仰に向き合うよう指導することが今後の課題である。特に若者たちの信仰養成で聖書を生かすことが重要である。ただし、聖書が典礼や教会の教えと歴史の中で理解されてきたことも忘れてはならず、聖書偏重は避けるべきである。

4．生活と聖書の関係

キリスト者は、一般的にまだ、信仰を生きるために聖書を十分活かしているとはいえない。レクチオ・ディヴィナだけでは不十分であり、みことばを生活と結びつけながら理解し、それを互いに分かち合い、生活に生かすことが重要である。現実の中に神の働きがあるということを読み取ることが重要なので、もっと自分自身で読み取り、伝えていかなければならないだろう。聖書が信者の信仰生活に浸透し、それを生かすようになるためには具体的にどうすればよいか、これはこれからも継続して取り組むべき大きな課題である。

1）教皇が使徒的勧告を通して全世界のキリスト者が聖書に親しむよう強く勧める

シノドスとして、「教皇が全世界のキリスト者に対して、聖書を読み、黙想し、分かち合うことを強く勧めること」を進言する。

2）聖書の分かち合いの方法の紹介と解説

聖書の分かち合いの方法をまとめて具体的に紹介し、その中から選択して利用できるようにする。

3）モンセニョール・アンソニー・アベラ著『レクティオ・ディヴィナで味わう主日の福音・B年』（日本聖書協会発行）

今回のシノドスのために書かれたこの本の日本語訳が今年の待降節前に発行される予定。このような本の出版が促進されることが望ましい。

5．「世界の貧しい人に慰めと希望を与えること」

これは、提題解説の序論5番でシノドスの主要な目的の一つして挙げられているが、本文に反映されていない。貧困問題は現代世界の深刻な問題の

一つである。全世界の教会の実践の中から吸い上げられた回答をもとにして、シノドスで、聖書が苦しむ人、悩む人、貧しい人にとって真に慰めと希望になるための具体策が示されることを求める。

8．教皇ベネディクト十六世の発表

教皇ベネディクト十六世は、10月14日（火）午前、世界代表司教会議（シノドス）第12回通常総会の第14回全体会議で、予定にない発表を行った。以下はその全訳（原文はイタリア語）。教皇のこの発表は、10月25日（土）に発表された「提言」25－27に取り入れられている。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。わたしはイエスに関する著作（『ナザレのイエス』）を執筆することによって、現代の釈義がもたらしてくれる利点を広く知ることができたと同時に、問題点と危険も知ることができました。『神の啓示に関する教義憲章』12は、適切な釈義を行うための二つの方法論的な指針を与えています。第一に、同文書は歴史的・批判的な方法の使用の必要性を確認します。これについて同文書は本質的な要素について簡単に述べています。この必要性はヨハネ1・14で定式化されたキリスト教の原則に基づきます。「ことばは肉となった（Verbum caro factum est）」。歴史的事実はキリスト教信仰を構成する不可欠な側面です。救いの歴史は神話ではなく、真の歴史です。それゆえそれは、真剣な歴史的探究方法によって研究されなければなりません。

しかしながら、救いの歴史はもう一つの側面をもっています。すなわち、それが神のわざだという側面です。そのため『神の啓示に関する教義憲章』は、みことばを正しく解釈するために必要な第二の方法論的側面について述べます。みことばは人間のことばであると同時に、神のことばだからです。あらゆる文学テキストの解釈の根本的な原則に従って、公会議はいいます。聖書は、それによって聖書が書かれたのと同じ霊によって解釈しなければなりません。そこから公会議は、聖書の神的・霊的側面を適切に考慮するのに役立つ三つの根本的な方法論的要素を指摘します。すなわち、（1）聖書全体の統一性を考慮しながらテキストを解釈しなければなりません。現代ではこれは正典的釈義と呼ばれます。公会議の時代にこの用語はまだ存在していませんでしたが、公会議は同じ意味のことを述べています。すなわち、聖書全体の統一性を考慮に入れなければならないということです。（2）教会全体の生きた伝統を考慮しなければなりません。そして最後に（3）信仰の類比を

考えなければなりません。歴史的・批判的方法と、神学的方法という、この二つの方法論的なレベルを考慮したときに初めて、神学的釈義について語ることができます。これが聖書に適した釈義です。第一のレベルにおいて、現代の学問的釈義はきわめて高度なレベルで行われ、実際に役立っています。しかし、同じことをもう一つのレベルについていうことはできません。『神の啓示に関する教義憲章』が述べた三つの神学的要素を含んだ第二の方法論的レベルが存在しないように思われることもしばしばです。このことはきわめて深刻な帰結をもたらします。

第二の方法論的レベルの不在がもたらす第一の帰結は、聖書が単なる過去についての書物となるということです。そこから道徳的な帰結が生じる場合があります。たとえ歴史を学ぶことができても、そのような書物は過去について語るにすぎません。そして、釈義はもはや真の意味での神学的釈義ではなく、純粋に資料批判的・文学批判的な釈義となります。これが第一の帰結です。つまり、聖書が過去にとどまり、過去についてだけ語るということです。第二の帰結はさらに重大です。『神の啓示に関する教義憲章』に示された信仰の解釈学が消えると、必然的にもう一つの種類の解釈学が現れてきます。すなわち、世俗的、実証主義的な解釈学です。この解釈学の根本的な要素は、神的なものが人間の歴史に現れることはないという確信です。この解釈学によればこうなります。もしも神的な要素があるように思われたなら、そのような印象がどこから来るのかを説明しなければなりません。そして、すべてを人間的な要素に還元しなければなりません。そこから、神的な要素の歴史性を否定する解釈が生まれます。たとえば、現代ドイツの釈義のいわゆる「主流派」は、主が聖体を制定したことを否定します。そして、イエスの亡骸は墓に置かれたままだといいます。復活は歴史的な出来事ではなく、神学的なものの見方にすぎなくなります。これは、信仰の解釈学がないために生じたことです。そこで、世俗的・哲学的解釈学が成功を収めます。この世俗的・哲学的解釈学は、神的なものが歴史の中に現実に入り、存在しうることを否定します。第二の方法論的なレベルの不在の結果こそ、学問的釈義と「霊的読書（レクチオ･ディヴィナ）」の深い断絶を生み出したものです。ここから、場合によって、説教を準備する際にある種の混乱が生じることもあります。釈義が神学的な釈義でない場合、聖書は神学の中心となりえません。逆もまた真実です。神学が本質的な意味で教会の中で行われる聖書の解釈でなくな

れば、このような神学はもはや基盤をもたないものとなります。

それゆえ、教会生活と宣教にとって、また信仰の未来にとって、釈義と神学のこのような対立を克服することが絶対に必要です。聖書神学と組織神学は、わたしたちが神学と呼ぶ唯一の現実の二つの側面です。ですから、提言の一つが、釈義において『神の啓示に関する教義憲章』12で指摘された二つの方法論的なレベルを考慮しなければならないことに触れるのが望ましいと思われます。『神の啓示に関する教義憲章』12は歴史的釈義だけでなく、神学的釈義も発展させることを述べているからです。それゆえ、このような意味で将来の釈義家を養成していくことが必要です。それは、聖書の宝を現代世界とわたしたち皆のために真の意味で開いていけるようにするためです。

9．最終メッセージ（要約）

世界代表司教会議第12回通常総会は、10月24日（金）午前9時から始まった第21回全体会議で「最終メッセージ」を承認し、これを同日発表した。最終メッセージが長いため、シノドス教父の要望で要約が作成された。以下に訳出したのはその「要約」の全文（原文はイタリア語）。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。

「至るところでわたしたちの主イエス·キリストの名を呼び求めているすべての人とともに……イエス·キリストは、この人たちとわたしたちの主であります。わたしたちの父である神と主イエス·キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」（一コリント1・2－3）。わたしたちがパウロ年をささげているこの使徒パウロのあいさつによって、世界代表司教会議（シノドス）第12回通常総会に教皇ベネディクト十六世とともにローマに集まったわたしたちシノドス教父は、シノドスの議論の中心である、神のことばに関する考察と提言に満ちたメッセージを皆様に送ります。

このメッセージを、まず司牧者と、多くの寛大なカテキスタ、そして、聖書を愛を込めて聞き、読むために皆様を指導するすべての人にゆだねます。今、皆様のために、このテキストの中心と本質の概要を説明します。それは、このメッセージが皆様の神のことばへの知識と愛を深めることができるようにするためです。わたしたちは四つの中心となる地平を知っていただくように皆様を招きます。この地平をわたしたちは多くのイメージで表しました。

第一は、神の声です。神の声は創造の初めに響き渡り、無の沈黙を破り、驚くべき世界を造り出しました。この声は歴史をも貫きます。歴史は人間の罪によって傷つき、苦しみと死によって混乱しました。主はまた人間とともに歩み、その恵みと契約と救いを与えました。神の声は聖書の中にも入りました。教会は今も聖霊に導かれながら聖書を読みます。聖霊は教会とその司牧者に真理の光として与えられるからです。

さらに、聖ヨハネがいうように、「ことばは肉となった」（ヨハネ1・14）。ここにイエス・キリストのみ顔が現れます。イエス・キリストは、永遠にして限りない神の子でありながら、歴史と、民族、土地に結ばれた、死すべき

人間でもあります。彼は死に至るまで、労苦の多い人間の人生を生きましたが、栄光のうちに復活して、とこしえに生きておられます。イエス・キリストはわたしたちと神のことばとの出会いを完成します。彼は聖書の「完全な意味」と統一性をわたしたちに示します。それゆえ、キリスト教は、イエス・キリストという人格を中心とした宗教です。イエス・キリストは父を現してくださったかただからです。彼は聖書が「肉」すなわち人間のことばであることをわたしたちに悟らせてくれます。わたしたちはこの人間のことばを、その表現方法によって理解し、学ばなければなりません。しかし、この人間のことばはまた、その中に神の真理の光を保ちます。わたしたちはこの神の真理の光を、聖霊の力によって、初めて生き、観想することができます。

この神の霊がわたしたちを第三の中心点へと導きます。すなわち、神のことばの家である、教会です。教会は、聖ルカがいうように（使徒言行録２・42)、四つの柱によって支えられます。まず「教え」です。「教え」とは、聖書を読んで理解することです。これは、すべての人に対する宣教、カテケージス、思いにも心にも訴えかける説教を通じて行われます。第二は「パンを裂くこと」、すなわち聖体です。聖体は教会生活と宣教の源泉と頂点です。かつてエマオで行われたように、信じる者は神のことばの食卓と聖体の食卓の典礼で養われるよう招かれます。第三の柱は「詩編と賛歌と霊的な歌」（コロサイ３・16）による「祈り」です。これにはまず時課の典礼があります。時課の典礼は、キリスト教の日々の流れにリズムを与えるための教会の祈りです。また、「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ)」があります。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ)」は祈りのうちに聖書を読むことです。それは、黙想と祈りと観想を通じて、生きた神のことばであるキリストと出会うことを可能にします。最後は「兄弟の交わり」です。真のキリスト信者とは、「神のことばを聞く」だけでなく、愛のわざによって「それを行う」（ルカ８・21）人だからです。神のことばの家の中で、わたしたちは他の教会･教会共同体の兄弟姉妹とも出会います。これらの兄弟姉妹は、いまだに分裂していても、神のことばへの崇敬と愛のうちに、完全な一致ではないにしても、真実な一致を生きています。

こうしてわたしたちは霊的道のりの最後の段階に達します。それは、神のことばが歩む道です。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。‥‥あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教

えなさい。……耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい」（マタイ28・19－20、10・27）。神のことばは世の通りを走らなければなりません。現代において、この通りとは、コンピューター、テレビ、バーチャル（仮想現実的な）メディアでもあります。聖書は家庭の中に入らなければなりません。両親と子どもが聖書を読み、聖書で祈り、聖書を人生の歩みを照らすともしびとするためです（詩編119・105参照）。聖書は学校や文化の領域にも入らなければなりません。聖書は数世紀にわたって、芸術、文学、音楽、思想、公衆道徳の主要な基準となってきたからです。聖書の豊かな象徴、詩、物語は、醜悪で下劣なもので汚れた世界にあって、信仰にとっても文化にとっても美のしるしとなります。

しかし、聖書はさまざまな苦しみをもわたしたちに示します。地上で生じたこれらの苦しみは、しいたげられた人々の叫び、悲惨のうちにある人の嘆きとなります。この苦しみの頂点にあるのが十字架です。十字架上で、ひとり見捨てられたキリストは、もっともむごたらしく悲惨な苦しみと死を味わいます。このように神の子がともにいてくださることによって、悪と死の暗闇を、復活の光と栄光への希望が照らします。しかし、他の教会･教会共同体の兄弟姉妹もこの世の道をわたしたちとともに歩みます。これらの兄弟姉妹は、いまだに分裂していても、神のことばへの崇敬と愛のうちに、完全な一致ではないにしても、真実な一致を生きているからです。この世の道において、わたしたちは諸宗教を信じる人々ともしばしば出会います。これらの人々も、彼らの聖典の教えに聞き従って、それを忠実に実行し、わたしたちとともに平和と光に満ちた世界を築くことができます。なぜなら、「神は、すべての人が救われて真理を知るようになることを望んでおられる」（一テモテ２・４）からです。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。自分の家庭の中で聖書を保管し、読み、研究し、完全に理解してください。聖書を祈りと生活のあかしに変えてください。典礼の中で、愛と信仰をもって聖書に耳を傾けてください。沈黙して、主のことばをよく聞けるようにしてください。聞いてから沈黙してください。主のことばがあなたがたのうちに住み、あなたがたに語りかけ続けてくださるようにするためです。一日の初めに神のことばを聞いてください。神のことばが最初のことばとなるためです。夕べに神のことばを聞いてください。神のことばが最後のことばとなるためです。

「今、神とその恵みのことばとにあなたがたをゆだねます」（使徒言行録20・32）。エフェソの教会の指導者への別れのあいさつの中で聖パウロが用いたのと同じことばで、シノドス教父も、世界中に散らばる共同体の信者の皆様を神のことばにゆだねます。神のことばは、裁きであると同時に、何よりも恵みです。それは剣のように鋭いと同時に、蜂の巣のように甘美です。神のことばは力強く、栄光に満ち、イエスのみ手によって歴史を歩むわたしたちを導きます。あなたがたはこのかたをわたしたちと同じように「変わらぬ愛をもって愛しています」（エフェソ6・24参照）。

10. 最終メッセージ

世界代表司教会議第12回通常総会は、10月24日（金）午前9時から始まった第21回全体会議で「最終メッセージ」を承認し、これを同日発表した。以下に訳出したのはその全文（原文はイタリア語）。

世界代表司教会議（シノドス）第12回通常総会から神の民へのメッセージ

兄弟姉妹の皆様。「平和と、信仰を伴う愛が、父である神と主イエス・キリストから、兄弟たちにあるように。恵みが、変わらぬ愛をもってわたしたちの主イエス・キリストを愛する、すべての人とともにあるように」。聖パウロはこの激しく情熱的なあいさつをもってエフェソの信徒への手紙を結びます（エフェソ6・23－24）。教皇ベネディクト十六世の指導のもとに、世界代表司教会議（シノドス）第12回通常総会に集まったわたしたちシノドス教父も、同じことばをもってメッセージを始めます。このメッセージは、世界のさまざまな地域で弟子としてキリストに従い、変わらぬ愛をもってキリストを愛し続けるすべての人々に広く呼びかけます。

わたしたちは神のことばの声と光をこの人々にあらためて示します。次のいにしえの呼びかけを繰り返しながら。「みことばはあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる」（申命記30・14）。神ご自身も一人ひとりの人にいわれます。「人の子よ、わたしがあなたに語るすべてのことばを心におさめ、耳に入れておきなさい」（エゼキエル3・10）。わたしたちはこれから4段階から成る霊的な歩みを示します。この歩みは世々とこしえに限りない神から、わたしたちの家、わたしたちの住む町の通りへとわたしたちを導きます。

一　神の声――啓示

1　「主は火の中からあなたたちに語りかけられた。あなたたちは語りかけられる声を聞いたが、声のほかには何のかたちも見なかった」（申命記4・12）。モーセはこう語って、シナイの荒れ野の人里離れたところでイスラエルの民が経験したことを思い起こさせます。主は、像、肖像、あるいは金の

牛のような立像としてではなく、「声」としてご自身を示しました。創造の初めに現れたのも声でした。声は無の沈黙を破りました。「初めに……神はいわれた。『光あれ』。こうして、光があった。……初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。……万物はことばによって成った。成ったもので、ことばによらずに成ったものは何一つなかった」（創世記１・１、３、ヨハネ１・１、３）。

創造は、古代メソポタミアの神話が語るように、神々の戦いから生じたのではありません。創造はことばによって生じました。ことばは無を打ち破り、存在を造り出したからです。詩編作者はいいます。「みことばによって天は造られ、主の口の息吹によって天の万象は造られた。……主がおおせになると、そのように成り、主が命じられると、そのように立つ」（詩編33・6、9）。聖パウロも繰り返していいます。神は「死者にいのちを与え、存在していないものを呼び出して存在させる」（ローマ４・17）。このようにして、最初の「宇宙的な」啓示が示されます。この啓示は、全人類の前に開かれた大きな書物のように被造物を造ります。わたしたちはこの書物の中に造り主のメッセージを読み取ることができます。「天は神の栄光を語り、大空はみ手のわざを示す。昼は昼に語り伝え、夜は夜に知識を送る。話すことも、語ることもなく、声は聞こえなくても、その響きは全地に、そのことばは世界の果てに向かう」（詩編19・２－５）。

２　しかし、神のことばは人類の歴史の起源でもあります。神は「ご自分にかたどって」（創世記１・27）人を造りました。人は自らのうちに神の刻んだ像をもっています。だから人は、造り主と語り合うこともできれば、罪によって神から離れ、神を拒むこともできます。それゆえ、神のことばは人を救うとともに裁きます。さまざまな出来事を織り交ぜた歴史の織物の中に分け入ります。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、……彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地……へと彼らを導き上る」（出エジプト記３・７－８）。それゆえ神は人間の出来事のうちにおられます。人間の出来事は、歴史の主であるかたのわざを通じて、大きな救いの計画に組み込まれます。それは「すべての人々が救われて真理を知るようになる」（一テモテ２・４）

ためです。

3　ですから、力があり、創造し、救いをもたらす神のことばは、存在、歴史、創造、あがないの基盤です。主は人類に向かっていいます。「主であるわたしがこれを語り、行った」(エゼキエル37・14)。それから最後に、神のことばは書かれたことば(グラフェー、グラファイ)、すなわち聖書となります。新約聖書でいわれるとおりです。すでにモーセが山を下るとき、「二枚の掟の板が彼の手にあり、板には文字が書かれていた。その両面に、表にも裏にも文字が書かれていた。その板は神ご自身が作られ、筆跡も神ご自身のものであり、板に彫り刻まれていた」(出エジプト記32・15－16)。モーセもイスラエルにこの「掟の板」を守り、あらためて書くように命じます。「あなたは石の上にこの律法のことばをすべてはっきりと書き記しなさい」(申命記27・8)。

聖書は書かれた文字のかたちで神のことばをあかしします。聖書は正典と歴史と文字を通じて、創造し、救いをもたらす啓示の出来事を記念します。それゆえ、神のことばは聖書に先立ち、また聖書を超えたものです。聖書はそれ自体、「神の霊感によって書かれ」、力のある神のことばを含みます(二テモテ3・16参照)。だからわたしたちの信仰の中心は書物ではなく救いの歴史であり、以下に示すように、イエス・キリストという人格なのです。イエス・キリストは、肉となり、人となり、歴史となった神のことばだからです。神のことばの力は聖書を包み、聖書を超えています。だからこそ、「あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」(ヨハネ16・13)聖霊が常に、聖書を読む人とともにいてくださることが必要です。これが偉大な聖伝です。聖伝とは、教会の中に「真理の霊」がともにいてくださることです。教会は聖書の守護者です。聖書は教会の教導職によって正しく解釈されるからです。この聖伝によって教会は神のことばを理解し、解釈し、伝え、あかしすることができます。聖パウロも、最初のキリスト教の信条を宣べ伝えるとき、聖伝から「受けた」ものを「伝え」なければならないことを認識していました(一コリント15・3－5)。

二　みことばのみ顔――イエス・キリスト

4　それはギリシア語原文では3つの基本的なことばにすぎません。「ロゴ

ス・サルクス・エゲネト（ことばは肉となった）」。しかし、これはヨハネによる福音書の序文という詩的・神学的な宝石の頂点であるだけでなく（ヨハネ1・14）、キリスト教信仰の中心でもあります。永遠の神のことばが空間と時間の中に入り、人間の顔と姿をとりました。そこで、人はこのかたに直接近づいて、エレサレムにいた何人かのギリシア人のように、こう願うことができるようになりました。「イエスにお目にかかりたいのです」（ヨハネ12・20－21）。顔をもたないことばは不完全です。それは完全な出会いを実現することがありません。悲惨な探求の歩みの末に、ヨブがこう述べたとおりです。「あなたのことを耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます」（ヨブ42・5）。

キリストは「神とともにあり」、「神であった」みことばです（ヨハネ1・1）。「見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれたかたです」（コロサイ1・15）。しかしキリストはナザレのイエスでもあります。ナザレのイエスは、ローマ帝国の辺境の属州を歩み、方言を話し、ユダヤ人という一民族とその文化の特徴を表しました。それゆえ、イエス・キリストは実際に壊れやすく、死すべき肉体をもっていました。歴史であり、人間でした。しかし彼は同時に栄光ある神の神秘です。いまだかつて見た者のいない神をわたしたちに示したかたです（ヨハネ1・18参照）。神の子は墓の中に死体として置かれているときも、そのようなかたであり続けます。そして、復活はこのことの生きた明確な証拠です。

5　キリスト教の伝統は、肉となった神のことばを、書物となった神のことばとしばしば対比してきました。それはすでに信条のうちに見られます。信条はこう告白します。神の子は「聖霊によっておとめマリアよりからだを受け、人となられました」。同じ信条はまたこう告白します。「聖霊は預言者をとおして語られました」。第二バチカン公会議は――聖アンブロジオ（339頃－397年）がいうように（『ルカ福音書注解』：*Expositio Evangelii secundum Lucam*, VI, 33）――「御子のからだはわたしたちに伝えられた聖書である」というこの古代の伝統を受け入れて、はっきりとこう宣言します。「実際、かつて永遠の父のみことばが、人間の弱い肉をつけて、人々に似たものとなったように、人間の用語で表された神のことばは、人間の話に酷似するものとなっている」（『神の啓示に関する教義憲章』13）。

実際、聖書は「肉」、「文字」でもあります。聖書は特殊な言語、文学的・歴史的形式、古代文化と結びついた概念によって書かれています。聖書はしばしば悲惨な出来事の記憶をとどめています。血と暴力の跡が刻まれていることも稀ではありません。聖書の中には、人々の笑いも、流す涙も、苦しむ人の叫びも、愛する人々の喜びもこだましています。そのため、聖書の「肉の」側面は歴史的・文学的分析を必要とします。こうした分析は聖書釈義学が提供するさまざまな方法・技術によって行われます。聖書を読む人は皆、たとえほとんど学識のない人でも、聖書に関する適切な知識をもつ必要があります。そして、みことばは具体的な言語によって表現されていることに留意しなければなりません。人々がみことばを聞き、理解するためには、この具体的な言語に従い、慣れなければならないからです。

これは必要な手続きです。もしこの手続きを怠るなら、根本主義（ファンダメンタリズム）に陥る可能性があります。根本主義は、実際に、歴史における神のことばの受肉を否定し、神のことばが聖書の中で人間の言語によって表されることも、この人間の言語を解読し、研究し、理解しなければならないことも認めません。そして、神の霊感は人間の著者の歴史的特徴や個人的性格を消し去らないことを無視します。しかし、聖書は永遠の神のことばでもあります。だから聖書は聖霊が与えるもう一つの理解も必要とします。聖霊は、人間の言語のうちに存在する神のことばの超越的な側面を明らかにするからです。

6　それゆえ、ここに「教会の生きた聖伝全体」（『神の啓示に関する教義憲章』12）と、聖書を統一的に完全なしかたで理解する信仰の必要性があります。「文字」だけに注目するなら、聖書は単なる過去に関する立派な文書、すなわち、過去の高貴さと倫理と文化の証言にすぎないものになります。一方、受肉を除外するなら、あいまいな根本主義か、ぼんやりとした精神主義ないし心理主義に陥る可能性があります。それゆえ、釈義の知識を霊的・神学的伝統としっかり結びつける必要があります。イエス・キリストと聖書の神的・人間的統一性を壊さないようにするためです。

このような調和を回復することによって、キリストのみ顔が完全に輝き、わたしたちがもう一つの統一性を見いだすのを助けてくれます。このもう一つの統一性とは、聖書の深く緊密な統一性のことです。聖書は73書から成

りますが、それらは唯一の「正典」、神と人類の唯一の対話、唯一の救いの計画を構成します。「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」（ヘブライ１・１－2）。こうしてキリストは救いの歴史の展開全体にさかのぼって光を当て、この救いの歴史の一貫性、意味、方向を示します。

キリストは世々にわたって行われ、聖書の中であかしされている、神と被造物の対話の封印であり、その「アルファであり、オメガ」（黙示録1・8）です。この最後の封印の光に照らされることによって、モーセと預言者のことばは「完全な意味」をもちます。イエスご自身がこのことを明らかにしました。春の午後、エルサレムからエマオの町に向かう道で、クレオパとその友人と語り合いながら、イエスは「聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明された」（ルカ24・27）からです。

神のことばがみ顔をもったことが、啓示の中心です。だからこそ、聖書を知ることの究極的な目的は「倫理的な選択や高邁な思想ではなく、ある出来事との出会い、ある人格との出会いです。この出会いは、人生に新しい展望と決定的な方向づけを与えるからです」（教皇ベネディクト十六世回勅『神は愛』1）。

三　みことばの家――教会

旧約の神の知恵が人々の町に家を建て、7本の柱で家を支えたように（箴言9・1参照）、神のことばは新約においても家を建てます。教会の模範はエルサレムの共同体です。教会はペトロと使徒たちの上に築かれました。そして、今日も教会は、ペトロの後継者と交わりをもつ司教を通じて、神のことばを保ち、告げ知らせ、解釈し続けます（『教会憲章』13参照）。使徒言行録（同2・42）の中で、ルカは4本の理想の柱の上に築かれた建物を示します。「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」。

7　第一の柱は、使徒の教え（ディダケー）、すなわち神のことばの宣教です。実際、使徒パウロはわたしたちに勧告します。「信仰は聞くことにより、しか

も、キリストのことばを聞くことによって始まるのです」（ローマ10・17）。使者の声は教会から来ます。教会は「ケリュグマ（宣教のことば）」、すなわち、イエスご自身が公生活の初めに告げ知らせた最初の根本的な知らせを示します。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ1・15）。使徒たちは、キリストの死と復活を宣べ伝えながら、神の国の始まりを、すなわち、神が人間の歴史に決定的なしかたで介入したことを告げました。「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」（使徒言行録4・12）。キリスト信者はこの希望を「穏やかに、敬意をもって、正しい良心で」あかしします。拒絶と迫害の嵐に巻き込まれ、おそらくは打ち負かされることを覚悟しながら。なぜなら、キリスト信者は「善を行って苦しむほうが、悪を行って苦しむよりはよい」（一ペトロ3・16－17）ことを知っているからです。

それから、教会の中でカテケージス（信仰教育）が行われます。それは、キリスト信者が「みことばの光の下にキリストの神秘の理解を深め、人間全体がその光に照らされるようにする」（教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『要理教育』20）ためです。しかし、宣教の頂点は説教です。説教は、多くのキリスト信者にとって、現代においても依然として、神のことばと出会うためのもっとも重要な時だからです。説教を行う際、奉仕者は預言者と同じようにならなければなりません。実際、奉仕者ははっきりとした、わかりやすい、内容のあることばで、権威をもって「救いの歴史における神のくすしきみわざ」（『典礼憲章』35）を告げなければならないだけではありません――これはまず、典礼の中で聖書をはっきりと生き生きとしたかたちで朗読することによって行われます――。奉仕者はまた、会衆が置かれた時代と時間の中で語りかけ、回心の要求と生きた献身を会衆の心に呼び覚まさなければなりません。「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」（使徒言行録2・37）。

それゆえ、宣教、信仰教育、説教は、読書と理解、説明と解釈、思いと心を用いることを前提します。説教の中では二つの動きが行われます。第一の動きによって、人は聖書のテキストの起源、出来事、救いの歴史の根源に赴きます。それは、聖書の意味とメッセージを理解するためです。第二の動きによって、人は現在、すなわち、聖書を聞き、読んでいる人の生きる現代に戻ります。ただしそれは常にキリストの光のもとで行わなければなりません。

キリストは聖書を一つにまとめる導きの光だからです。すでに述べたとおり、これは、二人の弟子とともにエルサレムからエマオに向かう道で、イエス自身が行ったことです。それは助祭フィリポがエルサレムからガザに向かう道で行ったことでもあります。フィリポはエチオピアの高官と象徴的な意味をもつ対話を行いました。「読んでいることがおわかりになりますか。……手引きしてくれる人がいなければ、どうしてわかりましょう」（使徒言行録8・30－31）。目指す目的は、秘跡におけるキリストとの完全な出会いです。こうして神のことばの家である教会を支える第二の柱が示されます。

8　すなわちパンを裂くことです。エマオの物語（ルカ24・13－35参照）がもう一度模範となります。エマオの物語は、わたしたちの教会で毎日行われていることを再現します。モーセと預言者についてのイエスの説教に続いて、食卓で感謝のパンが裂かれます。これが、神が神の民と行う親密な対話の時です。それはキリストの血によって証印の押された、新しい契約のわざです（ルカ22・20参照）。それはみことばの最高のわざです。みことばはご自身のいけにえのからだを食物としてささげたからです。これが教会生活の源泉と頂点となります。福音書はキリストのいけにえの記念である最後の晩餐について語ります。感謝の祭儀の中で告げ知らせ、聖霊の働きを求めることによって、最後の晩餐は出来事また秘跡となります。そのため第二バチカン公会議はきわめて重要な箇所でこう述べます。「教会は主の聖体と同様に、聖書を常に尊敬し、特に典礼において不断に、ことばの食卓と聖体の食卓とから生命の糧を取り、信者にも与えてきた」（『神の啓示に関する教義憲章』21）。それゆえ、わたしたちはキリスト教生活の中心に「ことばの典礼と聖体の典礼」を置かなければなりません。二つの典礼は「相互に固く結ばれて一つの礼拝行為をなしている」（『典礼憲章』56）からです。

9　みことばの家である、教会という霊的な建物の第三の柱は、祈りです。聖パウロが述べるとおり、祈りは「詩編と賛歌と霊的な歌」（コロサイ3・16）から成ります。いうまでもなく、時課の典礼が特別な位置を占めます。時課の典礼は特別な意味で教会の祈りです。それはキリスト教の日々の流れにリズムを刻み、何よりも詩編によって信者に日々の霊的な糧を与えるからです。この時課の典礼と共同のことばの典礼に、伝統は「霊的読書（レクチオ・デ

ィヴィナ)」の実践を加えます。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ)」は聖霊のうちに行われる霊的な読書です。それは信者が神のことばの宝に触れ、生きた神のことばであるキリストと出会うことを可能にします。

「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ)」は、まずテキストを読むこと（レクチオ）から始まります。読むこと（レクチオ）は、テキストの内容に関する真の知識への問いかけを生み出します。「聖書のテキストはそれ自体として何をいおうとしているのか」。次に「黙想（メディタチオ)」が行われます。そこでの問いかけはこれです。「聖書のテキストはわたしたちに何をいおうとしているのか」。そこからわたしたちは「祈り（オラチオ)」に到達します。「祈り（オラチオ)」の前提となるのは次の問いかけです。「主のことばにこたえて、わたしたちは何を主にいえばよいのか」。そして終わりに「観想（コンテンプラチオ)」が行われます。「観想（コンテンプラチオ)」の中で、わたしたちは神のたまものである、現実を見極めるまなざしをもって、自分に問いかけます。「主はどのような思いと心と生活の回心をわたしたちに求めておられるのか」。

神のことばを祈りをもって読む人にとっての理想は、主の母であるマリアの姿です。マリアは「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」（ルカ2・19。ルカ2・51参照）からです。すなわち、マリアは――ギリシア語原文がいうように――別々のように思われる出来事を一つにまとめる深い結び目を神の偉大な計画のうちに見いだしました。マルタの妹であるマリアの態度も、聖書を読む信者の前に示すことができます。マリアは主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていました。そして、外的な不安に思い悩むことなく、取り上げてはならない「良いほう」のために自由な時間を用いました（ルカ10・38－42参照)。

10　最後にわたしたちは、みことばの家である教会を支える第四の柱に至ります。すなわち、「兄弟の交わり（コイノニア)」です。「兄弟の交わり（コイノニア)」とは、「キリスト教的な愛（アガペー)」のことです。イエスがいわれたとおり、イエスの兄弟・姉妹となるには「神のことばを聞いてそれを行う人」（ルカ8・21)にならなければなりません。真の意味で聞くとは、従い、行うことです。生活の中で正義と愛を実践することです。人生と社会の中で預言者の呼びかけに従うあかしを行うことです。このあかしは、神のことば

と生活、信仰と公正、礼拝と社会的実践を常に一致させます。これこそ、イエスが有名な山上の説教から始めて、繰り返し述べたことです。「わたしに向かって、『主よ、主よ』という者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父のみ心を行う者だけが入るのである」（マタイ7・21）。このことばはイザヤが示した神のことばをこだましているように思われます。「この民は、口でわたしに近づき、唇でわたしを敬うが、心はわたしから遠く離れている」（イザヤ29・13）。この警告は教会にも当てはまります。教会も忠実に神のことばに聞き従わないことがあるからです。

ですから、このことがいつも信者の顔と手のうちに見られ、読み取られるようにしなければなりません。大聖グレゴリオ（540頃－604年）が述べたとおりです。大聖グレゴリオは、神と兄弟との交わりをあかしした聖ベネディクト（480頃－547／560年頃）や他の偉大な神の人のうちに、神のことばが生活の中で実現されているのを見いだしたからです。公正で忠実な人は、聖書を「説明する」だけでなく、それを、生き、実践された現実としてすべての人に「提示」します。だから、いつくしみの生活が、神のことばの生きた読書となるのです（viva lectio, vita bonorum）。聖ヨハネ・クリゾストモ（340／350－407年）はすでにこう述べています。使徒たちはガリラヤの山から下り、そこで、モーセのように文字の書かれた石の板をもたずに、復活したかたと出会いました。そのときから、彼らの生活が生きた福音となったからです。

みことばの家の中で、わたしたちは他の教会・教会共同体の兄弟姉妹とも出会います。これらの兄弟姉妹は、いまだに分裂していても、わたしたちとともに、神のことばへの崇敬と愛のうちに、第一のまことの一致の原理・源泉を見いだします。たとえこの一致が完全な一致ではないにしてもです。このきずなを、聖書の共同の翻訳、聖書の普及活動、聖書に基づくエキュメニカルな祈り、釈義上の対話、聖書のさまざまな解釈の研究と比較、さまざまな霊的伝統に含まれた価値あるものの交換、そして世俗的世界における神のことばの宣教と共同のあかしを通じて、常に強めていかなければなりません。

四　みことばへの道――宣教

「主の教えはシオンから、みことばはエルサレムから出る」（イザヤ2・3）。人となった神のことばは、その家である神殿から「出て」、世の道を歩み、地

上の民が真理と正義と平和を求めて行う、大いなる巡礼団と出会います。実際、現代の世俗的な都市の広場や通りでは不信仰と無関心が支配し、悪が善に打ち勝ったように思われます。こうしてバビロンがエルサレムに勝利したような印象を与えています。しかし、そこにも人は隠れた望み、希望の萌芽、かすかな期待を見いだします。預言者アモスの書が述べているように、「見よ、その日が来ればと主なる神はいわれる。わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく、水に渇くことでもなく、主のことばを聞くことのできぬ飢えと渇きだ」（アモス8・11）。教会の福音宣教はこの飢えに対してこたえようと望みます。

復活したキリストも、しり込みする使徒たちに呼びかけました。自分たちの守られた囲いを出ていきなさいと。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。‥‥あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」（マタイ28・19－20）。聖書は「黙してはならない」、「大声で叫びなさい」から、「折がよくても悪くても、みことばを宣べ伝えなさい」、「無関心の沈黙を破る見張りとなりなさい」まで、呼びかけに満ちています。わたしたちの前に開かれているのは、聖パウロや最初の福音宣教者が歩んだ道だけでなく、彼らに続いて、遠い土地に住む人々のところに出かけたすべての宣教者が歩んだ道でもあります。

11　今やマス・メディアは地球全体を包むネットワークを作り上げています。こうしてキリストの招きは新たな意味を帯びることになりました。「わたしが暗闇であなたがたにいうことを、明るみでいいなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい」（マタイ10・27）。聖なることばが、まず印刷物、すなわち地球上のさまざまな言語による翻訳を通して広く伝えられなければならないのはいうまでもありません。しかし、ラジオ、インターネットの情報ハイウェイ、インターネットテレビ放送、CD、DVD、ポッドキャストなどを通じても神のことばを伝えなければなりません。神のことばをテレビ、映画、新聞、文化・公共行事でも示さなければなりません。

これらの新しいマス・メディアは、伝統的な広報手段と比べて、独自の表現手段を作り出しました。それゆえ、それを使用するためには、技術教育だけでなく文化的教育も必要とされます。特にテレビのような支配的なマス・メディアが提供するイメージの時代である現代においても、キリストの特別

な模範は依然として意味をもちます。キリストは今も象徴、物語、比喩、日常的な経験、たとえに向かいます。「イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。……たとえを用いないでは何も語られなかった」（マタイ13・3、34）。イエスは、神の国を宣べ伝えるとき、あいまいで抽象的で超自然的なことばで会衆に語りかけることはありませんでした。むしろイエスは、人々が立っている場所から出発して、人々の心をとらえました。それは、日常的な現実から天の国の啓示へと人々を導くためです。それゆえ、ヨハネが語る情景は重要です。「イエスを捕らえようと思う者もいたが、手をかける者はなかった。さて、祭司長たちやファリサイ派の人々は、下役たちが戻って来たとき、『どうして、あの男を連れて来なかったのか』といった。下役たちは、『今まで、あの人のように話した人はいません』とこたえた」（ヨハネ7・44－46）。

12　キリストはわたしたちの町の通りを歩いて、わたしたちの家の戸口に立ち止まります。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者とともに食事をし、彼もまた、わたしとともに食事をするであろう」（黙示録3・20）。家の中で喜びと苦しみをともにする家庭は、神のことばを受け入れる基本的な場です。聖書は、短いものから長大なものまで、家族に関するさまざまな物語で満たされています。詩編作者は父親が食卓に座る穏やかな情景を生き生きと描きます。父親は、豊かな房をつけるぶどうの木のような妻と、「オリーブの若木」のような子どもたちに囲まれています（詩編128）。イスラエルが過越の記念を家庭にゆだねたように（出エジプト記12・21－27参照）、キリスト教も、初めから典礼を普通の家庭の中で行いました。神のことばの伝達は世代を通じて行われました。そのため、両親は「信仰の最初の使者」（『教会憲章』11）となります。詩編作者はまたいいます。「わたしたちが聞いて悟ったこと、先祖がわたしたちに語り伝えたことを。子孫に隠さず、後の世代に語り継ごう、主への賛美、主のみ力を、主が成し遂げられた驚くべきみわざを。……彼らもそれを知り、その子らに語り継がなければならない」（詩編78・3－4、6）。

ですから、すべての家庭は自分の家に聖書をもち、目に見えるふさわしいしかたで聖書を保管し、聖書を読み、聖書で祈らなければなりません。同時

に家庭は、聖書の用い方に関する祈りとカテケージスと教育の模範を示さなければなりません。それは、「若者も、おとめも、老人も、幼子も」（詩編148・12）神のことばを聞き、理解し、賛美し、生きることができるようにするためです。特に子どもと青年を含めた若者に、適切かつ特別な教育を与えるべきです。この教育は、彼らがキリストの魅力を体験し、その思いと心の扉を開くようにするものでなければなりません。そのためには、真のあかしを行う大人との出会いや、友人と教会共同体の優れた仲間のよい影響も必要です。

13　イエスは、種をまく人のたとえによって、乾いた土地、石だらけの土地、茨の茂った土地があることを教えます（マタイ13・3－7参照）。世の通りに出かける人は、スラムにも出会います。そこには苦しみと貧困、侮辱と抑圧、差別と悲惨、身体的・精神的な病、そして孤独があります。道端の石はしばしば戦争と暴力による血にまみれています。権力者の邸には腐敗と不正がはびこっています。迫害された人々は、良心と信仰への忠実を求めて声を上げます。人は人生の危機に圧倒されたり、生きることの意味を感じられなくなることもあります。「影のように移ろうもの、空しくあくせくするもの」（詩編39・7）と同じように、多くの人は神が沈黙していると感じます。神は存在せず、自分に無関心であるように思われます。「いつまで、主よ、わたしを忘れておられるのか。いつまで、み顔をわたしから隠しておられるのか」（詩編13・1）。最後に、すべての人に死の神秘が姿を現します。

地上から天上に上がるこの深い苦しみの声は、聖書の中に絶えず現れます。聖書は、歴史的で受肉した信仰を示すからです。暴力と抑圧を示すさまざまな箇所を考えれば十分です。ヨブが上げ続ける大きな叫び声。詩編の激しい嘆願。コヘレトの魂に密やかに訪れた内面の危機。社会の不正に対する預言者の厳しい非難。創世記の根本的な箇所における人祖の追放（創世記3章）に始まって、原罪の破壊的な力に対しては容赦のない断罪が行われます。実際、「悪の神秘」が歴史の中に存在し、働いています。しかし、「悪の神秘」は神のことばによってあらわにされます。神のことばは、キリストによって善が悪に打ち勝つことを約束するからです。

けれども、何よりも聖書を支配するのは、キリストの姿です。キリストは、公生活の初めに、地上で置き去りにされた人々にも希望があることを宣言したからです。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げるため

に、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」（ルカ４・18－19）。イエスは繰り返し、病人に手を置きました。ことばをもって正義を告げ、不幸な人を励まし、罪人をゆるしました。最終的にイエスは自ら最底辺に降ります。栄光ある「自分を無にして、しもべの身分になり、人間と同じ者になられました。‥‥へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（フィリピ２・７－８）。

こうしてイエスは死の恐怖を感じました（「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」）。イエスは孤独を味わいました。友に見捨てられ、裏切られたからです。イエスは十字架のもっとも残酷な苦痛の暗闇の中を歩みました。父の沈黙の暗闇までも歩みました（「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」）。そして、すべての人にとっての最後の深淵である、死の深淵に達しました（「大声を出して息を引き取られた」）。イザヤが主のしもべについて述べたことばは真の意味でイエスに当てはまります。「多くの痛みを負い、病を知っている」（イザヤ53・3）。

にもかかわらず、最期のときまで、イエスは神の子であり続けました。愛に基づいて人々と連帯し、ご自身を犠牲としてささげることによって、イエスは人間性の限界と悪の中に神性の種をまきました。すなわち、解放と救いの源をまきました。イエスは、わたしたちのためにご自身をささげることによって、ご自分が受け、味わった苦しみと死にあがないをもたらしました。こうして、わたしたちにも復活の朝が訪れました。それゆえキリスト信者には、この神の希望のことばを告げ知らせる使命があります。そのために、貧しい人、苦しむ人と苦しみをともにしなければなりません。真理といのち、聖性と恵み、正義、愛と平和が支配することをあかししなければなりません。愛をもって隣人に奉仕しなければなりません。愛は人を裁かず、非難せず、むしろ、支え、照らし、慰め、ゆるします。そしてキリストのことばに従わなければなりません。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」（マタイ11・28）。

14　神のことばは、世の道を歩くキリスト信者に、ユダヤ人との深い出会いをもたらします。わたしたちは、旧約聖書を共通に認め、愛することにおい

て、ユダヤ人と深く結ばれているからです。また、「肉によればキリストも」イスラエルから「出られた」（ローマ9・5）からです。ユダヤ教の聖書全体は神と人の神秘を照らし出します。それは深い考察と道徳の宝庫です。完全な実現に向けた救いの歴史の長い歩みを述べています。神のことばが人間の出来事のうちに受肉したことを力強く明らかにします。わたしたちはユダヤ教の聖書によって、キリストの姿を完全なかたちで理解することができます。キリストはこう宣言されたからです。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」（マタイ5・17）。これが、選ばれた民と対話するための方法です。彼らは神から「神の子としての身分、律法、礼拝、約束」（ローマ9・4）を受けました。わたしたちはユダヤ教の釈義の伝統の実り豊かな源泉によって、わたしたちの聖書解釈を豊かなものとすることができます。

「祝福されよ、わが民エジプト、わが手のわざなるアッシリア、わが嗣業なるイスラエル」（イザヤ19・25）。それゆえ、主は人々を守る祝福の覆いを地上の諸民族の上に広げます。「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます」（一テモテ2・4）。世の道を歩むわたしたちキリスト信者も――自らの霊的な独自性をあいまいにし、おとしめる混交主義に陥ることなく――、尊敬の心をもって、諸宗教を信じる人々と対話するよう招かれています。彼らもそれぞれの聖典の教えに聞き従い、それを忠実に実践しているからです。まずイスラム教です。イスラム教は多くの聖書の人物、象徴、テーマを自らの伝統に受け入れています。また、唯一の神、すなわち、いつくしみと憐れみに満ちた神、万物の創造主にして人類の裁き主である神への心からの信仰をあかしします。さらにキリスト信者は、東洋の偉大な宗教的伝統との間に共通の一致点を見いだします。それらの伝統は、仏教に見られるように、聖典の中で、生命の尊重、瞑想、沈黙、質素、自己放棄をわたしたちに教えます。またヒンドゥー教は、聖性の感覚、巡礼、断食、聖なる象徴をたたえます。さらに、儒教は、知恵と家庭的・社会的価値観を教えてくれます。儀礼や口承文化で霊的な価値観を表現する土着宗教にも、わたしたちは心からの関心を示し、尊敬の念をもってそれらと対話することを望みます。神を信じてはいないものの、「正義を行い、いつくしみを示し、へりくだって歩む」（ミカ6・8）よう努める人々とも、わたしたちは、より公正で平和な世界を築くために協力して働き、対話によって彼らに神の

ことばを真の意味であかししなければなりません。神のことばはこれらの人々に真理と愛に関する新たな高次の地平を示すことができるからです。

15　ヨハネ・パウロ二世は『芸術家たちへの書簡』（1999年）の中でこう述べています。「聖書は一種の『巨大な語彙』（ポール・クローデル）と『図像の図解』（マルク・シャガール）となり、それからキリスト教文化と芸術が生まれてきたのです」（同5）。ゲーテは福音が「ヨーロッパの母語」であると信じていました。よくいわれるように、聖書は普遍的な文化の「大いなる体系」です。芸術家は、いわばその絵筆を、聖書の物語、象徴、人物で彩られたこの母語の文字に浸します。音楽家は、聖書、特に詩編から着想を得て作曲を行います。数世紀にわたって、著作家は、実存を比喩的に語るいにしえの物語にさかのぼってきました。詩人は、霊、無限、悪、愛、死といのちの神秘について問いかけ、聖書に息づく詩情にしばしば親しみました。思想家、科学者、そして社会自身も、神のことばに基づく霊的・倫理的概念（たとえば十戒）を、たとえそれが批判の対象としてであっても、しばしば基準として用いました。聖書の人物や思想がゆがめられた場合も、わたしたちはそれが自分たちの文明の本質的で不可欠な要素だということを認めてきました。

聖書はわたしたちに神を理解し、神に達するための「美の道（via pulchritudinis）」を教えます（詩編47・7はこう招きます。「歌え、神に向かって歌え」）。だから聖書は、信者にとって必要であるだけでなく、さまざまな文化的表現の真の意味を再発見しようとするすべての人にも必要です。何よりも、わたしたちの歴史的、文化的、人間的、霊的独自性をもう一度見いだそうとするすべての人にとって必要です。聖書はわたしたちの偉大さの基盤です。わたしたちは聖書を通して、劣等感を感じることなく、わたしたちの高貴な遺産を他の文明・文化に示すことができます。それゆえすべての人が聖書を知り、学ばなければなりません。聖書は特別な美と、人間的・文化的な富を秘めているからです。

にもかかわらず、パウロの優れたたとえを用いていうなら、神のことばはある文化に「つながれていません」（二テモテ2・9）。むしろ、神のことばはわたしたちが自らの囲いを出るよう促します。そして、使徒パウロ自身、聖書のメッセージを新たな文化的状況に受肉させることのできた、特別な職人でした。これこそ、教会が、微妙ではあっても、必要な過程を通じて、現代

においても行うよう招かれていることです。この作業は教皇ベネディクト十六世の教導職から強い刺激を受けています。教会は神のことばを多くの文化に浸透させなければなりません。それら諸文化の言語、概念、象徴、宗教的伝統を通して神のことばを表現しなければなりません。しかし、教会は、神のことばが変質しないように注意し、制御を行いながら、常に神のことばの真正な本質を保つことができるようにしなければなりません。

それゆえ教会は、神のことばがすべての文化に与える価値を輝かさなければなりません。それは、それらの文化を清め、豊かにするためです。ヨハネ・パウロ二世が1980年のアフリカ訪問の際にケニアの司教団に対して述べたように、「インカルチュレーションは真の意味でみことばの受肉の考察となるべきです。それは、福音によって変容され、生まれ変わった文化が、自らの生きた伝統から、キリスト教の生活、典礼、思想の独自の表現を生み出すためです」。

結び

「すると、天から聞こえたあの声が、再びわたしに語りかけて、こういった。『さあ行って、‥‥天使の手にある、開かれた巻物を受け取れ』。……すると、天使はわたしにいった。『受け取って、食べてしまえ。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い』。わたしは、その小さな巻物を天使の手から受け取って、食べてしまった。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると、わたしの腹は苦くなった」（黙示録10・8－11）。

全世界の兄弟姉妹の皆様。わたしたちもこの招きを受け入れようではありませんか。神のことばの食卓に近づこうではありませんか。わたしたちが養われ、「パンだけではなく、神の口から出る一つひとつのことばで」（申命記8・3、マタイ4・4）生きるためです。キリスト教文化の偉大な人物が述べるように、「聖書はあらゆる状態の人々を慰め、あらゆる状態の人々を恐れさせるために、その章句を用意した」（パスカル『パンセ』：*Pensées*, no. 532, ed. Brunschvicg〔前田陽一・由木康訳、中央公論新社、2001年、369頁〕）。

実際、神のことばは「蜜よりも、蜂の巣の滴（したた）りよりも甘い」（詩編19・11）。「あなたのみことばは、わたしの道の光、わたしの歩みを照らすともしび」（詩編119・105）。しかしまた、「わたしのことばは火に似ていないか。岩を

打ち砕く槌のようではないか、と主はいわれる」（エレミヤ23・29）。神のことばは雨のように大地を潤し、肥やし、芽を出させ、わたしたちの渇いた霊的な荒れ野に花を開かせます（イザヤ55・10 －11参照）。しかしまた、「神のことばは生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができる」（ヘブライ4・12）のです。

わたしたちは、聖書研究者、カテキスタ、また他の神のことばに仕える人々にまなざしを向け、その貴重で重要な奉仕に心からの感謝を表します。わたしたちはまた、神のことばのゆえに、また主イエスに対して行ったあかしのゆえに（黙示録6・9参照）迫害されたり、殺された兄弟姉妹にも目を向けます。彼らは証人、また殉教者として、「福音の力」（ローマ1・16）を語ります。「福音の力」こそ、彼らの信仰と、希望と、神と人々への愛の源泉だからです。

今わたしたちは沈黙したいと思います。それは、神のことばをよく聞くためです。そして、聞いた後、沈黙を守りたいと思います。それは、神のことばがわたしたちのうちに住み、わたしたちのうちに生き、わたしたちに語りかけてくださるようにするためです。一日の初めに神のことばに語りかけていただこうではありませんか。それは、神のことばが最初のことばとなるためです。夕べに神のことばに語りかけていただこうではありませんか。それは、神のことばが最後のことばとなるためです。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。「わたしと一緒にいる者たちが皆、あなたによろしくといっています。わたしたちを愛している信仰の友人たちによろしく伝えてください。恵みがあなたがた一同とともにあるように」（テトス3・15）。

11. 提言

世界代表司教会議第12回通常総会は、10月25日（土）午前に行われた第23回全体会議で、「提言」（Propositiones）の投票を行った。「提言」のオリジナル・テキストはラテン語である。シノドスの「提言」はこれまで公開されてこなかったが、前回の第11回通常総会（2005年）に続いて、今回も教皇ベネディクト十六世の許可により、シノドス事務総局による暫定的なイタリア語訳が同日公表された。以下はイタリア語版に基づくその全訳である。

序文

提言1：教皇への文書の提出

本シノドスに関連する、「教会生活と宣教における神のことば」に関する諸文書、すなわち、「提題解説」、「討議要綱」、「基調講演」、「中間報告」、またシノドスホールで述べられた発表と文書で提出されたものを含めた発表原稿、分団会とその討議の報告に加えて、シノドス教父が特に重要と考えたいくつかの特別な提言を、教皇の検討に付していただくために提出する。

シノドス教父は、教皇がこの機会に、そして、生誕2000年を記念して異邦人の使徒聖パウロにささげた年にあたって、教会生活と宣教における神のことばの神秘に関する文書を発布してくださることをつつしんでお願いするものである。

提言2：『神の啓示に関する教義憲章』から、神のことばに関するシノドスへ

シノドス教父は、『神の啓示に関する教義憲章』の第二バチカン公会議における公布から40年余が過ぎるにあたり、この文書が釈義、神学、霊性、司牧、エキュメニズムの次元で教会生活に大きな善益を与えたことを感謝とともに認める。

本憲章は、「信仰の理解（intellectus fidei）」とキリスト教教理の歴史を通じて、啓示における三位一体的また救済史的次元を明らかにした。

近年、教会が次のことをますます自覚するようになったことは間違いない。

すなわち、受肉した神のことばであるイエス・キリストは「自分自身の全的現存と顕現とにより、ことばとわざにより、しるしと奇跡により、中でも、おのが死と死者の中からの栄えある復活により、最後に真理の霊の派遣によって、神がわれわれを罪と死の闇から救い、永遠のいのちに復活させるため、われわれとともにいるという啓示を完全に成し遂げ、そして神的なあかしをもって確証している」(『神の啓示に関する教義憲章』4)。

これらすべてのことによって、神のことばの限りない価値に関するさらなる考察が可能となった。神のことばは、霊感を受けた啓示のあかしとして、聖書によってわれわれに与えられ、教会の聖伝とともに最高の信仰の規則となる(『神の啓示に関する教義憲章』21参照)。この神のことばは教導職によって保存され、忠実に解釈され(『神の啓示に関する教義憲章』10参照)、典礼において祝われ、永遠のいのちのパンとして聖体のうちにわれわれに与えられる(ヨハネ6章参照)。

教会は今、近年行われたすべてのことを重視しながら、神のことばのさまざまな表現と司牧的な意味をさらに考察する必要を感じている。そのため、今回のシノドスは次のように望む。すべての信者が、神と人との間の唯一の仲介者であるキリストの神秘をますます自覚するように(一テモテ2・5、ヘブライ9・15参照)。そして、神のことばをうやうやしく聞くことによって刷新された教会が、新たな宣教の歩みへと踏み出し、すべての人に福音を告げ知らせるように。

第一部
教会の信仰における神のことば

提言3:「神のことば」の類比(Analogia Verbi Dei)

「神のことば」という表現は類比的な意味をもっている。この表現はまず人格としての神のことばを表す。すなわち、世々に先立って父から生まれた神の独り子、肉となった父のことばである(ヨハネ1・14参照)。宇宙の創造と、特別な意味で人間の創造においてすでに存在した神のことばは、救いの歴史において啓示され、旧約と新約の文字によってあかしされた。この神のことばは聖書を超えたものであると同時に、聖書全体を含んでいる。教会

は聖霊に導かれながら（ヨハネ14・26、16・12－15参照）、生きた聖伝のうちに神のことばを守り、保存し（『神の啓示に関する教義憲章』10参照）、宣教と秘跡と生活のあかしを通じてそれを人類に与える。それゆえ、司牧者は、神の民が神のことばのさまざまな意味を理解するよう教えなければならない。

提言4：啓示の対話的性格

啓示における対話は、まず神のことばが人間に向けて語られたことによって行われる。実際、神はその大きな愛によって、人類と出会うことを望み、自ら人間に語りかけ、人間をご自分のいのちへと招き、あずからせた。キリスト教の特徴はイエス・キリストという出来事のうちに示される。イエス・キリストは、啓示の頂点、神の約束の実現、人間と神の出会いの仲介者だからである。イエス・キリストは「神を示された」（ヨハネ1・18）かたであり、人類に与えられた、唯一、決定的なみことばである。人間は、啓示を受け入れるために、思いと心を聖霊のわざに開かなければならない。聖霊は聖書のうちにある神のことばを理解させてくれるからである。人間は、完全な自由と、信仰による従順をもって神にこたえる（ローマ1・5、二コリント10・5－6、『神の啓示に関する教義憲章』5参照）。

イエスの母マリアは、この信仰による従順を模範的なしかたで体現した。マリアは、神のことばを聞いて受け入れる、教会の信仰の原型でもある。

提言5：聖霊と神のことば

聖書はキリストの花嫁である教会に聖霊が与えたたまものである。それゆえ、聖書を解釈する場は、教会である。

ご自身が聖書の著者である聖霊は、世々にわたって「教会の信仰（fides Ecclesiæ）」を形成することを通じて、正しい解釈を導く。

シノドスは次のように勧告した。すべての司牧者は、洗礼を受けたすべての者に、聖書の解釈と理解に際して（『神の啓示に関する教義憲章』12参照）、霊感を与える聖霊の役割を思い起こさせなければならない（『神の啓示に関する教義憲章』11参照）。したがって、弟子であるわれわれは皆、聖霊が降る

ように何度も祈り求めるよう招かれている。それは、聖霊が、神のことばに関するいっそう深い知識と、信仰のあかしへとわれわれを導いてくださるためである（ヨハネ15・26－27参照）。シノドスは、聖書が、霊と花嫁がともに上げる叫び声で結ばれていることを信者に思い起こさせる。「主イエスよ、来てください」（黙示録22・17、20参照）。

提言6：教父による聖書の読み方

聖書解釈にとって教父による聖書の読み方を無視することはできない。そこでは文字どおりの意味と霊的な意味の二つの意味を区別する。文字どおりの意味は聖書のことばが意味するもので、批判的釈義の科学的な方法によって見いだされる。霊的な意味は聖書が語る出来事にもかかわる。それは教会全体の生きた聖伝と信仰の類比をも考慮に入れる。信仰の類比は、信仰の真理の、真理相互における、また神の啓示の計画全体における内的なつながりを含む。

提言7：神のことばと聖体の一致

神のことばと聖体の間の深い一致を考察することは重要である（『神の啓示に関する教義憲章』21参照）。ヨハネ6・35－58、ルカ24・13－35のような特定の箇所にも述べられているとおりである。それは、しばしば神学的・司牧的考察に見受けられる、二つのことがらの対立を乗り越えるためである。こうして聖体に関する前回のシノドスとのつながりがいっそう明確になる。

神のことばは感謝の祭儀という出来事において秘跡として受肉し、聖書を実現する。聖体は聖書を解釈するための原理である。聖書もまた聖体の神秘を解明し、説明する。その意味でシノドス教父は、神のことばのもつ秘跡的性格に関する神学的考察が深められることを望む。聖体における主の現実の現存が認められなければ、聖書の理解はいつまでも実現しない。

提言8：和解と回心のことば

神のことばは和解のことばである。なぜなら、神はみことばにおいて万物

をご自身と和解させたからである（二コリント5・18－20、エフェソ1・10参照）。イエスにおいて体現した神の憐れみ深いゆるしは、罪人を再び立ち上がらせる。

いやしの秘跡（病者の塗油）における神のことばの重要性を強調しなければならない。教会は、みことばであるイエス・キリストによって和解させられ（エフェソ2・14－18、コロサイ1・22参照）、すべての人に和解と憐れみとゆるしの場を提供する共同体とならなければならない。

神のことばのいやしの力は、それを聞く者を絶えざる個人的な回心へと招く生きた呼びかけであり、キリストによって父から与えられた和解を勇気をもって告げ知らせるためのきっかけとなる（二コリント5・20－21参照）。

最近、さまざまな紛争と宗教間の緊張が見られる中で、カトリック信者は、イエスにおいて神が実現した和解のわざに忠実に従いながら、和解の模範となるよう努めなければならない。そして、神と人々との関係において同じ人間的・倫理的・宗教的価値観を分かち合うことを目指さなければならない。このようにしてカトリック信者は公正で平和な社会を築こうと努めるのである。

提言9：聖書を読むことにおける神との出会い

今回のシノドスは、肉となった神のことばであるイエスとの出会いは恵みの出来事であることを、すべての信者にあらためて強く示す。この恵みの出来事は、聖書を読み、聞くことによって繰り返し起こる。聖チプリアノ（200／210－258年）は教父たちの共通の思想をまとめてこう述べる。「あなたは時には熱心に祈り、時には霊的な読書（lectio divina）をするようにしてください。神と語るそのときこそ、神があなたとともにおられます」（『ドナトゥスに送る』：*Ad donatum,* 15〔吉田聖訳、『南山神学』第24号（2000年）、199頁〕）。

それゆえわれわれは、このシノドスから、神の民に属するすべての人々が聖書に深い愛を抱く新たな時代が始まることを心から望む。それは、神の民が祈りをもって忠実に聖書を読むことにより、イエスご自身との関係を深めることができるようになるためである。その意味で、できる限り、すべての信者が個人として聖書をもち（申命記17・18－20参照）、聖書を読むこと

による特別免償の恵みを得ることが望ましい（パウロ六世使徒憲章『インドゥルゲンチアールム・ドクトリーナ（1967年1月1日）』30参照）。

提言10：キリスト教の聖書における旧約聖書

イエスは詩編を祈り、律法と預言者を読むとともに、ご自分の説教の中でそれらを引用し、ご自身が聖書の実現であることを示された（マタイ5・17、ルカ4・21、24・27、ヨハネ5・46参照）。新約は常に旧約のことばと表現を引用する。それによって新約はイエスの生涯と死と復活を物語ることができた（マタイ1－2章と出エジプト記など、マルコ6・3、ルカ24・25－31参照）。同時に、さらにイエスの死と復活は「これらの同じ聖書本文にそれまで考えることのできなかった十全的な意味を与えた」（教皇庁聖書委員会『教会における聖書の解釈』ⅢA2〔和田幹男訳、『英知大学キリスト教文化研究所紀要』第16巻第1号（2001年）、272頁〕）。

したがって、イエスへの使徒的信仰は「聖書に書いてあるとおり」（一コリント15章参照）告げ知らされ、イエス・キリストはすべての約束に対する神の「然り」であることを示した（二コリント1・20参照）。

そのため、旧約の知識はイエス・キリストの福音を信じる者にとって不可欠である。なぜなら、聖アウグスチヌス（354－430年）のことばを用いるなら、新約は旧約のうちに隠され、旧約は新約において明らかにされたからである（『七書の諸問題』：*Quæstiones in Heptateuchum*, 2, 73参照）。

それゆえ、われわれは、説教と信仰教育が旧約のテキストを適切なしかたで考慮し、それを救いの歴史との関連でふさわしく説明し、神の民がイエス・キリストへの信仰に照らして旧約を評価するための助けとなることを望む。

提言11：神のことばと貧しい人への愛のわざ

聖書の特徴の一つは、神が貧しい人を特に愛することに関する啓示である（マタイ25・31－46参照）。受肉した神のことばであるナザレのイエスは、いつくしみのわざを行いながらこの世を歩んだ（使徒言行録10・35参照）。神のことばを進んで受け入れるなら、それは教会の中に、すべての人、特に貧しい人に対する愛のわざを豊かに生み出す。回勅『神は愛』が教えるとお

り、福音を第一に告げ知らされる権利をもつのは貧しい人にほかならない。貧しい人は、パンだけでなく、いのちのことばを必要としているからである。しかしながら、貧しい人は愛のわざを行う対象であるだけでなく、福音宣教を行う主体でもある。彼らは神に心を開き、寛大に他の人と分かち合うことができるからである。司牧者は、貧しい人に耳を傾け、貧しい人から学び、貧しい人の信仰を導き、貧しい人に歴史を築くよう促すことを求められる。愛の奉仕をゆだねられた助祭はこの領域において特別な責任をもつ。シノドスは助祭がその奉仕職を果たすことを励ますものである。

提言12：霊感と聖書の真理

シノドスは、教理省が霊感と聖書の真理の概念、またこれら相互の関係を明らかにするよう提言する。それは、『神の啓示に関する教義憲章』11の教えをいっそうよく理解できるようになるためである。特にこの分野におけるカトリックの聖書解釈の独自性を強調することが必要である。

提言13：神のことばと自然法

シノドス教父は、現代という歴史的な時期における大きな困難を自覚している。この困難の一つは、科学が自然の知識において成し遂げた大きな発展と関連する。逆説的にも、自然の知識が増大するほど、人は自然に由来する倫理的なメッセージを見いださなくなる。思想史において、古代の哲学者はすでにこの原理を「自然法」ないし「自然道徳法」と言い慣わしていた。教皇ベネディクト十六世が述べたとおり、このことばは現代、理解不能になったように思われる。「『自然』は形而上学的なものではなく、単に経験的なものにすぎなくなっているからです。自然がそのままではもはや道徳的なメッセージを示さなくなったことは、方向感覚の喪失を生み出しています。この方向感覚の喪失のために、日常生活における決定が不安定かつ不確実なものとなっています」（「自然法国際学会参加者へのあいさつ（2007年2月12日）」〔『霊的講話集2007』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画訳、カトリック中央協議会、2008年、44頁〕）。

特に使徒パウロがローマの信徒への手紙で述べた（ローマ2・14－15参照）

聖書の教えに照らして、自然法がすべての人の心の奥深くに記され、すべての人はそれに近づくことができることを強調するのが適切である。自然法の基本的原則は「善を行い、悪を避けよ」である。この真理がすべての人に義務づけられたものであることは明らかである。また、この真理から、すべての人の権利と義務に関する倫理的判断を規制する他の原則が生じる。次のことを思い起こすことがふさわしい。神のことばで養われることは、自然法の知識を深め、道徳的良心の向上を促す。それゆえシノドスは全司牧者に勧告する。神のことばの奉仕者に、自然法の再発見と、良心の教育において自然法が果たす役割を意識させるよう配慮するように。

第二部
教会生活における神のことば

提言14：神のことばと典礼

告げ知らされた神のことばを聞くように聖霊によって呼び集められた会衆は、祭儀の中で示される同じ聖霊のわざによって造り変えられる。実際、教会のあるところには主の霊もあり、主の霊のあるところには教会もある（イレネオ『異端反駁』：*Adversus hæreses*, III, 24, 1参照）。

シノドス教父は、典礼が神のことばを完全なしかたで表すための特別な場であることを再確認する。すなわち、秘跡、特に感謝の祭儀、時課の典礼、典礼暦年である。聖書で語られる救いの神秘は、告げ知らされ、聞かれ、実現する固有の場を典礼のうちに見いだす。

そのためにたとえば次のことが必要である。

- 聖書を、典礼以外のときも、聖堂内の目に見える品位のある場所に置かなければならない。
- 『ローマ・ミサ典礼書の総則』（同56参照）に示されているとおり、第一朗読と第二朗読の後と、説教の後、沈黙することを奨励すべきである。
- みことばの祭儀も主日の聖書朗読を中心として行うことができる。
- 聖書朗読を、ふさわしい典礼書、すなわち朗読聖書と朗読福音書を用いて行う。聖書に収められた神のことばに対する深い崇敬をもってこれらの書物を扱うべきである。

・特に祭日には、福音朗読に先立つ行列によって福音書を強調すべきである。
・朗読奉仕者、すなわち朗読者と聖歌隊の役割を強調すべきである。
・神のことばをはっきりとわかりやすいしかたで朗読することができるよう、男女の朗読者をふさわしく教育すべきである。朗読者は自分が朗読するみことばの内容を学び、生活によってあかしするよう招かれている。
・コミュニケーションの方法をよく知ることによって、神のことばをはっきりと朗読しなければならない。
・典礼の中で、視覚障害者や聴覚障害者のように、通常のしかたで伝えられる神のことばを聞き取るのが困難な人のことを看過してはならない。
・音響手段を適切かつ有効に用いるべきである。

さらにシノドス教父は、感謝の祭儀の司式者の重大な責任を思い起こさなければならないと感じる。聖書のテキストを他のテキストに決して代えてはならない。いかなる霊的・文学的テキストも聖書の価値と豊かな内容に匹敵することはできない。聖書は神のことばだからである。

提言15：説教の現代化と「説教指針」

説教は、告げ知らされたみことばを現実のものとする。「この聖書のことばは、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（ルカ４・21）。説教は、祭儀で祝われる神秘へと導き、宣教へと招き、信者の喜びと悲しみ、希望と恐れを分かち合い、こうして会衆を信仰宣言と、すべての人のためにささげられたミサの祈りへと向かわせる。

会衆の参加するミサでは、週日であっても、かならず説教を行わなければならない。説教者（司教、司祭、助祭）は祈りによって心の準備をすることが必要である。それは確信と情熱をもって説教を行うことができるためである。

説教者は3つのことを自らに問いかけなければならない。
・朗読された箇所はいかなることを述べているか。
・朗読された箇所は自分個人に何をいおうとしているか。
・具体的な状況を考慮しながら、共同体に何をいうべきか。

説教者は何よりもまず、自分が告げ知らせる神のことばの問いかけに自ら

をゆだねなければならない。説教を教理によって深め、信仰を強めるために教会の教えを伝え、祭儀の場における回心へと招き、聖体の過越の神秘を現実化する準備を行わなければならない。

説教者のみことばの奉仕職を助けるため、また、シノドス後の使徒的勧告『愛の秘跡』（同46）の教えに従って、シノドス教父は「説教指針」の作成を望む。この「説教指針」は、説教の原則とコミュニケーション技術とともに、典礼で用いられる朗読聖書に現れる聖書のテーマの内容を示すべきである。

提言16：朗読聖書

ローマ朗読聖書の検討を開始することを提言する。それは、現在の朗読箇所の選択と配置が今の歴史的時期における教会の宣教に本当に適切かどうか考えるためである。特に旧約の朗読箇所と福音の箇所の関係を再検討すべきである。旧約の箇所を制限しすぎたり、いくつかの重要な箇所を排除しないためである。

朗読聖書の改訂は、この朗読聖書を共通に使用している、エキュメニカル対話の相手の教派と対話しながら行うべきである。

東方カトリック教会の典礼においても、朗読聖書の問題に関する権限のある権威者による検討を行うことが望ましい。

提言17：ことばの奉仕職と女性

シノドス教父は、信仰を伝える上での信徒の奉仕を認め、奨励する。この点で、特に女性は、家庭と信仰教育において不可欠な役割を果たす。実際、女性は、神のことばを聞く態度と、神との個人的な関係を促し、ゆるしと福音的な分かち合いの感覚を伝えることができる。

朗読奉仕者の奉仕職を女性にも開くことが望ましい。それは、キリスト教共同体が、女性の果たす、みことばを告知する役割を認めることができるためである。

提言18：みことばの祭儀

典礼の伝統が示すさまざまな方法によってみことばの祭儀を行うことを勧める（『典礼憲章』35参照）。主日の感謝の祭儀を行うことのできない多くの教会共同体は、みことばの祭儀のうちに信仰とキリスト教的なあかしのための糧を見いだしている。

みことばの祭儀は主と出会うための特別な場である。みことばが読まれることによって、キリストはご自身を現存させ、ご自分の民に語りかけるからである（『典礼憲章』7参照）。よく耳を傾けることを困難とする現代の喧騒の中にあっても、内的な沈黙と、生活を造り変える神のことばを聞く態度を培うよう、信者に勧めなければならない。

シノドス教父は、養成を受けたカテキスタが神のことばを囲む主日の集会を定期的に指導してきた教会の経験に基づいて、みことばの祭儀の指針が作成されることを提言する。指針の目的は、みことばの祭儀が感謝の祭儀と混同されるのを避けることである。

みことばの祭儀の要素である、みことばを受け入れること、賛美の祈り、感謝、そして祈願は、信者の心と、神のことばを囲んで集まったキリスト信者の会衆における聖霊の現れである。実際、聖霊は、朗読され、祝われた神のことばの実りを、受け入れる人の心と生活の中で結ばせる。

さらにわれわれは、巡礼、祭儀、さまざまな民間信心の形態、宣教、黙想、悔い改めと償いとゆるしのための特別な期間も、神のことばを記念し、その知識を深めるために信者に与えられた具体的な機会であると考える。

提言19：時課の典礼

時課の典礼は神のことばを聞くための特別な方法である。なぜならそれは、信者を聖書と教会の生きた聖伝に触れさせるからである。それゆえシノドスは、信者が時課の典礼、特に朝の祈りと晩の祈りに参加することを願う。そのため、まだそのようなものが作られていなければ、簡単な形態の時課の典礼を作成することが有益である。

司教、司祭、助祭、修道者、また教会から任命を受けた者は、時課の典礼を祈る聖なる義務を思い起こさなければならない。さらに時課の典礼を祈ることは信徒にも強く勧められる。それは、時課の典礼がいっそう優れた意味

で全教会の祈りとなるためである。

提言 20：神のことばと結婚と家庭

神のことばは結婚の起源である（創世記2・24参照）。イエスも結婚をご自分の国の制度の一つとし（マタイ19・4－8参照）、結婚に秘跡としての身分を与えた。秘跡としての結婚式において、新郎と新婦は互いに与え合い、「一体」となるという預言者のことばを唱える。これはキリストと教会の一致の神秘のしるしである（エフェソ5・32参照）。忠実で一致した家庭生活を通して、夫婦は子どもに対して最初に神のことばを告げる者となる。子どもたちが家庭での祈り、家庭でのみことばの祭儀、聖書の読書や、他の祈りの方法を深められるよう、支え、助けなければならない。

夫婦は、神のことばが、結婚生活と家庭生活の困難に際しての貴重な支えとなることを思い起こさなければならない。

提言 21：神のことばと小共同体

シノドスは、聖書の黙想としてのロザリオを用いることによって、神のことばを聞き、学び、祈る小教会共同体を作ることも勧める（教皇ヨハネ･パウロ二世使徒的書簡『おとめマリアのロザリオ』参照）。多くの国にはすでに小共同体が存在する。これらの小共同体は、いくつかの家庭から成る場合、小教区に根ざす場合、さまざまな運動団体また新しい共同体と関連する場合がある。小共同体は神のことばを囲んで定期的に集まり、互いに分かち合い、力を得ている。

感謝の祭儀を行うことができるのはごく稀である。人々は共同性を経験し、個人的なしかたで神のことばと出会う。人々は聖書を読むことを通じて、自分たちが神から個人として愛されていることを経験する。こうした共同体を指導する信徒の奉仕を評価し、推進すべきである。彼らは、洗礼を受けたすべての者が招かれている宣教の務めを果たしているからである。

提言 22：神のことばと霊的読書

シノドスは、若者を含めたすべての信者に「霊的で」熱心な読書によって聖書に近づくよう促すことを提言する（『神の啓示に関する教義憲章』25参照）。それは、神との対話が神の民の日々の現実となるためである。

そのために次のことが重要である。

・霊的読書をマリアと教会史の中の聖人たちと深く結びつける。彼らは聖霊に従ったみことばの読み方を実践したからである。
・聖書に関する教師に学ぶべきである。
・牧者、司祭、助祭、また特別な意味でこれから司祭になる者に、かならず適切な養成を受けさせる。それは、彼らが神の民を生き生きとした霊的な力をもって教育できるようになるためである。
・信者を、その状況、身分、文化に応じて、個人また共同体として行う霊的な読書の適切な方法へと導く（「レクチオ・ディヴィナ」、日常生活における霊操、アフリカやその他の地域における「7つの段階」、祈りのさまざまな方法、家庭や教会基礎共同体における分かち合いなど）。
・教会が主日や週日の感謝の祭儀のために示す朗読箇所を用いた霊的読書を行うことを奨励する。それは、みことばと聖体の関係の理解を深めるためである。
・特に共同体による聖書の霊的読書が愛のわざの実践となるように留意する（ルカ4・18－19参照）。

シノドス教父は、現代において「レクチオ・ディヴィナ」や他の同様の方法が普及していることを知り、そこに希望のしるしを認めるとともに、すべての教会指導者にこの点での努力を強めることを勧める。

提言23：信仰教育と聖書

信仰教育はキリスト教的啓示に基づいて行われることが望ましい。信仰教育はエマオへの道でのイエスの教育方法を模範とすべきである。

イエスはエマオに向かう道で、弟子たちの心を開いて聖書を理解させる（ルカ24・27参照）。イエスのやり方は、キリスト教的啓示に基づく信仰教育が聖書の説明を含むことを示す。イエスのやり方はまた、われわれが現代人に近づいて、救いの福音を伝えるように招く。われわれが近づくべきなのは次の人々である。

・子どもたち。子どもたちに特別な関心をもつべきである。
・聖書に基づく教育を深めることを必要とする人々。
・その歩みに同伴することが必要な、洗礼志願者。聖書を読むことを通じて彼らに神の計画を知らせ、キリスト教の入信の秘跡によって主と出会い、共同体に加わり、宣教者となる準備をさせなければならない。

洗礼志願者に、洗礼後の秘義教育を与えなければならない。この継続教育では、聖書と『カトリック教会のカテキズム』を中心としなければならない。

提言24：神のことばと奉献生活

奉献生活は神のことばを聞くことから生まれ、福音を生活の規範として受け入れる。奉献生活はみことばの学びやの中で絶えず自らのあるべき姿を再発見し、教会と世界のための「福音的なあかし」へと向かう。神のことばの生きた「解釈」となるよう招かれた奉献生活は（教皇ベネディクト十六世「主の奉献の祝日と第12回世界奉献生活の日の感謝の祭儀の終わりに行われた演説（2008年2月2日）」参照）、それ自体として、神が教会と世界に語り続けるためのことばである。

シノドスは、奉献生活者の福音のあかしと、彼らがそれぞれのたまものである奉仕職を通じて地理的・文化的な宣教の最前線で進んで行う福音宣教とに感謝する。同時に、奉献生活者が、神のことばを個人また共同体として聞く場に配慮すること、また、信徒、特に若者に開かれた聖書に基づく祈りを学ぶ場を増やすことを勧める。

奉献生活者は、貧しい人の心をもって神のことばを聞き、正義と平和と被造物の保護に努めることによってこれにこたえなければならない。

シノドスは、観想生活の重要性と、観想生活が「レクチオ・ディヴィナ」の伝統に対して貴重な貢献を行うことを強調する。隠世修道共同体は霊性の学びやであり、地域教会の生活を力づける。「修道院という霊的なオアシスは、現代社会にもっとも大事なことを思い起こさせてくれます。それはつまるところ、唯一、決定的に重要なことです。すなわち、人生を生きるに値するものとする究極的な理由が存在します。それは神とその限りない愛です」（教皇ベネディクト十六世「2007年11月28日の『お告げの祈り』のことば」『霊的講話集2007』263頁）。

観想生活は、神のことばを受け入れ、祈り、記念する。それゆえ、観想生活を行う共同体が、その生活と宣教にとって適切な聖書的・神学的養成を受けられるよう留意すべきである。

提言25：釈義の方法の二つのレベルの必要性

『神の啓示に関する教義憲章』12に示された聖書解釈は今なおきわめて現実的な意味をもち、有効である。それは適切な釈義を行う上での、互いに異なりながら関連し合う、二つの方法論的レベルを規定している。

第一のレベルは、実際には、いわゆる歴史的・批判的方法に対応する。これは近代また現代の研究においてしばしば用いられて成果を上げ、特に神のしもべピオ十二世の回勅『ディヴィノ・アフランテ・スピリトゥ（1943年9月30日）』以来、カトリックの世界にも導入された。この方法は救いの歴史の性格そのものによって必要とされる。救いの歴史は神話ではなく、真の歴史だからである。この歴史の頂点は、神である永遠のみことばの受肉である。みことばは人間の時間の中に宿られた（ヨハネ1・14参照）。それゆえ、聖書と救いの歴史は、真剣な歴史的探究方法によっても研究されることを必要とする。

聖書の正しい解釈にとって必要な第二の方法論的レベルは、聖書の人間のことばが神的なことばでもあるという性格に対応する。第二バチカン公会議は適切にも、聖書が書かれる際に導きとなった同じ聖霊の助けによって聖書を解釈しなければならないことを思い起こさせる。

テキストの歴史的研究と並んで、適切なしかたで聖書の神学的な次元を探究しないなら、完全な意味で聖書解釈を行ったことにはならない。『神の啓示に関する教義憲章』は、この神的な次元、つまり聖書の神学的な意味に到達するために基準となる3つの決定的な要素を特定し、示している。すなわち、聖書全体の内容と統一性、教会全体の生きた伝統、そして三つ目は、信仰の類比に注意することである。「歴史的・批判的方法と、神学的方法という、この二つの方法論的なレベルを考慮したときに初めて、神学的釈義について語ることができます。これが聖書に適した釈義です」（教皇ベネディクト十六世「世界代表司教会議第12回通常総会での発表（2008年10月14日）」）。

提言 26：現代の釈義研究の視野の拡大

現代の歴史的・批判的研究を使用することによってもたらされる成果は否定できない。しかし、同時に、現代の釈義研究の状態を、その問題にも注意深く目を注ぎながら考える必要がある。カトリックのものも含めて、現代の学問的釈義は、歴史的・批判的方法に関してはきわめて高いレベルで行われている。幸いにも最近、その統合も行われた（教皇庁聖書委員会『教会における聖書解釈（1993年4月15日）』参照）。しかし、同じことを聖書のテキストの神学的次元における研究についていうことはできない。残念ながら、『神の啓示に関する教義憲章』12の3つの要素に示された神学的レベルは、しばしば存在しないかのように思われる。

この不在の第一の帰結は、聖書が現代の読者にとって単なる過去の書物となり、現代人に語りかけることができなくなるということである。このような状況において、聖書釈義は単なる資料批判、文学批判となる恐れがある。

第二の、おそらくより重大な帰結は、『神の啓示に関する教義憲章』に示された信仰の解釈学が消失することである。実際、信仰の解釈学の代わりに忍び入るのは、実証主義的・世俗的解釈学である。この解釈学は人間の歴史の中に神的なものが存在し、それに近づきうることを否定するのである。

シノドス教父は、聖書の深い意味を発見するための助けとなった、そして今も助けとなっている多くの釈義学者と神学者に心から感謝しながら、聖書解釈の神学的レベルに力強くはっきりと到達するためにますます取り組むことをすべての人に求める。

公会議が望む聖書への愛を深めるために、『神の啓示に関する教義憲章』が十全なかたちで明確に示した原則を適用することを心がけなければならない。

提言 27：釈義と神学の対立の克服

教会生活と宣教にとって、また、現代文化における信仰の未来にとって、釈義と神学の対立を乗り越えることが必要である。残念ながら、高度な学問的レベルにおいても釈義と神学の間で非生産的な分離が生じることが少なくない。

そこから生まれる憂慮すべき帰結は、教会の奉仕職の志願者の養成を含め

て、知的な教育方法が不安定かつ不確実なものとなることである。聖書神学と組織神学は、われわれが神学と呼ぶ唯一の現実の二つの側面である。

それゆえシノドス教父は、尊敬の念をこめて神学者と釈義学者に呼びかけを行う。どうか、はっきりとした一致のうちに協力し合いながら、現代神学に聖書の力を与えるとともに、聖書研究を、霊感を受けたテキストの資料批判におとしめないように。

「釈義が神学的な釈義でない場合、聖書は神学の中心となりえません。逆もまた真実です。神学が本質的な意味で教会の中で行われる聖書の解釈でなくなれば、このような神学はもはや基盤をもたないものとなります」（教皇ベネディクト十六世「世界代表司教会議第12回通常総会での発表（2008年10月14日）」）。

提言28：釈義学者、神学者、司牧者の間の対話

司教協議会は、神のことばへの奉仕における一致を深めるために、司牧者、神学者、釈義学者の定期的会合を援助することが求められる。われわれは、釈義学者と神学者が、神の民の信仰の深化と教育のために、それぞれの学問的成果をいっそう分かち合えるようになることを望む。その際、聖書のカトリック的解釈の特徴となる側面に常に留意しなければならない（教皇庁聖書委員会『教会における聖書の解釈』Ⅲ参照）。

提言29：旧約を読む際の困難

旧約を読む際に困難が生じることがある。テキストが、暴力、不正、不道徳、模範とならない要素を含み、場合によって重要な聖書の人物にもそれらの要素が見られるからである。

したがって、これらの箇所を読むための信者に対する適切な準備と、テキストを歴史的・文学的背景のもとに読ませ、キリスト教的な読み方を行えるようにするための教育が必要である。このような教育にとって中心的な解釈の鍵となるのは、福音と、復活の神秘によって実現されたイエス・キリストの新しい掟である。それゆえ、旧約を読むことをなおざりにしないことを勧める。旧約は、たとえ多少とも難解なところがあっても、救いの歴史の完全

な意味での理解のために不可欠だからである（『神の啓示に関する教義憲章』15参照）。

提言30：聖書司牧

『神の啓示に関する教義憲章』は、神のことばを神学の魂とするだけでなく、司牧的配慮と教会生活と宣教の魂ともするよう勧告する（『神の啓示に関する教義憲章』24参照）。司教は自分の教区の中で第一にこのことを推進しなければならない。神のことばの信頼することのできる告知者となるために、司教は自らを神のことばで養わなければならない。それは、自分の司教としての奉仕職を支え、実り豊かなものとすることができるためである。シノドスはますます「聖書司牧」を推進することを勧告する。「聖書司牧」は、他の司牧と並んでではなく、司牧全体を聖書によって力づけるために行うべきである。

司牧者の指導のもとに、洗礼を受けたすべての者は教会の宣教に参加する。シノドス教父は、福音宣教への奉仕を心から評価し、感謝し、奨励したいと望む。多くの信徒、特に女性が、復活の喜びの最初の証人であるマグダラのマリアの模範に従いながら、世界中の共同体において惜しみなく福音宣教に取り組むことができるようになるためである。

提言31：神のことばと司祭

神のことばは、みことばの奉仕者であるよい牧者の心を養成する上で不可欠である。そのため『現代の司祭養成』はこう述べる。「司祭はまず、役務上語ることばが『自分』のものではなく、自分を遣わしたかたのものであることを十分に自覚した上で、まず、みことばの第一の『信者』でなければなりません。司祭はみことばの主人ではなく、みことばに仕える者です。みことばの唯一の所有者ではなく、みことばについて神の民に対して責任を負う者です」（教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成（1992年3月25日）』26）。司祭、特に主任司祭は、日々、聖書によって自らを養い、知恵と寛大な心をもって、自分が司牧するようゆだねられた信者に聖書を伝えるよう招かれている。

提言32：司祭志願者の養成

司祭志願者は神のことばを愛することを学ばなければならない。それゆえ、聖書を神学養成の魂としなければならない。その際、釈義と神学と霊性と宣教が一つながりのものであることを強調すべきである。だから、司祭養成は、以下のように聖書にさまざまなしかたで近づくことを含まなければならない。

- 霊的な読書、特に「レクチオ・ディヴィナ」を、個人としても共同体としても、聖書を最初に読む際に行う。このような霊的読書を養成の全過程を通じて継続することが必要である。その際、教会が神学生養成中の黙想・黙想会に関して定めたことを考慮すべきである。
- 神のことばを自らの糧とするために、豊かな内容をもつ聖務日課も用いる。
- 釈義のさまざまな方法を見いだす。恣意的な解釈に陥る危険を避けるために、解釈の規則を正確に、また幅広く学ぶことが必要である。神のことばを正確に実り豊かなしかたで理解できるために、釈義の方法の可能性と限界を適切なかたちで知らなければならない。
- 教父、聖人、教会博士、現代に至るまでの霊性の師における、聖書の読み方の歴史を知る。
- 神学養成における説教のための養成を強化し、奉仕職に就いてからの継続養成に留意する。説教が聴衆に語りかけるものとなりうるためである（使徒言行録2・37参照）。
- 神学校での養成と並行して、司祭志願者は、神のことばを囲んで行われる信徒のグループや団体の会合に参加するのが望ましい。十分な時間をかけて行われるこうした会合は、青年も高齢者も含めて、聖霊が教会に集めた信者に語りかけることを聞く経験と感性を将来の奉仕者のうちに培う。

哲学の真剣な勉学をおろそかにしてはならない。哲学は、聖書研究に適用されるさまざまな解釈学に含まれる前提や意味をはっきりと評価させてくれるからである（『司祭の養成に関する教令』15参照）。

そのため、哲学科において、超越へと開かれた哲学思想と文化思潮（美術・音楽）を発展させ、教えることが望ましい。それは、学生が、人間の心の望みを唯一、満たすことのできる神のことばを聞いて理解できるようになるた

めである（教皇ヨハネ·パウロ二世回勅『信仰と理性（1998年9月14日）』83参照）。

カリキュラムを刷新することが望まれる（教皇ヨハネ·パウロ二世使徒憲章『サピエンチア・クリスティアーナ（1979年4月15日）』参照）。それは、より明確なかたちで、聖書に照らした神学の体系的研究を行えるようにするためである。さらに、神学校や養成の家における教育課程を見直す際に、養成のさまざまな面で神のことばがふさわしい位置を占めることに注意しなければならない。

提言33：キリスト信者の聖書教育

聖書を愛することは聖霊の与える恵みである。この恵みは信者の生活全体に行き渡る。それゆえ、キリスト信者はこの神のたまものを大事にすることを学ばなければならない。主はいわれる。「もしあなたが、神のたまものを知っていたならば」（ヨハネ4・10）。

それゆえ、神のことばを理解し、生き、告げ知らせることを学べる、信者とみことばの宣教者のための養成センターを文化圏ごとに設置することが望ましい。さらに、必要に応じて、釈義学者のための専門的な聖書研究機関を設置するとよい。こうした機関は、堅固な神学的理解と、宣教状況に対する感覚をもつべきである。今述べたことは、神学校や学科のような既存の制度の見直しや強化によって実現することも可能である。最後に、聖書をさまざまな現代語に翻訳する人々に聖書の言語を適切なしかたで教えることも必要である。

提言34：青年に聖書を普及させること

イエスは青年に向かって、「わたしに従いなさい」と招いた。それと同じように、現代においても、子ども、少年、青年に対して、「あなたがたの求めているこたえを主のことばのうちに見いだしなさい」と、あらためて招かなければならない。青年に聖書を普及させるに際して、ベネディクト十六世の招きを思い起こすべきである。「親愛なる友人である若者の皆さん。わたしは皆さんが聖書に親しむように、強く勧めます。聖書をいつも手に携えてくださ

い。それは、聖書が皆さんにとって、行くべき道を指し示す羅針盤となるためです」（教皇ベネディクト十六世「第20回世界青年の日メッセージ（2006年2月22日）」）。聖書が召命にとってもつ意味を示すことが望まれる。それは、多くの青年が完全な奉献をも含む召命の決断をする上で、聖書が助けと方向づけとなるためである。キリスト教共同体は愛をもって若者を受け入れ、耳を傾け、支えなければならない。それは、若者が、教育者から聖書を学ぶことによって、神のことばのまことの情熱的な証人となるためである。こうして、福音を愛し、特に現代人に福音を伝えるように、若者を導くことができる。

提言35：聖書と保健司牧

イエスは、生涯を通して病人を気遣い、いやし、この奉仕のうちに神の国の現存のしるしを示した（ルカ7・22参照）。聖書は今日も、病者と苦しむ人に、慰め、励まし、心とからだをいやすことばを与え続ける。詩編の祈りは人の心の深みに触れ、すべての人が神のことばそのものによって自分の苦しみと望みを言い表すことを可能にする。それゆえ、シノドス教父は、あらゆる種類の病気に苦しむ人に近づく人が、謙遜に、しかし勇気をもって、聖書と聖体のうちに生きている主イエスのことばを病者にもたらすことを勧める。現代においても、神のことばが保健司牧を力づけることが不可欠である。それは、病者が信仰を通じて、自分の苦しみによってあがないをもたらすキリストの苦しみにあずかれることを見いだすように導くためである（二コリント4・8－11、14参照）。

提言36：聖書とキリスト者の一致

聖書はまことにさまざまな教会と教会共同体が出会う特別な場である。ともに聖書のことばを聞くことにより、われわれは、完全ではないにしても現実の一致を体験する（「中間報告」36）。「神のことばにともに耳を傾け、聖書のレクチオ・ディヴィナ（霊的な読書）を実践することは‥‥聞いた神のことばにこたえて、信仰の一致に達するために歩むべき道です」（教皇ベネディクト十六世「キリスト教一致祈祷週間を終える夕の祈りでの講話（2007年

1月25日)」)。それゆえ、ともに聖書のことばを聞くことは、愛の対話を促し、真理の対話を深める。教会（特に教導職）の解釈における権威を有する者の理解に関して、エキュメニカルな問題が残っている。それゆえ聖書の共同の研究・探求を強化すべきである。同じく、聖書の翻訳と普及に関する共同事業や、神のことばに耳を傾けるための超教派的な祭儀も推進すべきである。

提言37：バルトロマイ一世のシノドス参加

シノドス教父は、他の教会・教会共同体の友好使節と代表がシノドスに参加し発表してくださったこと、特に教皇ベネディクト十六世がコンスタンチノープルの世界総主教バルトロマイ一世とともに晩の祈りを司式したことを神に感謝する。シノドス教父に対するバルトロマイ一世のことばは、深い霊的な喜びを与えるとともに、まだ完全ではないにしても現実の深い一致を生き生きと体験させてくれた。われわれはバルトロマイ一世のことばのうちに神のことばの美しさを味わった。バルトロマイ一世は神のことばを聖体礼儀と教父に照らして読んだからである。それは現代に深く適応した霊的な読み方である。

それゆえわれわれは、聖書の中心に赴くことによって、真の意味でことばの中のことばと出会うのだということを知った。みことばは信者の目を開いて、現代世界の問題にこたえることを可能にする。さらにわれわれは、自分たちが西方教会と東方教会の共通の教父をもつという喜ばしい体験をともにした。このバルトロマイ一世との出会いが唯一の主への燃えるような祈りとなる。どうか、「すべての人を一つにしてください」（ヨハネ17・21）というイエスの祈りができるだけ早く実現しますように。

第三部
教会の宣教における神のことば

提言38：洗礼を受けたすべての人の宣教の使命

神のことばを告げ知らせるという使命は、洗礼を受けることに基づく、イエス・キリストのすべての弟子の使命である。あらゆる小教区、共同体、カ

トリック組織においてこの自覚を深めなければならない。すべての人、特に、洗礼を受けながら十分福音を生きていない兄弟に神のことばを届けるための取り組みを行うべきである。神のことばは人間に伝えられるために肉となった。だから、神のことばを知らせるための特別な方法は、それを現存させ、生きる証人との出会いである。

その固有のカリスマと経験の力によって、宣教会の協力は宣教に特別に役立つ。さらに新しい運動団体の存在は、現代における教会の福音宣教にとって特別に豊かな力となる。それは教会が福音を告げ知らせる新しい方法を発展させるための刺激となるからである。信徒は自らの預言的職務を果たし、家庭、職場、またあらゆる場を含めた日常生活において福音をあかしする責任を再発見するよう招かれている。信徒の預言的職務は、洗礼に直接、由来する。しばしばこのあかしは、福音を理由とする信者の迫害を招く。シノドスは公共生活の指導者に信教の自由を保障するよう呼びかける。

さらに、キリスト教入信の過程を開かれたものとする必要がある。人々は、神のことばを聞くことや、感謝の祭儀、また共同体の中で経験する兄弟愛を通じて、いっそう成人としての信仰をもつことができるようになる。人の移動と移住の現象から生じる新たな問題を考察すべきである。この現象は福音宣教の新たな展望を開くものである。なぜなら、移住者は福音宣教を受けることを必要とするだけでなく、自ら福音宣教を行う者となることができるからである。

提言39：神のことばとこの世とのかかわり

聖書と教会の生きた聖伝に含まれた神のことばは、人の思いと心がすべての人と被造物を理解し愛する助けとなる。実際、神のことばは、より公正で住みよい世界を作ろうとするすべての人の努力のうちに、神のしるしを見いだす助けとなる。神のことばは、歴史の中にある「時のしるし」を見分けるよう励ます。信者が、苦しむ人、不正の犠牲となった人のために働くよう駆り立てる。正義と変革のための戦いは福音宣教の不可欠の部分である（教皇パウロ六世使徒的勧告『福音宣教（1975年12月8日）』19参照）。

シノドス教父は、信者として政治・社会生活に従事する人々に特別に思いを致す。神のことばがこの人々の行うさまざまなあかしを支え、世における

その行動を力づけることを望む。それは、彼らがすべての人のまことの善を求め、すべての人格の尊厳を尊重できるためである。それゆえ、この人々が教会の社会教説の原則に従った適切な教育を通じて養成されることが必要である。

提言 40：神のことばと教会美術

東方教会と西方教会の偉大な伝統は、芸術表現、特に聖書から霊感を受けた聖画像を常に尊んできた。

われわれは美を愛するすべての芸術家に感謝する。すなわち、詩人、文学者、画家、彫刻家、音楽家、演劇・映画俳優である。これらの芸術家は、教会を美しく飾り、信仰を祝い、典礼を豊かなものとするために役立ってきた。同時に、多くの芸術家は、見えない世界を目に見えるものとし、神の語りかけをさまざまな言語表現に移し変える助けとなってきた。これらすべてのことに対してシノドスは深い感謝を表したい。

あらゆる文化の分野で新たな時代を生み出すことが必要である。それは、芸術が聖書の霊感とあらためて出会い、啓示された神のことばを告げ知らせ、歌い、観想できるための道具となるためである。

教会建設に際して、司教は、適切な助けを得ながら、教会が、みことばを告げ知らせ、黙想し、感謝の祭儀を行うためにふさわしい場となるよう配慮しなければならない。典礼以外のための聖なる場所も、神のことばにかかわるキリスト教の神秘を雄弁に示すものとしなければならない。

提言 41：神のことばと文化

神のことばは全人類に向けられている。神のことばが数世紀にわたって、さまざまな文化に霊感を与え、根本的な道徳的価値観や優れた芸術表現、また模範的な生活様式を生み出してきたことを認めなければならない。実際、神のことばには、科学が新たな探究において発見を行い、われわれと信仰を共有しない人々との対話を推進するための助けとなる要素が見いだされる。それゆえシノドス教父は、特に現代に見られる意味への問いに関して、聖書と文化の対話が行われることを願う。それは、人々の探求に決定的なしかた

でこたえられるようにするためである。

世俗的な社会や、非信者を含めて、聖書研究グループを作ることが望ましい。それは、聖書のことばを通して世を神に開く道となる。

提言42：聖書と聖書翻訳

シノドスは隣接した文化や類似する言語圏において同一の聖書翻訳が、典礼での使用においても個人的な使用においても、認可･使用されることを勧告する。

世界の多くの教会が自らの地域言語に翻訳された聖書をいまだにもたずにいる。それゆえ、諸言語への聖書の翻訳に従事する専門家を養成することが何よりも重要である。

提言43：聖書と聖書の普及

シノドスは、全信者が聖書テキストを容易に読めることの必要性を思い起こしたい。同時に、シノドスは、現代の技術が提供するあらゆる手段を用いて、特にさまざまな能力の人々にできる限り聖書を普及させるために、多くの力を注ぐことを求める。教会はこのような人々に特別な関心を抱いているからである。

そのためには教会間の特別な協力が必要である。それは、多くの手段を有する教会が、困窮した教会の必要にいっそうこたえることができるためである。シノドス教父は、多くの人が聖書に近づくことができるようにするための世界カトリック聖書連盟の活動を支えることを勧告する（『神の啓示に関する教義憲章』22参照）。聖書翻訳の数を増やし、聖書をいっそう普及させるためである。このことは各国の聖書協会と協力して行うべきである。

提言44：マス・メディア

シノドスは福音宣教のために伝達手段･言語が重要であることを強調する。福音の告知は、さまざまなメディアの交流によって特徴づけられる現代の情報通信手段のうちに新たな可能性を見いだす。

教会は、メディアを通じて神のことばを広めるだけでなく、何よりも、救いの知らせと、メディアが作り出し、広げた新しい文化とを結びつける必要がある。

新しいメディア状況は、宣教の手段の多様化と、聖書研究の推進を可能にする。豊かな聖書研究の成果を、新しい通信手段を通じて、遠隔地も含めたすべての共同体にもたらす必要がある。

シノドスは、メディアをよりよく知り、メディアの急速な変化に同伴し、さまざまな手段を通じてメディアに投資することを勧める。すなわち、ラジオ、新聞、インターネットなどである。いずれにせよ、こうした手段は神のことばを忠実に聞くことを容易にしてくれる方法である。確信をもってメディアの分野で働く、カトリック信者の専門家を作ることが必要である。

提言 45：神のことばと国際大会

現代、さまざまな性格の国際大会が開催される。それゆえ、神のことばに関する特別な大会を開催することが適切だとは考えない。しかし、国際大会の大きな部分を神のことばの研究とみことばの祭儀のために用いることは重要である。さらに司教協議会は、聖書の普及を目的とする週間を支え、推進するよう求められる。

提言 46：聖書の忠実な読み方――歴史性と根本主義（ファンダメンタリズム）

古代から教会の聖伝の中で実践されてきた、聖書の忠実な読み方は、一人ひとりの信者の生活と教会の救いとなる真理を探求する。この読み方は、聖書伝承に含まれた歴史的価値を認める。このような歴史的証言の価値に基づいて、この読み方は、現代の信者の生活にも当てはまる聖書の深い意味を再発見しようと望む。

このような聖書の読み方は「根本主義的解釈」とは異なる。「根本主義的解釈」は、霊感によって書かれたテキストが人間によって媒介されることと、文学形式を無視するからである。「レクチオ・ディヴィナ」を実り豊かなしかたで用いるために、「無意識の中に聖書のメッセージの人間的限界を、このメッセージの神的本質と混同」（教皇庁聖書委員会『教会における聖書の解釈』

IF〔前掲和田幹男訳、253頁〕参照）しないように信者を教育する必要がある。

提言47：聖書とセクト現象

われわれはセクト現象の増加と変化に深い関心を抱いている。実際、さまざまな起源をもつセクトは、神が個人の生活に近づく体験を提供するとともに、しばしば聖書を根本主義的なしかたで解釈することを通して幸福の幻想を約束するように思われる。

われわれは次のことを提案する。

・聖書の生き生きとした正しい解釈を通じて、みことばの糧を求める信者にそれを与える司牧活動を強化すること。
・最初の数世紀の教会の豊かな経験から学ぶこと。この時代の教会にも同様の現象があったからである（一ヨハネ2・19、4・2－3参照）。
・現代に見られるセクト特有の性格、原因、指導者をよく知ること。
・神のことばと私的啓示をはっきり区別できるよう信者を助けること。
・セクトと根本主義の魅力と戦うために、分かち合いと黙想を行うグループの活動を奨励すること。

こうした新しい事態に対応できるよう、司祭を適切なしかたで養成することが必要である。司祭が、現代人が感じる問題に合わせて、聖書に基づく司牧を推進できるようにしなければならない。

われわれは、聖座が、司教協議会と東方カトリック教会の権限のある機関と協力しながら、セクト現象の世界的な広がりと地域的な影響を研究することを要望する。

提言48：聖書とインカルチュレーション

啓示は、人間のさまざまな文化の中から、神がわれわれの救いのために伝えた真理を表現できる真の価値あるものを用いることによってなされる（『神の啓示に関する教義憲章』11参照）。実際、啓示された神のことばは、それまで知られていなかった真理の認識を文化にもたらし、文化を発展・展開させる。すべての造られたものに神のことばを告げ知らせるようにという教会

に対する神の命令は（マルコ16・15参照）、神のことばと、地上の全民族およびその文化との出会いを含む。この出会いは、啓示において行われた神のことばのインカルチュレーションの過程を前提とする。

それゆえ、神のことばはあらゆる状況に行き渡らなければならない。それは、文化が、生活・典礼・キリスト教思想の独自の表現を生み出せるようにするためである（教皇ヨハネ·パウロ二世使徒的勧告『要理教育（1979年10月16日）』53参照）。このことは、文化に対して示された神のことばが「民族の精神的長所と各民族または各時代の美点を‥‥内面からはぐくみ、強め、完成させ、キリストにおいていやし」（『現代世界憲章』58）、そこから、キリスト教生活の新しい表現を引き出すことによって行われる。

福音のメッセージの真のインカルチュレーションを行うためには、適切な手段によって宣教者の養成を強化しなければならない。人々が生きる環境や社会的・文化的状況を深く知ることができるようになるためである。こうして宣教者は、環境、言語、地域文化に適応できる。福音のメッセージの真の意味でのインカルチュレーションを実現し、当然のことながら、混交主義の危険に注意を払うのは、第一に地域教会の役割である。インカルチュレーションの質は、どれだけ成熟したかたちで共同体を福音化できるかにかかっている。

提言49：「諸国民」への宣教

神のことばはすべての人にとっての善である。教会はこの善を自分だけのためにとっておくのではなく、喜びと寛大な心をもってすべての民族・文化に分かち与えなければならない。それは、すべての民族・文化もイエス・キリストのうちに道、真理、いのちを見いだせるようになるためである（ヨハネ14・6参照）。

長い教会の歴史の中で福音を諸国民にもたらした、聖パウロと使徒と多くの宣教者の模範を仰ぎ見ながら、シノドスは、現代においても「諸国民」への宣教が急務であることをあらためて確認する。この宣教は、明確なしかたで、教会の内部だけでなく、あらゆるところで行われなければならない。また、宣教は、宣教と一致した生活のあかしを伴わなければならない。このあかしが宣教の内容をはっきりと示し、強めるからである。

司教、司祭、助祭、奉献生活者、信徒も、典礼に参加せず、教会にあまり来ない人に寄り添わなければならない。教会は霊の力をもってすべての人のところに行き（一コリント2・5参照）、人々が神のことばを聞く権利と自由を預言者として擁護し、迫害の危険があっても、もっとも効果的な宣教の手段を探さなければならない。

提言50：聖書と諸宗教対話

キリスト教以外の諸宗教との対話は、教会生活と人類との対話において重大な要素である。一神教、アフリカとオーストラリアの伝統宗教、アジアの古来の霊的伝統は、尊重し、ともに協力すべき価値をもつ。こうした協力関係は、人間間、社会間の理解を大いに深めることができる。こうした対話の指針となるのは第二バチカン公会議の『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』である。シノドスはまた、すべての宗教者が、個人としても公にも自分の信仰を表明できる自由と、良心の自由を、実効的に保障する必要を確認する。

提言51：聖地

パウロ六世は聖地を「第五の福音」と呼んだ。シノドスは、聖地巡礼と、可能であれば、聖地で聖パウロの足跡をたどりながら聖書を学ぶことを勧める。こうした経験を通じて、巡礼者と研究者は、聖書の物理的・地理的環境と、特に旧約と新約の関係をいっそう理解することができる。イエスがその上を歩んだ石は、巡礼者が生き生きと思い起こすことができる石となる。いずれにせよ、聖地のキリスト信者は、すべてのキリスト信者、特に現代において紛争と貧困と恐怖のうちに暮らすキリスト信者との一致を必要とする。

提言52：キリスト教徒とユダヤ教徒の対話

キリスト教徒とユダヤ教徒の対話は、教会の本性に属する。ご自分の約束を忠実に守る神は、旧約を廃止しない（ローマ9章、11章参照）。ナザレのイエスはユダヤ人であり、聖地は教会の生まれた母なる地である。キリスト

教徒とユダヤ教徒は、キリスト教徒が旧約と呼ぶ、ユダヤの民の聖書を共有する。アブラハムの子孫であるユダヤ教徒とキリスト教徒は、人類への祝福の源となることができる（創世記17・4－5参照）。

ユダヤ教の聖書理解は、キリスト教徒が聖書を理解し、学ぶ上で助けとなる。

キリスト教の聖書解釈は、肉となったみことばであるイエスのうちに旧約と新約が一致することを基盤とする。イエスの人格のうちに、聖書の完全な意味が、霊感によって書かれたユダヤ人の聖書との連続性と非連続性のうちに理解される。

司教協議会がユダヤ教徒とキリスト教徒の会議・対話を推進することを勧める。

提言53：キリスト教徒とイスラム教徒の対話

「教会はイスラム教徒をも尊重する。彼らは唯一の神……を礼拝する」（『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』3）。イスラム教徒はアブラハムに言及し、特に祈りと施しと断食をもって神をあがめる。イスラム教徒との対話は、相互理解と、倫理的·精神的価値観を推進するための協力を可能にする。

イスラム教徒との対話において、シノドスは、生命、人権、女性の尊重の重要性と、世界における正義と平和を推進するために政治・社会と宗教の次元を区別すべきことを強調する。イスラム教との対話におけるもう一つの重要なテーマは、互恵性と、良心および信教の自由である。

もしその国においてそれが有益であるなら、当該国の司教協議会に対して、キリスト教徒とイスラム教徒の対話の輪を広げることを勧める。

提言54：神のことばの宇宙的な側面と被造物の保護

神のことばは、被造物の美しさや、神を映し出す聖なる像、たとえば受肉したみことばの像（イコン）を通して、神の美しさをわれわれに伝える。これらのものは、目に見えない神の神秘が、ある意味でわれわれの感覚で見え、とらえられるようになるための方法である。さらに教父は、肉となった神の

ことばが宇宙的な側面をもつことを常に強調した。実際、すべての被造物はある意味で神のことばのしるしを帯びている。死んで復活したイエス・キリストのうちに、すべての被造物は決定的なしかたで再び一つにまとめられる（エフェソ1・10参照）。それゆえ、万物またすべての人は、キリストと結ばれて、善なるもの、美なるものとなるよう招かれている。

残念ながら、現代人は、自らがその中に住み、また神が与えた世界の中で神のことばを観想する習慣を失っている。そのためわれわれは、神のことばをそのすべての側面において再発見することにより、被造物としての自然を尊重しない現代人のあらゆる行動を非難するよう促される。

聖書と教会の生きた聖伝のうちに示された神のことばを受けることは、事物に対する新しい見方を生み出し、真の意味での環境保護を推進する。この真の意味での環境保護は、神のことばを受け入れる信仰の従順のうちにその深い基盤を見いだす。それゆえわれわれは、教会の司牧活動において、被造物の保護への取り組みを強化し、万物がよいものであることに対する神学的感覚の刷新を推進することを望む。万物は、受肉した神のことばであるキリストによって創造されたものだからである。

結び

提言55：神の母であり、信仰の母であるマリア（Maria Mater Dei et Mater fidei）

今回のシノドスの目的は、何よりも、神のことばに対する教会の信仰を刷新することであった。それゆえ、シノドスは、受肉したみことばの母であるおとめマリアに目を向ける。マリアは、契約のことばと自分の使命を受け入れることによって、神から与えられた人類の使命を完全なしかたで実現したかただからである。シノドス教父は、信者の間で、受肉したみことばを日々思い起こす「お告げの祈り」と、ロザリオが広まることを勧める。

新しい契約に基づく教会は、人々が聖霊に完全なしかたで従いながら、受肉したみことばを受け入れ、愛し、これに仕えるところで生きる。さらに、マリアの信仰は愛のうちに深められた。この愛のうちに、マリアの信仰は、受肉したみことばの成長と宣教を伴ったからである。御子の十字架の下で、

信仰と愛は希望となった。マリアはこの希望によって、愛する弟子とあがなわれた人類の母となることを受け入れたからである。

マリアは教会の信仰の模範であり原型である。マリアの姿に敬虔で愛を込めた目を注ぐことは、現代においても、教会とみことばの関係のあり方を具体的に変えるためにきわめて重要である。それは、祈りをもってみことばを聞く態度においても、寛大な心をもってみことばを宣教し、告げ知らせる務めにおいてもいえる。

シノドス教父は、シノドスが「すべてのキリスト教共同体に真の意味での刷新の実りをもたらすことができるように」（教皇ベネディクト十六世「ポンペイでの『お告げの祈り』（2008年10月19日）」）と教皇とともに祈りながら、司牧者と信者に願う。マリアに向かい、肉となった神のことばへの生き生きとした信仰の恵みを聖霊に祈り求めてほしい。

12. 閉会ミサ説教

教皇ベネディクト十六世

10月26日（日）午前9時30分から、サンピエトロ大聖堂で、教皇ベネディクト十六世司式の下、世界代表司教会議第12回通常総会閉会ミサが行われた。ミサはシノドス教父と協力者326名が共同司式した。共同司式者の内訳は、枢機卿52名、東方カトリック教会の代表者14名、大司教45名、司教130名、司祭85名（シノドス教父12名、シノドス事務総局スタッフ5名、オブザーバー30名、専門家5名、広報担当者4名、アシスタント24名、通訳5名）であった。以下は、教皇がミサで行った説教の全文の翻訳（原文はイタリア語）。

10月26日は年間第30主日で、聖書朗読箇所は、出エジプト記22・20－26、テサロニケの信徒への手紙一1・5ｃ－10、マタイによる福音書22・34－40であった。

司教職と司祭職にある兄弟の皆様
親愛なる兄弟姉妹の皆様

たった今、福音の中で読まれた主のことばは、神の律法全体が愛に要約されることを思い起こさせてくれます。福音書記者マタイは述べます。ファリサイ派の人々は、イエスのこたえによってサドカイ派の人々が黙り込んだ後、イエスを試そうとしました（マタイ22・34－35参照）。そのうちの一人の律法の専門家がイエスに尋ねました。「先生、律法の中で、どの掟がもっとも重要でしょうか」（マタイ22・36）。この問いによって、ユダヤ人の伝統の中に、神のみ旨に関するさまざまな定式を統一する原則を見いだしたいという関心があったことがわかります。これは簡単な問いではありませんでした。モーセの律法の中には613の掟と禁止規定が含まれていたからです。どうすればその中でもっとも重要なものを見分けることができるでしょうか。しかし、イエスはためらうことなく、すぐにこたえます。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。これがもっとも重要な第一の掟である」（マタイ22・37－38）。イエスはこたえの中で「シェマーの祈り」を引用します。「シェマーの祈り」とは、敬虔なイスラエル人が一日

に何度も、特に朝と夕に唱えた祈りです（申命記6・4－9、11・13－21、民数記15・37－41参照）。それは、唯一の主である神にふさわしい、十全かつ完全な愛を表明したものです。そこではこの神への献身がまったきものであることが強調されます。そのために、心、精神、思いという、人間の深い心理的構造を規定する3つの能力が挙げられます。「思い（ディアノイア）」ということばは理性的な要素も含みます。神は、愛、献身、意志、感情を向ける対象であるだけでなく、知性の対象でもあります。それゆえ、知性もこの場から除外されないのです。わたしたちは自分たちの思いをも神の思いと一致させなければなりません。しかし、イエスはさらにこう付け加えます。実際には、これは律法の専門家が尋ねていなかったことです。「第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』」（マタイ22・39）。イエスのこたえの驚くべき点はこれです。イエスは、第一の掟と第二の掟が類似することを明らかにしました。そのためにイエスは、第二の掟もレビ記の聖性に関する規定によって定めます（レビ19・18参照）。それゆえ、二つの掟は、聖書の啓示全体を支える主要な原理の役割を果たすものとして結びつけられます。「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」（マタイ22・40）。

わたしたちが考察している聖書の箇所は、キリストの弟子であるとはどういうことかを照らしてくれます。キリストの弟子であるとは、キリストの教えを実行することです。キリストの教えは、愛の掟という、神の律法のもっとも重要な掟に要約されます。出エジプト記からとられた第一朗読も、愛の務めについて述べます。愛は人間関係の中で具体的に示されます。この愛は、尊敬、協力、寛大な助け合いの関係でなければなりません。寄留者、孤児、寡婦、貧しい人、すなわち「保護者」をもたない住民も、隣人として愛さなければなりません。聖書の著者は、貧しい人が何かを質に預ける場合など、細かいことにも触れます（出エジプト記20・25－26参照）。その場合、神ご自身が隣人の身元の保証人となります。

第二朗読では、最初のキリスト教共同体の一つにおいて最高の愛の掟が具体的に実践されたことが示されます。聖パウロはテサロニケの信徒への手紙の中で、次のことを知らせます。わたしはあなたがたを少ししか知りませんが、あなたがたに感謝し、心からあなたがたを愛しています。だからパウロは彼らを「マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範」（一テサロ

ニケ1・6－7）と呼びました。設立されたばかりのこの共同体には弱さも問題もあります。しかし、愛はすべてを乗り越え、すべてを新たにし、すべてに打ち勝ちます。この愛を行う者は、自分の限界を知りながらも、神である師キリストのことばに素直に従います。このことばは、キリストの忠実な弟子によって伝えられたものだからです。聖パウロはいいます。「あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となりました」。使徒パウロは続けていいます。「主のことばがあなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡ったばかりでなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられています」（一テサロニケ1・6、8）。テサロニケの信徒の経験は、実際、あらゆる真のキリスト教共同体に共通する経験です。この経験からわたしたちが引き出すことのできる教えはこれです。隣人への愛は、神のことばに素直に耳を傾けることによって生まれます。この愛は、神のことばの真理のゆえに厳しい試練も受け入れます。このようにして真の愛が成長し、真理はそのすべての輝きを現します。それゆえ、個人と共同体の生活の中でみことばに耳を傾け、それを具体化することは、どれほど重要なことでしょうか。

シノドスを終えるこの感謝の祭儀の中で、わたしたちは特別なしかたで、「愛をこめて神のことばを聞くこと」と「分け隔てなく兄弟に奉仕すること」のつながりを感じます。神に深く耳を傾け、その救いのことばを真の意味で知ること。神のことばの食卓で常に養われる信仰を心から分かち合うこと。これらのことが現代、緊急に必要とされていることを明らかにする経験と考察が、この数日間、何度語られたことでしょうか。親愛なる敬愛すべき兄弟の皆様。「教会生活と宣教における神のことば」というシノドスのテーマを深めるために、皆様の一人ひとりが貢献してくださったことに感謝します。心から皆様にごあいさつ申し上げます。特にシノドス議長代理の枢機卿と事務総長にごあいさつ申し上げます。このかたがたの絶えざるご努力に感謝申し上げます。豊かな経験を携えてあらゆる大陸から来られた親愛なる兄弟姉妹の皆様にごあいさつ申し上げます。帰国されたら、すべての人々にローマ司教からの愛をこめたあいさつをお伝えください。友好使節、専門家、オブザーバー、特別招待者の皆様、そして、シノドス事務総局のスタッフ、広報担当者の皆様にごあいさつ申し上げます。わたしは、シノドス総会に代表者が参加できなかった中国本土の司教の皆様に特別に思いを致します。わたしは

彼らに代わり、彼らのキリストへの愛と、普遍教会との交わりと、使徒ペトロの後継者への忠実のゆえに神に感謝したいと思います。彼らは、彼らが司牧するようゆだねられたすべての信者とともに、わたしたちの祈りの中にいます。わたしたちは「大牧者」（一ペトロ５・４）に願い求めます。わたしたち皆が心から愛する中国のカトリック共同体を知恵と先見の明をもって導くための、使徒としての喜びと力と情熱を彼ら司教に与えてくださいますように。

シノドスに参加したわたしたちは皆、あらためて次のことを自覚しています。新千年期の初めにあたって、教会の第一の務めは、何よりも神のことばによって養われることです。それは、新しい福音宣教をより力強く行い、現代にみことばを告げ知らせることができるようになるためです。今必要なのは、この教会の経験がすべての共同体に伝わることです。わたしたちは、自分が聞いたことばを愛のわざに変えなければならないことを悟らなければなりません。なぜなら、そうすることによって初めて、一人ひとりの人が人間的な弱さをもっているにもかかわらず、福音の宣教が信頼できるものとなるからです。そのためにまず必要なのは、キリストをますます深く知り、キリストのことばをいっそう素直に受け入れることです。

パウロ年にあたり、わたしたちは使徒パウロのことばを自分のことばとします。「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」（一コリント９・16）。そこでわたしは、すべての共同体が、深い確信をもって、このパウロの思いは、自分が世のために福音に奉仕するよう召されていることだと感じてくださるよう心から願います。わたしはシノドスの初めにイエスの呼びかけを思い起こしました。「収穫は多い」（マタイ９・37）。それは、どんな困難に遭おうとも、倦むことなくこたえていかなければならないという呼びかけです。多くの人が、時には自覚せずに、キリストとその福音との出会いを探し求めています。多くの人がキリストのうちに人生の意味を見いだすことを必要としています。それゆえ、イエスが示した神のことばに従った人生を、はっきりと目に見えるしかたであかしすることが、教会の宣教を確かなものとするための不可欠の基準です。

今日の典礼が黙想するよう示す聖書朗読は、律法ならびに聖書全体の完成は愛であることをわたしたちに示します。ですから、聖書を少なくとも部分的にでもわかったと思いながら、自らの知性によって、神への愛と隣人への

愛という二つの愛を築こうと努めない人は、実際には、聖書の深い意味を理解するにはほど遠いところにいることを示します。しかし、聖書との生きた深い接触をもたずに、どうしてこの掟を実践することができるでしょうか。神への愛と兄弟への愛を生きることができるでしょうか。第二バチカン公会議はいいます。「キリスト信者には、聖書に近づく多くの機会が与えられなければならない」（『神の啓示に関する教義憲章』22）。それは、人が真理と出会い、真の愛を成長させることができるためです。これは今日、福音宣教のために欠くことのできない条件です。ところで、聖書と出会うことが危険にさらされることがしばしばあります。それは、教会において聖書と出会う「こと」そのものによってではなく、主観主義的・恣意的解釈にさらされることによってです。そこで、キリスト教共同体の中でみことばを告げ、祝い、生きるための「聖書の知識に関する堅固で信頼できる司牧的養成」が不可欠となります。そして、現代の文化と対話し、流行思想ではなく、真理に奉仕するよう努め、神がすべての人と行おうと望む対話を深めなければなりません（同21参照）。そのため、司牧者の養成に特別な注意を払うべきです。それは、適切な手段を通じて聖書教育を広めるために必要な活動を行えるようにするためです。信徒による聖書運動と、グループの指導者の養成を推進する努力も奨励すべきです。その際、特に若者に注意を向ける必要があります。「離れた」人々、特に人生の意味を真剣に探求する人々にも、神のことばを通じて信仰を知らせる努力を支えるべきです。

そのほかにも多くの考察をさらに述べることができます。しかし、わたしは最後に次のことをいうにとどめます。シノドスの中で何度もいわれたとおり、教会を築く「神のことばが響き渡る特別な場」は、間違いなく典礼です。典礼において、「聖書は、民の、また民のための書である」ことが示されます。聖書は読者に伝えられた遺産であり、遺言です。それは、聖書によって証言された救いの歴史を自分の人生の中で実現できるようにするためです。それゆえ、民と聖書は互いに従属し合います。聖書は民とともにあることによって生きた書であり続けます。民は聖書を読む主体だからです。また民は聖書なしに存続できません。民は聖書のうちに自らの存在意義と召命とあるべき姿を見いだすからです。このように民と聖書が互いに従属し合う関係が、典礼の中でいつも祝われます。典礼は聖霊の力によってキリストのことばを聞きます。人々が教会の中で聖書を読み、神がその民との間で更新する契約を

結ぶとき、語るのはキリストだからです。それゆえ、聖書と典礼は一つにまとまります。それは両者が、主と対話し、主のみ旨に従うよう民を導くという、唯一の目的をもつからです。神の口から出て、聖書の中であかしされるみことばは、祈りと、生活と、愛から生まれるこたえのかたちで神へと向かいます（イザヤ55・10－11参照）。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。祈ろうではありませんか。聖霊のわざに導かれながら、あらためて神のことばに耳を傾けることによって、普遍教会とすべてのキリスト教共同体で真の意味での刷新が行われますように。わたしはこのシノドス総会の実りをおとめマリアの母としての執り成しにゆだねます。わたしは来年の10月にローマで開催される第2回アフリカ特別シノドスをもおとめマリアにゆだねます。わたしは来年の3月、アフリカ司教協議会の代表者の皆様にシノドスの「討議要綱」を示すために、カメルーンを訪れるつもりです。神が望まれるなら、カメルーンを訪れた後、続いて、アンゴラを訪れます。それは、アンゴラにおける福音宣教500周年を荘厳に記念するためです。至聖なるマリア。すべてが神のみ旨に従って行われるために、自分の生涯を「主のはしため」としてささげ（ルカ1・38参照）、イエスがいいつけることをすべて行うように勧めたかた（ヨハネ2・5参照）。人生の中でみことばが第一のものであると知ることを、わたしたちに教えてください。みことばだけがわたしたちに救いをもたらすことができるからです。アーメン。

13. 10月26日の「お告げの祈り」のことば

教皇ベネディクト十六世

教皇ベネディクト十六世は、10月26日（日）午前9時30分から、サンピエトロ大聖堂で世界代表司教会議（シノドス）第12回通常総会閉会ミサを司式した後、教皇公邸書斎の窓から、サンピエトロ広場に集まった信者とともに「お告げの祈り」を行った。以下は、祈りの前に教皇が述べたことばの全文の翻訳（原文はイタリア語）。

このことばの中で、教皇は、苦難のうちにある中東、特にイラクと、インドのキリスト教徒への支援を呼びかけるとともに、2009年3月に教皇として初めてのアフリカ司牧訪問を行うことをあらためて発表した。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。

午前中、サンピエトロ大聖堂で行った感謝の祭儀をもって、「教会生活と宣教における神のことば」をテーマとする世界代表司教会議（シノドス）第12回通常総会が終わりました。シノドス総会はいつも、教会の交わりを力強く経験させてくれますが、今回は今までにましてそうだったといえます。なぜなら、わたしたちは関心の中心を、教会を照らし、導くもの、すなわち神のことばに置いたからです。神のことばはキリストご自身にほかなりません。わたしたちは毎日、敬虔に耳を傾けながら、キリストの弟子またしもべであることの恵みとすばらしさを心から感じました。わたしたちは「教会」ということばの元来の意味に従って、みことばによって呼び集められた喜びを体験しました。わたしたちは、特に典礼において、みことばのうちに歩みます。みことばは、約束の地で味わわせてくださるのと同じように、わたしたちに天の国を前もって味わわせます。

わたしたちが深く考察した点は、みことばとことばの関係、すなわち、神のことばと神のことばを表す聖書の関係でした。第二バチカン公会議が『神の啓示に関する教義憲章』（同12）の中で教えるように、優れた聖書釈義は歴史的・批判的方法とともに神学的方法を必要とします。なぜなら、聖書は人間のことばで書かれた神のことばだからです。それゆえ、あらゆるテキストは、聖書全体の統一性、教会の生きた伝統、そして信仰の光に心をとめな

がら読み、解釈されなければなりません。聖書も文学作品であり、普遍的文化の大いなる体系です。このことが本当なら、次のことも真実です。聖書から神的な要素を奪ってはなりません。また、聖書がそのかたのもとで書かれた、同じ聖霊のうちに聖書を読まなければなりません。それゆえ、学問的釈義と霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）は、文字どおりの意味を通して霊的な意味を探求するために、両方とも必要であり、ともに補い合います。神はこの霊的な意味を現代のわたしたちに伝えようと望まれるからです。

シノドス総会の終わりに、東方教会の総大司教が呼びかけを行いました。わたしはこの呼びかけを自分のものとします。それは、国際社会と宗教指導者とすべての善意の人々に、中東諸国の人々が体験している悲劇に関心をもっていただくためです。中東諸国では、キリスト教徒が不寛容と残酷な暴力と殺害の犠牲となり、脅迫され、自分の家を捨て、避難所を求めてさまようことを強いられています。このときにあたって、わたしは特にイラクとインドに思いを致します。わたしは、これらの国に古くから住む高貴な人々が、何世紀にわたる尊敬を伴った共存を通じて、数は少なくても、勤勉で優秀な少数派のキリスト教徒が、共通の祖国の成長のために貢献してきたことを認めてくださると確信しています。これらキリスト教徒は、特権を要求せず、ただ、これまでと同じように、同国人とともに自国に住み続けることを求めているだけです。わたしは、関係する国家・宗教界の権限のある人々にお願いします。法秩序と市民の共存を回復し、誠実かつ忠実な市民が国家機関からの適切な保護を当てにできると知ることができるように、いかなる努力も惜しまないでください。さらにわたしは願います。すべての国の国家・宗教指導者が、自らが人々の指導者また基準であることを自覚して、キリスト教またキリスト教以外の宗教の少数派の人々に対する友愛と尊重をはっきりとした行動で示し、これらの少数派の人々の正当な権利が尊重されるようにしてください。

わたしはまた、たった今ミサの中で発表したことをここで皆様にもお知らせできることをうれしく思います。来年の10月、第2回アフリカ特別シノドスがローマで開催されます。このシノドス開催に先立って、神のお望みなら、3月にアフリカを訪問するつもりです。わたしはまずカメルーンを訪れます。わたしはカメルーンでシノドスの「討議要綱」をアフリカ大陸の司教の皆様に示します。次いでわたしは、アンゴラへの福音宣教500周年記念に

あたって、アンゴラを訪れます。わたしは先に述べた苦難と、わたしたち皆が心に抱いている望み、特にアフリカ特別シノドスの成功への望みを、至聖なるマリアの執り成しにゆだねます。

資料１

世界代表司教会議第12回通常総会
提題解説（Lineamenta）

教会生活と宣教における神のことば

目　　次

序文……97

序論　なぜ神のことばについてのシノドスを行うのか ……101
　序論についての質問 ……105

第１章　啓示、神のことば、教会 …… 106
　まず神が語られる――神のことばによる神の啓示 ……106
　人間は啓示を必要とする ……107
　神のことばは人間の歴史と結び合わされながら、人間の歴史を導く …107
　イエス・キリストは人となった神のことばであり、啓示の完成である…109
　交響曲としての神のことば ……111
　神のことばにこたえる人間の信仰。聞くことに示される信仰 ……113
　マリア――すべての信者にとっての、みことばを受け入れるための模範
　…114
　教会にゆだねられた神のことばは、すべての世代の人に伝えられる …115
　教会における聖伝と聖書――神のことばというゆだねられた唯一の遺産
　…115
　霊感を受けた神のことばである聖書 ……117
　緊急に必要な課題――教会の中で神のことばを解釈する ……118
　旧約と新約――唯一の救いの営み ……120
　第１章についての質問 ……121

第 2 章　教会生活における神のことば……123
教会は神のことばによって生まれ、神のことばによって生きる ……123
神のことばは歴史を通して教会を支える ……123
聖霊の祈りの力によって、神のことばは教会生活のあらゆる側面に行き渡り、それらを生かす ……124
教会はさまざまなしかたでみことばによって養われる ……125
a　典礼と祈り ……126
b　福音宣教と信仰教育 ……127
c　釈義と神学 ……129
d　信者の生活 ……130
第 2 章についての質問 ……132

第 3 章　教会の宣教における神のことば……135
教会の使命は、人となった神のことば、キリストを宣べ伝えることである …135
あらゆる時代のすべての人は、神のことばに近づくことができなければならない ……137
神のことば――キリスト者の一致の恵み ……138
神のことば――諸宗教対話のための光 ……139
a　ユダヤ教徒との対話 ……140
b　諸宗教対話 ……140
神のことば――現代世界のパン種 ……141
神のことばと人間の歴史 ……142
第 3 章についての質問 ……142

結び ……145
信者の生活の中で神のことばを聞く ……145

質問一覧 ……146

注 ……152
訳注 ……160

序　文

「というのは、神のことばは生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と魂、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです」（ヘブライ4・12）。

神のことばは、救いの歴史を通じて、生きた力として自らを示しました。いのちの源（ルカ20・38参照）である神は、進んでご自身を示してくださいます。神のことばは、手ずから造られた（ヨブ10・3参照）人間に向けられています。人間は、造り主にこたえ、対話するために造られたからです。ですから、神のことばは、創造の最初の瞬間から地上での旅路の終わりまで、常に人類とともにいます。神のことばはさまざまなしかたで現されますが、受肉の神秘において頂点に達します。受肉において、聖霊の力によって、神であるみことばは人となったからです（ヨハネ1・1、14参照）。死んで復活したイエス・キリストは、「生きている者」（黙示録1・18）であり、永遠のいのちのことばをもっておられるかたです（ヨハネ6・68参照）。

神のことばは鋭利です。それはすべての人の生活を照らし、従うべき道を示します。このことは十戒のうちにはっきりと示されます（出エジプト記20・1－21参照）。イエスはこの十戒を神への愛と隣人への愛の掟にまとめました（マタイ22・37－40参照）。真福八端（ルカ6・20－26）はキリスト教的生活の理想です。キリスト教的生活は、神のことばを聞くことのうちに行われるものだからです。神のことばは心の思いを探り、善を行うように人を促し、人を罪から清めます。神は、聖性へと招かれている罪人に語りかけながら、罪人が罪の生き方から立ち帰るように勧めます。「あなたたちは悪の道を離れて立ち帰らなければならない。わたしがあなたたちの先祖に授け、またわたしのしもべである預言者たちを通してあなたたちに伝えたすべての律法に従って、わたしの戒めと掟を守らなければならない」（列王記下17・13）。福音において、主イエスも同じように招きます。「悔い改めよ。天の国は近づいた」（マタイ3・2）。聖霊の恵みにより、神のことばは悔い改める罪人の心を貫き、神の教会における神との交わりを回復します。罪人の回心は天に大きな喜びをもたらします（ルカ15・7参照）。教会は、復活した主の名によって、「罪のゆるしを得させる悔い改め」を「あらゆる国の人々に」（ルカ24・47）宣べ伝える使命を果たし続けます。教会は、神のことばに聞

き従いながら、謙遜と回心の道を歩みます。それは、花婿であり主であるイエス・キリストに常に忠実な者となり、より大きな確信と真心をもってイエス・キリストのよい知らせを宣べ伝えるためです。

神のことばは力があります。それは、太祖や預言者たちの個人的な生き方に示され、また旧約と新約の選ばれた人々の歴史を通じて見られるとおりです。イエス・キリストはこのことをまったく独自のしかたであかしします。神のことばは肉となって「わたしたちの間に宿られた」（ヨハネ1・14）。イエス・キリストは、ご自身の教会を通じて、神の国を宣べ伝え、病人をいやします（ルカ9・2参照）。教会は、この救いのわざを、みことばと秘跡、特に聖体を通じて実現し続けます。聖体は教会生活と宣教の源泉であり頂点です。聖体において、聖別のことばは、聖霊の恵みによって、パンを主のからだに、ぶどう酒を主の血に変える力を示します（マタイ26・26－28、マルコ14・22－23、ルカ22・19－20参照）。それゆえ神のことばは人類と神の間の交わりだけでなく、人々の間の互いの交わりの源泉です。人間は皆、主に愛された者だからです。

聖体と神のことばとのこの密接なつながりが、次の世界代表司教会議（シノドス）通常総会のテーマが選択された理由でした。こうしてシノドス総会で神のことばを扱ってほしいという以前からの要望が満たされることになりました。したがって、2005年10月2日から23日まで開催された「聖体――教会生活と宣教の源泉と頂点」に関するシノドスの後、自然に「教会生活と宣教における神のことば」に注意が向けられることになりました。それは、パンとみことばによる唯一の食卓の意味をより完全に検討するためです。今回のテーマが部分教会の中で優先事項として考えられていることは、部分教会の司教、司牧者から示されました。実際、次回のシノドスのためにこのテーマを選んだのは、団体的な議論の結果でした。慣例に従い、シノドス事務総局は、教皇ベネディクト十六世の要請により、カトリック教会の全司教からテーマの選定について意見を集めました。表現の違いや、扱う側面は異なりますが、自主権を有する東方カトリック教会、司教協議会、ローマ教皇庁諸省長官、修道会総長連合からの回答の中で、優先して取り上げるべきテーマとして示されたのは、「神のことば」でした。多くの検討資料がシノドス事務総局第11回通常顧問会によって分析されました。この顧問会はある意味でシノドス総会全体を代表します。実際、顧問会の12名の委員は、シノ

ドス第11回通常総会参加司教の中から選出されました。「世界代表司教会議規則」の規定に従い、顧問会の3名の委員は教皇ベネディクト十六世によって任命されました。通常顧問会の実り豊かな議論の結果、テーマの選択肢は3つにしぼられ、それが事務総局から教皇に提出されました。

シノドスの主宰者である教皇は、2006年10月6日に自らの決定を発表しました。続いて事務総局通常顧問会はこの「提題解説」作成作業を開始しました。この「提題解説」の目的は、扱われるテーマ、すなわち「神のことば」を簡潔に提示すること、また、教会生活と宣教において神のことばがもつ積極的な側面を明らかにすることです。もちろん、さまざまな困難を示したり、少なくとも教会の善益と世界における教会生活にとって徹底的な検討を必要とするような、ある種の分野も無視しません。したがって、この「提題解説」は『神の啓示に関する教義憲章』をしばしば引用します。こうして、「提題解説」は特別な意味で、公会議教父が採用した方法に従います。すなわち、神のことばを確信をもって宣べるために、神のことばをうやうやしく聞くということです（『神の啓示に関する教義憲章』1参照）。この「提題解説」は、『神の啓示に関する教義憲章』を司牧的な観点から再読するだけでなく、これに続いて出された、教会の教導職の宣言も引用します。教会の教導職は、聖伝と聖書に含まれる、ゆだねられた聖なる信仰の遺産を真正なしかたで解釈するからです。

全教会においてこのテーマを考察し、議論することを促すために、この「提題解説」には、各章で扱われた内容に関連する、具体的な質問も書かれています。上記の諸団体は、今年の11月末までにこれらの質問に対する回答を書面で提出しなければなりません。その後、通常顧問会は、専門家の助けを得ながら、提出された回答を検討し、それを、伝統的に「討議要綱」（Instrumentum Laboris）と呼ばれる第二の文書に順序立ててまとめます。この「討議要綱」が、神が望まれるなら2008年10月5日から26日まで開催される予定の、世界代表司教会議第12回通常総会の議題となります。

教会の創立以来、神のことばは教会のいのちそのものでした。聖霊の力によって受肉したみことばであるキリストにおいて、教会は「いわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるし」（『教会憲章』1）です。神のことばはまた、教会が近くの人にも、遠くの人にも宣教を行うことを永遠に促します。それゆえ教会は、主イエスの命令に従い、聖霊の力に信頼し

ながら、絶えず宣教し続けます（マタイ18・19参照）。

主の身分の低いしもべである、聖なるおとめマリアの模範に従いながら、シノドスは神のことばを驚きをもって再発見することを望みます。神のことばは、教会の中心で、教会の典礼と祈り、福音宣教と信仰教育、釈義研究と神学、個人と共同体の生活、また、福音によって清められ、豊かにされた人類の諸文化において、生きていて、鋭利で、力のあるものだからです。キリスト信者は、神のことばに促されながら、自分の希望について説明を要求する人にこたえ（一ペトロ3・15参照）、「ことばや口先だけでなく、行いをもって誠実に」（一ヨハネ3・18）隣人を愛するように整えられます。こうして彼らのよいわざは世にあって光のように輝き、神の栄光を映し出し、すべての人が天におられるわたしたちの父をあがめるようになります（マタイ5・16参照）。そこから、神のことばは教会生活全体を照らし、教会がパン種として行動できるようにします。それは、世がより公正かつ平和で、いかなる暴力もなく、愛の文明の建設に開かれたものとなるためです。

「『主のことばは永遠に変わることがない』。これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされたことばなのです」（一ペトロ1・25）。シノドスのテーマの考察は謙虚な祈りとなります。どうか、神のことばを再発見することが、歴史を通じた教会と社会における人類の歩みを照らしますように。人類はしばしば熱心に、また確信をもって「義の宿る新しい天と新しい地とを」（二ペトロ3・13）待ち望んでいるからです。

バチカンにて、2007年3月25日

シノドス事務総長
シサク名義大司教　ニコラ・エテロヴィッチ

序　論
なぜ神のことばについてのシノドスを行うのか

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、いのちのことばについて。――このいのちは現れました。御父とともにあったが、わたしたちに現れたこの永遠のいのちを、わたしたちは見て、あなたがたにあかしし、伝えるのです。――わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりをもつようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです」(一ヨハネ1・1－4)。

1　「初めにことばがあった」(ヨハネ1・1)。「わたしたちの神のことばはとこしえに立つ」(イザヤ40・8)。世と人類が創造されたときからおられた神のことばが、歴史を始められます。「神はいわれた」(創世記1・3、6以下)。神の子イエス・キリストの受肉――この、歴史においてもっとも決定的な出来事が、神のことばによって告げられます。「ことばは肉となった」(ヨハネ1・14)。神のことばは、歴史の終わりに、わたしたちが永遠のいのちにおいてキリストと出会うことを約束します。「然り、わたしはすぐに来る」(黙示録22・20)。

神のことばはこの上なく確実です。神はその限りない愛によって、神のことばをすべての時代の人に与え、彼らが神のことばをあかしできるようにしたからです。シノドスは、神の最高のたまものである、このみことばの神秘をあがめ、感謝し、黙想し、教会に属するすべての人とすべての善意の人に告げ知らせることを望みます。

2　さまざまなかたちで示されているように、現代人は神のことばを聞き、神と語りたいと強く望んでいます。現代のキリスト信者も、生活の源泉として、また、個人的なしかたで主と出会う手段として、神のことばを熱心に求めています。

じつにこうした個人的な出会いを通じて、目に見えない神は、「大きな愛に

よって、あたかも友に対するように、人間に話しかけ、彼らと住まいをともにしている。それは彼らを自分との交わりに招き、これにあずからせるためである」(1)。このような神の寛大な啓示は、恵みによって絶えず行われます。

この交わりは「聖霊のわざ」によって行われます。聖霊は、みことばによって、教会生活と宣教を刷新しようと望まれます。そして、教会を絶えざる回心へと招き、すべての国民に福音の知らせをもたらすように遣わします。それは彼らが「いのちを受けるため、しかも豊かに受けるため」（ヨハネ10・10）です。

3　主キリストの位格が、神のことばの核心です。教会は歴史を通じて絶えずみことばの神秘を体験し、考察してきました。「聖書が神のことばでなければ、どうしてそれを信じるでしょうか。確かに預言者たちは多くのことを書きました。しかし、聖書全体に書かれているのは神のことばだけです。信じる者は、この唯一のみことばを、正しい夫である神が与える種によって受胎し、それを自らの口から実り豊かに語ります。それは、いわば、みことばを生み、しるし、すなわち文字にとどめ、こうしてそれがわたしたちにも伝えられるようにするためです」(2)。

第二バチカン公会議は『神の啓示に関する教義憲章』の中で、神のことばについての教会の教導職について荘厳に語り、説明し、実践のための指示を与えています。『神の啓示に関する教義憲章』は3つの回勅による長期にわたる研究と発展をまとめました。すなわち、レオ十三世の『プロヴィデンティッシムス・デウス』、ベネディクト十五世の『スピリトゥス・パラクリトゥス』、そしてピオ十二世の『ディヴィノ・アフランテ・スピリトゥ』(3)です。『神の啓示に関する教義憲章』はまた釈義と神学における新たな段階を示しました。このような新たな釈義と神学は信者の霊的経験によってさらに豊かなものとされ、時宜を得て1985年のシノドス(4)と『カトリック教会のカテキズム』でも用いられました。公会議後、普遍教会と地方教会の教導職はみことばに触れることの重要性を強調しました。神のことばは「教会を新たな霊的な春へと導く」(5)と確信したからです。

神のことばの息吹に支えられながら、今回のシノドスは、これまで行われたシノドス（1965－2006年）との密接な関連において開催されます。このシノドスは信仰の基盤を見つめるとともに、人々が聖書（ヨシュア24章、

ネヘミヤ8章、使徒言行録2章参照）と教会の歴史の中で、みことばとどのようなしかたで出会ったかを示そうと努めます。

4　さらに特別な意味で、シノドスはこれまでのシノドスに続いて、聖体と神のことばの内的なつながりを明らかにしたいと望みます。教会は「神のことばの食卓とキリストのからだの食卓とから」同じ一つの「いのちの糧」(6)を得なければならないからです。このシノドスが深く望み、第一に目指すことは、聖書と聖体のうちにおられる主イエスにおいて、神のことばと完全なしかたで出会うことです。聖ヒエロニモはこう述べます。「主の肉はまことの食物であり、主の血はまことの飲み物です。それはわたしたちがこの世で得る唯一のよいものです。聖体だけでなく、聖書を読むことも、わたしたちに主の肉を食べさせ、主の血を飲ませます。実際、聖書を知ることから得られる神のことばは、まことの食べ物であり、まことの飲み物です」(7)。

第二バチカン公会議から40年が過ぎて、公会議の『神の啓示に関する教義憲章』がわたしたちの教会共同体の中でどのような成果を生んだか、また、この公会議文書が本当に受け入れられたかが問われています。神のことばに関して、神の民の中で多くの積極的な意味のあることが行われたことは明らかです。たとえば、次のようなことがらです。典礼、神学、信仰教育における聖書の刷新。聖書使徒職と共同体・運動団体の努力による聖書の普及と実践。そして、現代のマス・メディアの手段がますます用いられるようになったことです。

しかしながら、いくつかのことが「問題」ないし「未解決の課題」となっています。啓示と神のことばについての教えに関する無知やあいまいさは、大きな問題です。聖書に触れることのない多くのキリスト信者が依然として存在するとともに、聖書がふさわしいしかたで用いられない危険も常にあります。神のことばに関する真理を欠くならば、人々は生活と思考において相対主義へと引き込まれます。このような状況から、神のことばに関する教会の教えを完全なしかたで知ることが緊急に求められています。聖書に触れる機会をすべてのキリスト信者に与えるための適切な手段を用いることも必要とされています。教会は、現代において聖霊が教える新たな手段を採用することによって、さまざまなかたちで示された神のことばを、教会の中で知り、識別し、愛し、深め、体験できるようにしなければなりません。こうして神

のことばはすべての人にとって真理と愛のことばとなるのです。

5　今回のシノドスの「目的」は、主として司牧的なものです。すなわち、教理的基盤を徹底的に検討することによって、神のことばとの出会いを広げ、強めること、またそのための方法を示せるようにすることです。こうしてキリスト信者とすべての善意の人々が、神のことばを日々の状況においていのちの源として体験し、また、真実の可能な方法を用いて神のことばを聞き、神と語り合うことができるようになることです。

具体的には、このシノドスは次のような多くの目的をもっています。――神のことば、聖伝、聖書と教導職といった、啓示に関する基本的な真理を明らかにできるようにすること。こうしたことがらは、真の力強い信仰生活を促し、保証するからです。――聖書を尊重し、深く愛する心を高めること。それは、「キリスト信者に、聖書に近づく多くの機会が与えられる」(8) ためです。――典礼と信仰教育、特に「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」によって、神のことばをあらためて聞くこと。この「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」はさまざまな状況に合ったものとしなければなりません。――世界の貧しい人に慰めと希望のみことばを与えること。

今回のシノドスは、神の民に神のことばを糧として与えることを望みます。シノドスが目指すのは、聖書解釈学の適切な方法を奨励し、福音宣教とインカルチュレーションを正しく導くことです。シノドスはまた、エキュメニカル対話の促進も目指します。エキュメニカル対話は神のことばを聞くことと密接に関連するからです。また、キリスト教徒とユダヤ教徒の会合・対話(9)、さらに、広く諸宗教対話・異文化対話の促進も目指します。このシノドスは次の3つの分野を取り上げることによって、この課題を達成することを提案します。

1．啓示、神のことば、教会（第1章）
2．教会生活における神のことば（第2章）
3．教会の宣教における神のことば（第3章）

このようにして、神のことばの根源的な諸要素を、教会の活動と結びつけることができるのです。

この「提題解説」は、神のことばとの出会いに関するあらゆる場合・形式を扱おうとするものではありません。むしろこの文書は、第二バチカン公会

議の教えに基づきながら、神のことばの本質的な性格を述べ、教理と実際の経験の内容をともに強調しつつ、皆様がもっと詳しい情報を提供してくださるよう促すのです。

序論についての質問

1．神のことばについての今回のシノドスに特に現代的な意味を与えるような、どのような「時のしるし」が皆様の国にありますか。人々はこのシノドスに何を期待していますか。

2．前回の聖体についてのシノドスと、神のことばについての今回のシノドスにはどのような関係がありますか。

3．皆様の部分教会で、聖書の体験や実践は行われていますか。それはどのようなものですか。聖書を研究するグループは存在しますか。それはどのようなもので、どんな活動をしていますか。

第１章
啓示、神のことば、教会

「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました」（ヘブライ１・１－２）。

まず神が語られる――神のことばによる神の啓示

６　「神はその愛と英知によって、ご自分を啓示し、み旨の秘義を明らかにしようとした」(10)。第二バチカン公会議は、神の神秘を人間のことばと冷ややかで恣意的な報告に押し込める危険に直面しながら、『神の啓示に関する教義憲章』の中で、教会が幾世紀にもわたって宣言してきた信仰の要約をみごとなしかたで正確に述べました。神は無償かつ直接的なしかたでご自身を知らせました。それは、ご自身が造られた人類および世界と、真理と愛に基づく人格的な関係に入るためでした。神は、「互いに関連したわざとことばをもって」(11)、宇宙と歴史の目に見える事物においてご自身を現されました。こうして神は「啓示の経綸」、すなわち、人類の救いと、また、人類の救いを通じての全被造物の救いを目指す計画を示しました。同時にこの啓示は、三位一体の神についての真理と、神に愛され、永遠の幸福を約束された人類についての真理をも伝えました。この神の啓示はイエス・キリストの人格において輝かしい頂点に達します。イエス・キリストは「仲介者であり、同時に全啓示の完結である」(12) かただからです。

人間同士の親しい関係に似た深い交わりに基づく、この無償の自己伝達は、神ご自身とそのみことば、すなわち「神のことば」によって特徴づけられます。根本的な意味でいえば、この自己伝達は三位一体の神の人格的なわざです。神は愛し、愛するがゆえに「語る」からです。神が人類に語りかけたのは、すべての人が神の愛を知り、神にこたえることができるようにするためです (13)。聖書を注意深く読めばはっきりわかるとおり、こうした自己伝達は、創世記から黙示録に至るまで、絶えず行われています。神のことばが特に「秘跡中の秘跡」(14) である感謝の祭儀や他の秘跡の中で読まれ、告げられるとき、主ご自身がわたしたちに呼びかけます。神とわたしたちの間

の交わり、またわたしたち一人ひとりと他の人との交わりという、深く人格的な出来事に「あずかり」なさいと。まことに神のことばは力があり、いわれたことを成し遂げられます（ヘブライ4・12参照）。

人間は啓示を必要とする

7　人間は、神が与えた人間的手段、すなわち被造世界（「自然という書物」[liber naturæ]）のみによって神を知ることができます（ローマ1・20参照）。罪の結果、歴史のさまざまな状況の中で、この神についての知識はあいまいで不確かなものとなり、多くの人から否定されるまでになりました。しかし神は人類を見捨てません。神は一人ひとりの人に、光と救いと平和への深いあこがれを抱かせます。たとえこのあこがれが常に自覚されることがなくてもです。福音を全世界に宣べ伝えることは、人々がこの造り主とのきずなを自覚するのを助け、宗教的・文化的価値観を生み出します。こうした価値観は、多くの現代人にイエス・キリストの神を探求するよう強く促します。

神の民は、純粋で確かな信仰への大きな望み――あるいは深いあこがれ――を抱いているように思われます。神の民は、神と人間に関する無知と混乱と疑いを取り払うことによって、科学技術が発展した時代にあって、神に関する真理を見分け、強めます。この深く広いあこがれ、ないし希求は、神ご自身が人類のために行った啓示に関する真理を認め、神のことばを聞くように人間の心を開きます。これがシノドスのテーマの基盤です。シノドスは、このテーマの司牧的意味を探求することを通じて、新しい福音宣教の進展を保証また推進し、エキュメニズムと諸宗教対話・異文化対話のための貴重な情報を集めます。

神のことばは人間の歴史と結び合わされながら、人間の歴史を導く

8　ある文化に属する人々は、すべては自分たちに基づくと考えます。そこから彼らは、自分が自分の運命の支配者だと考えます。こうした態度をとると、何者かが世界に来て、対話を行い、人生に意味を与えるということを受け入れるのは困難です。こうした考え方は、神に関する間違った思想や、さまざまな疑いの中にもしばしば見られます。しかし、ご自分のみことばの真理を語らずにはいられない神は、みことばは友であり、人々の善益のために語られるのだということを、一人ひとりの人に約束します。神のことばは、

人間の自由を尊重しながら、ご自分に忠実に耳を傾け、黙想することを求めます。まことに神のことばは「一人ひとりの人が抱える問題に直面させ、それにこたえ、価値観を広げ、ともに願いをかなえるものでならなければなりません」(15)。わたしたちは『神の啓示に関する教義憲章』からあらためて次のことを学びます。神のことばはすべての人間のことばと人間の働きかけに先立ちます。神がみことばを告げたのは、思いがけない真理と意味の地平に向けて人間の心を開くためでした。創世記１章、ヨハネ１・１以下、ヘブライ１・1、ローマ１・19－20、ガラテヤ４・4、コロサイ１・15－17に述べられるとおりです。大聖グレゴリオはいいます。「聖書はわたしたちの貧しいことばを使うまでに降られた。それは、わたしたちが言い表しがたい神にまで昇ることができるようにするためです」(16)。

神は初めから「至高の救いへの道を開く」(17) ことを望まれました。聖書は、神のことばが最初から人類との対話を行ったことを示します。この対話は生き生きとしたもので、時として悲劇的ですが、最終的には勝利をもたらします。神に選ばれた民イスラエルの歴史の中で、最高の啓示はイエス・キリストにおいて行われました。イエス・キリストは肉となった永遠のみことばだからです（ヨハネ１・14参照）。聖エフラエム（306頃－373年）はいいます。「わたしは造り主であるみことばを思うとき、それを荒れ野で民に与えられた岩になぞらえます。岩から民に不思議なしかたで水が湧き出たのは、岩の中に水が蓄えられていたからではありません。岩の中に水はありませんでしたが、大水がそこから湧き上がりました。同じように、みことばは無からそのわざを行われます。あなたの楽園を受け継ぐにふさわしいとされた人は幸いです。モーセはその書の中で、自然の創造について語りました。それは、自然と聖書がともに造り主をあかしすることができるためです。自然の場合は、人がそれを用いることによって。聖書の場合は、人がそれを読むことによって。あらゆるところであかしが行われています。あかしはいつの時代にも、どんなときにも行われます。こうしてあかしは、造り主に感謝することのない不信仰者への反論となります」(18)。

この神のことばに関する思想は、大きな司牧的意味をもっています。神のことばの歴史は人間の歴史と密接に結び合わされています。実際、神のことばの歴史は、人間の歴史の基盤そのものです。それゆえ人間の歴史は、人間の思想、ことば、活動だけから成るのではありません。自然と文化の中には、

神のことばの生き生きとした痕跡が認められます。みことばが人間の認識に真の価値を与えるだけではありません。人間の知識そのものも、みことばのあり方を示すのを助けます。また、人間の本性をとったみことばも、初めから人間を中心とした思想を示します。みことば自身が、特別なしかたで民を選びました。それは自由と救いの道をともにし、神が忠実で忍耐強く、「インマヌエル」（イザヤ7・14）、すなわち「われらとともにおられる」（イザヤ8・10。ローマ8・31、黙示録21・3参照）かたであることを示すためです。このことからわかるのは、神のことばは、聖書の証言を通じて、すべての時代の人々の思想と表現の中に反映されているということです。こうした表現は、時には歴史の暗い出来事の中で助けを求める叫び声のように、ひしがれた苦しみの中で示されることもあります。しかしそれは歴史に際立った影響も及ぼします。聖人の生涯がすばらしいしかたで示すとおりです。聖人たちは、神のことばを本心から受け入れ、聖霊のたまものを特別なカリスマとして生きることによって、神のことばのうちに根本的な力が含まれることを示しました。

現代の人は、キリスト教の信条に表された公的啓示と、私的啓示の正しい関係を理解するための助けを必要としています。もちろん、この二つの啓示がともに真正な信仰にとって重要な意味をもつことはいうまでもありません。

イエス・キリストは人となった神のことばであり、啓示の完成である

9　「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」（ヘブライ1・1以下）。多くのキリスト信者は、神の啓示においてイエス・キリストの人格がもつ中心的な意味を自覚しています。しかし、キリスト信者は、そのことが重要である理由を常に知っているわけではありません。また、どのような意味でイエス・キリストが神のことばの中心であるかを理解しているわけでもありません。そこから、彼らは聖書を読むときに、真の意味でキリスト教的な読み方をすることがなかなかできません。

だから『神の啓示に関する教義憲章』は、神がまったく思いがけない出来事が起こることを望まれたと述べます。「実際、神は御子、すなわち、すべての人を照らす永遠のみことばを遣わした。それは、人間の間にとどまって神の秘義を人間に示すためである（ヨハネ1・1－18参照）。それで、人となっ

たみことばであり、人間に遣わされた人間であるイエス・キリストは、『神のことばを語り』（ヨハネ3・34）、父から成就すべくおのれに託された救いのわざを遂行する（ヨハネ5・36、17・4参照）」(19)。それゆえイエスは、地上での生活と栄光の時において、神のことばの目的、意味、歴史と計画のすべてを受け取り、実現しました。そこで聖イレネオ（130／140－200年頃）は述べます。キリストは「自身をもたらすことによって、すべての新しさをもたらした」(20)。

司牧的な意味でいえば、この真理から次のことが必要となります。すなわち、聖書に述べられた、教会の信仰における神のことばのさまざまな意味をどうまとめればよいかを理解することが必要です。聖書の中でイエス・キリストは永遠の神のことばとして示されます。この永遠の神のことばは、創造において輝き出し、預言者の告知の中で歴史的性格を与えられ、イエスの人格において完全に現され、使徒の声の中に反響し、現代の教会の中で宣べ伝えられます。一般的な意味で、神のことばは、「みことばであるキリスト」です。この「みことばであるキリスト」が、聖霊の与える霊感を通じて、すべての解釈の鍵となります。「神の言理（ロゴス）、元（はじめ）のうちに神とともに（あった）言理（ロゴス）は、個々の理念が全言理（ロゴス）の部分をなすという、あまたの理念（テオレマタ）を包含する、ただ一つの（言理（ロゴス））です。‥‥ですから、ご自分についてのあかしであるものとしての（聖）書（の諸巻）にわたしたちを向けておられるのであれば、ある（巻）に向け、ある巻にはそうではないというのではなく、ご自分についてあかしするものとして、すべてに（わたしたちを向けておられる）」(21)のです。こうして多様性の中に連続性を見いだすことができます。

教会の宣教の本質は、みことばの豊かさです。教会は、イエス・キリストのうちに自らを理解することができるなら、自らが神のことばによって生まれ、新たにされることを知ることができます。しかし神のことば（すなわちイエス）を、イエスご自身がいわれたように、「聖書に従って」（ルカ24・44－49参照）理解しなければならないということも真実です。「みことばであるキリスト」は、旧約の神の民の歴史の中におられます。旧約はキリストがメシアであることをあかしするからです。「みことばであるキリスト」は、教会の歴史の中で今もともにおられます。教会は、「みことばであるキリスト」を説教の中で告げ知らせ、聖書によって黙想し、このかたとの友愛と、このかたが人生を導いてくださることを体験します。聖ベルナルド（1090－1153

年）はいいます。「みことばの受肉の計画において、キリストは聖書全体の中心です。神のことばは、すでに旧約の中でも聞くことができましたが、キリストにおいて目に見えるものとなったのです」(22)。

交響曲としての神のことば

10　これまでの部分で考察したことによって、教会が啓示の進行において神のことばに与えたさまざまな意味を数え上げることができます。神のことばは多くの楽器で演奏される交響曲になぞらえることができます。神はそのことばを、多くのかたちで、また多くのしかたで語られたからです（ヘブライ1・1参照）。啓示の歴史は長く、その使者もさまざまです。しかしこの歴史は、意味と機能の序列によって常に特徴づけられます。それゆえ、みことばの類比的な意味について語ることができます。

a　啓示において、神のことばは**永遠の神のことば**です。この「永遠の神のことば」は、至聖なる三位一体の第二の位格であり、御父の子、三位一体の内また外の交わりの基盤です。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。このことばは、初めに神とともにあった。万物はことばによって成った。成ったもので、ことばによらずに成ったものは一つもなかった」（ヨハネ1・1－3。コロサイ1・16参照）。

b　それゆえ**造られた世界**は「神の栄光を物語り」（詩編19・1）ます。万物は神の声です（シラ46・17、詩編68・34）。初めに神はみことばによって宇宙を創造し、その知恵によって被造物をしるしづけられました。被造物の意味を解釈するわざは人間にゆだねられました。人間は神の像と似姿に従って造られたからです（創世記1・26－27、ローマ1・19－20参照）。実際、人間はみことばによって、神と被造物との対話を行うよう招かれます。こうして神は全被造物、なかんずく人間において「自らについての恒久の証明を与えた」(23) のです。

c　「ことばは肉となった」（ヨハネ1・14）。優れた意味での神のことば、すなわち究極的かつ決定的なみことばは、**イエス・キリスト**です。イエス・キリストの地上での存在と宣教と生涯は、御父の計画に従って、密接に結ばれています。その頂点は過越です。しかし、この計画はイエスが国を御父に引き渡されるときに初めて実現します（一コリント15・24参照）。イエス・キリストは、人類に与えられた神の福音です。

d　受肉した御子であるみことばという観点から見ると、御父はかつて預言者たちを通じて先祖に語られました（ヘブライ1・1参照）。使徒たちは聖霊の力によってイエスとその福音を宣べ伝え続けます。こうして、神のことばへの奉仕において、人間のことばが神のことばとして用いられます。神のことばは**預言者と使徒の告知**の中で語られるからです。

e　神の霊感によって書かれた聖書は、「みことばであるイエス」を、預言者と使徒のことばに結びつけます。聖書そのものが、このことが真実であることを証言します。聖書は、神の霊感によって書かれた神のことばを含んでいるので、真の意味で神のことばだということができます(24)。聖書のすべての箇所は、みことば、すなわちイエスに向けられています。なぜならイエスはこういわれたからです。「聖書はわたしについてあかしをするものだ」（ヨハネ5・39）。神の霊感のたまものによって、**聖書の諸巻**は、他の書物ないし聖典がもたない、直接的で具体的な呼びかけの力を有します。

f　しかし、神のことばは書物の中に閉じ込められているのではありません。啓示は最後の使徒の死で終わったとはいえ(25)、啓示されたみことばは教会の歴史を通じて宣べ伝えられ続け、人々もそれに耳を傾け続けます。教会は、世の期待にこたえて、世にあってみことばを宣べ伝える責務をもちます。こうしてみことばは、**生き生きとした説教**や、福音に奉仕する他の多くのかたちを通じて歩み続けます。説教は、教会という手段を通じて、イエス・キリストにおいて、生きた神から生きた人に語られた神のことばです。ここから、神の啓示が説教されるとき、真の意味で「神のことば」と呼ぶことのできる何かが教会の中で実現することがわかります。

神のことばは、人間の間で行われる真の会話のすべての特質を示します。たとえば、神のことばは教えます。神はご自身の真理を伝えるからです。神のことばは何かを表現します。神はその思い、愛、行動を示すからです。最後に神のことばは神から人への呼びかけです。人は信仰をもってこれを聞き、これにこたえなければなりません。

司牧者の責務は、信者が神のことばに関して調和のとれた考え方をもつように導き、そのために、誤りや単純化、またあいまいさを伴う考え方を避けることです。次のことを強調しなければなりません。神のことばが本来、三位一体の神とその啓示の神秘と密接な関係をもつこと。神のことばが被造世界の中で示されること。神のことばは人間の生活と歴史の中に萌芽として存

在すること。神のことばはイエス・キリストにおいて最高の表現を見いだすこと。そして、神のことばは誤ることなく聖書の中で証言され、教会の生きた聖伝の中で伝えられることです。人間のことばを用いることは、神のことばの神秘に属するので、言語やコミュニケーションに関する学問の研究に注目することが必要です。

神のことばにこたえる人間の信仰。聞くことに示される信仰

11　「啓示する神に対しては『信仰の服従』を示す必要がある」(26)。人は「自由におのれをまったく神にゆだね」(27) ながら、みことばによってご自身を与えられる神に耳を傾けなければなりません。そこから人は、神との完全な交わりへの招きをまったきしかたで受け入れ、自分の意志を共同体とすべての信者のために用いるようになります (28)。こうした信仰と交わりの態度は、説教と聖書朗読におけるあらゆるみことばとの出会いにおいて見いだされます。そのため、『神の啓示に関する教義憲章』は、聖書に近づく際、神のことばについて広く認められていることを述べます。「神は……あたかも友に対するように、人に話しかける。……それは、彼らを自分との交わりに招き、これにあずからせるためである」(29)。「実際、聖書において、天にまします父は、深い愛情をもって、常に自分の子どもたちと会って、互いに語り合うのである」(30)。啓示は愛の交わりです。この交わりは、しばしば聖書の中で「契約」（創世記9・9、15・18、出エジプト記24・1－18、マルコ14・24）ということばで表されます。

ここに司牧的な意味で注目すべき重要な点が見られます。すなわち、信仰は、あらゆるしるしと言語を通じて神のことばとかかわるということです。みことばは、聖霊の力により、教えまたは教理の定式を通じて、信仰に真理を伝えます。信仰は、みことばが回心を強く促す力であることを認めます。みことばは、信者の生活の中でのさまざまな問題に答えるための光です。みことばは、現実を正しくまた知恵をもって識別するための導きです。みことばは、みことばを読み、語るだけでなく、それを「行う」（ルカ8・21）よう招きます。最後に、みことばは、絶えざる慰めと希望の源です。そこから、信仰の論理に従って、信者の生活の中で神のことばが何よりも大事であることを認め、保証するという務めが生じます。そのため、教会が宣べ伝え、理解し、説明し、生きている神のことばを受け入れなければなりません。

マリア――すべての信者にとっての、みことばを受け入れるための模範

12　ナザレのマリアは、神のことばの神秘に貫かれた歩みの中で、お告げの瞬間から、教会の師また母、そして、個人あるいは共同体全体とみことばとのあらゆる出会いの模範であり続けます。マリアは肉となったみことばを受け入れ、それを思いめぐらし、心に納め、生かしました（ルカ1・38、2・19、51、使徒言行録17・11参照）。実際、マリアは聖書に耳を傾け、それを思いめぐらしました。マリアは、イエスの生涯とかかわるイエスのことばおよび出来事と聖書を結びつけました。イサアク・デ・ステラ（1100／1110頃－1178年頃）はいいます。「霊感を受けた聖書の中で、教会という、母なるおとめ一般を表す意味で述べられたことは、おとめマリア個人を表す意味で理解されます。‥‥主の遺産は、一般的な意味では教会です。特別な意味ではマリアです。そして個人的な意味では信者の魂です。キリストは9か月間、マリアの胎内という聖櫃に宿りました。キリストは世が完成するまで教会の信仰という聖櫃の中に宿ります。キリストは世々に至るまで信者の魂の知と愛の中にとどまります」(31)。

おとめマリアは、自分の周りで起こっていることを見つめ、日々の生活が求めることを生きながら、自分が御子から与えられるものはすべての人のためのたまものであることを自覚することができました。マリアは、いのちのことばを何もせずに傍観するのでなく、これにあずかり、聖霊に導かれるようにと、わたしたちに教えます。聖霊は信者の中に住んでおられるからです。マリアは、自分の人生の中に神の恵みを見いだすことによって、主を「あがめ」ます。神は彼女を「祝福され」ました。なぜなら、マリアは「主がおっしゃったことはかならず実現すると信じた」（ルカ1・45）からです。「見ないのに信じる人は幸いである」（ヨハネ20・29）。マリアは、このイエスのことばを実行するように、すべての信者を招きます。マリアはみことばを心から祈り、愛をこめて神のことばを守り、これを愛の奉仕に変え、日常生活の中で信仰のともしびをともし続けることを知っている人の模範です。聖アンブロジオは、すべてのキリスト信者は神のことばを宿し、生むといいます。肉に従えば、キリストの母は一人ですが、信仰に従えば、キリストはすべての人の子です(32)。

教会にゆだねられた神のことばは、すべての世代の人に伝えられる

13　「神は、万民のために啓示したそのことが、永久に、かつ完全に保たれ、あらゆる世代に伝えられるよう、いともやさしく取り計らった」(33)。人類の友であり父である神は、語り続けます。啓示は終わりました。しかし、ある意味で、啓示は、神のことばが実際に現代のわたしたちに伝えられる中で続いているのです。実際、啓示は今もわたしたちを照らし、わたしたちの理解を深めることができます。だから御父は、イエスの霊を教会に与えながら、啓示の宝を教会にゆだね(34)、教会を、愛をもって救いをもたらす神のことばの第一の受け手、また特別な証人とするのです。

そのため、みことばは、教会の中で、ゆだねられたままじっと動かずにいるのではありません。むしろそれは、「信仰の最高の規範」、いのちを与える力であり、「聖霊の援助によって進歩し」、「信者たちの黙想と研究」によって「理解が深くなり」、霊的生活において一人ひとりに経験され、司教によって説教されます(35)。みことばの「内に住んだ」神の人たちは、その特別な証人です(36)。教会のなすべき第一の使命が、イエスの命令に従って（マタイ28・18－20参照）、神のことばを、あらゆる時代と場所において、すべての人に伝えることであるのはいうまでもありません。歴史が示すとおり、この宣教は、多くの時代を経て、現代に至るまで、さまざまな困難に直面しながらも、活発かつ実り豊かに生き生きと行われ続けています。

教会における聖伝と聖書――神のことばというゆだねられた唯一の遺産

14　このテーマを扱う際に、わたしたちは神のことばがイエス・キリストについての福音あるいは「喜ばしい知らせ」であることを思い起こさなければなりません。福音としての神のことばは、使徒の宣教にゆだねられ、幾世代を通じて、二つのしかたで伝えられ続けてきました。この二つのしかたは密接に関連し合っています。その一つは、生きた聖伝の生き生きとした流れです。聖伝は、教会が「自らあるがままのすべてと、信ずることのすべて」(37)、すなわち、礼拝、教理、そして教会生活によって示されます。もう一つは聖書です。聖書は、聖霊の霊感の力によって、この生きた聖伝の最初の構成要素の変わることのない性格を、書かれた文字のかたちで保ちます。「それで、聖伝と旧約・新約聖書は、いわば、鏡のようなもので、地上を旅する教会は、神をありのままに、顔と顔を合わせて見るときまで（一ヨハネ3・2参照）、

神にすべてのものを賜りながら、その鏡の中に神を見るのである」(38)。教会の教導職は、神のことばの上に立つものではありませんが、「書き物、あるいは口伝による神のことばを権威をもって解釈」(39) しなければなりません。

第二バチカン公会議は、聖書と聖伝の間の根本的な一致と密接な結びつきを強調します。教会は聖書と聖伝の「どちらも同じ敬謙と敬意をもって」(40) 扱います。教導職は、神のことばの権威ある解釈を保証するために奉仕するという、かけがえのない使命をもっています。そのため教導職は「神のことばを敬謙に聞き、聖く保存し、忠実に説明」(41) します。

司牧的な観点からいえば、教会の教えに従うことにより、聖書と聖伝の関係ははっきりと知られ、実生活における経験へと適用されます。たとえば、初代教会において、聖伝は聖書に先立ち、常に「聖書そのものがより深く理解され、絶えず活力にあふれたものとされる」(42) ためのいわば豊かな「土壌」となっていました。他方で「『神のことばは生きており、力を発揮し』(ヘブライ4・12)、『あなたがたを造り上げ、聖なるものとされたすべての人々とともに恵みを受け継がせることができるのです』(使徒言行録20・32、一テサロニケ2・13)」(43)。聖書と聖伝はともに神のことばを伝えるための手段です。それゆえ、聖書と聖伝の両方が「互いのうちに」経験されることによって、神のことばの意味と恵みは完成します。こうして聖書と聖伝はともに「神のことば」と呼ばれ、また実際に「神のことば」なのです。

この教えは司牧的実践の中で多くの重要な意味をもちます。たとえば、「聖書のみによって (sola Scriptura)」という思想は成り立ちません。なぜなら、聖書は教会と関連づけられるからです。すなわち、この教会が、聖伝と聖書をともに受け入れ、理解するのです。聖書は、わたしたちがみことばの源泉に近づくことができるための基本的な役割をもっています。こうして聖書は聖伝を正しく理解するための基準となります。

使徒伝承と、使徒伝承を解釈して現在に適用する後代の伝統と、他の教会伝承を区別することからも、実践的な意味が生じます。もう一つ考慮しなければならないのは、聖書正典を決定する際に教会が果たした決定的な働きです。こうして教会は、かつても今もこれからも流布する正典以外の書すなわち外典に対して、聖書の真正性を保証しました (73書。うち旧約46書と新約27書)(44)。

最後に、常に念頭に置かなければならないのは、被造世界、特に人類とそ

の歴史における神のことばのさまざまなしるしによって、聖書と聖伝の間で活発に行われる、また行われなければならない対話です(45)。

教会の生きた聖伝と、「カテキズム」の形式による神のことばへの本来の奉仕も考慮しなければなりません。この「カテキズム」は、あらゆるカテキズムの核心である、最初の信条から始まり、各時代におけるさまざまなものがあります。普遍教会における最新のものは『カトリック教会のカテキズム』と、それぞれの地方教会で書かれたカテキズムです。

霊感を受けた神のことばである聖書

15　「聖書は、聖霊の霊感によって書かれたものとしての神のことばである」(46)。聖書は「(聖なる) 書物」(Scriptura [sacra]) と「聖書」(Biblia　巻物) という名で呼ばれます。この二つの呼び名はそれ自体として意味深い呼び名です。なぜならそれは優れた意味での「テキスト」また「書物」を表すからです。この名称は教会外でも広く用いられます。

根本的に考えると、聖書を読む際に次のことを考慮しなければなりません。――すでに神学的な枠組みとして述べられたとおり、聖書と聖伝は変わることなく神のことばを伝え、「聖霊の声」(47) を反響させています。――霊感のたまものの意味。聖霊はこの霊感によって聖書を神のことばとし、またそれを教会にゆだねます。教会は信仰の従順によって聖書を受け入れます。――聖書解釈の基準としての正典の一致。――聖書の真理。この真理は、何よりも「神がわれわれの救いのために書かれることを望んだ真理」(48) として理解しなければなりません。――人間のことばで書かれた神のことばとしての聖書の意味と内容。この人間のことばにおいて、聖書解釈は、信仰の導きのもとに、哲学的・神学的基準と結びつけられます。教皇庁聖書委員会が『教会における聖書の解釈』(49) で確認しているとおりです。

今日、神の民はますます神のことばに飢え渇いています（アモス8・11－12参照)。この強い欲求を見過ごしてはなりません。なぜなら、主ご自身がこの欲求を促しておられるからです。同時に、残念なことに、この欲求はかならずしもどこでも感じられているわけではありません。それは神のことばに触れることがあまりなかったり、適切なしかたで聖書を読むことがないためです。聖書とは何か、聖書はなぜ存在するか、聖書は信仰にとってどれほど役に立つか、聖書をどう用いればよいかを信者が知ることができるように

助けることが強く求められています。この必要に、教会はこたえてきましたし、特に『神の啓示に関する教義憲章』の4つの章 (50) でこたえています。これらの章を、他の教導職の教えと専門家の研究と結びつけながら、適切なしかたで知ることが、わたしたち教会共同体の責務です。

緊急に必要な課題――教会の中で神のことばを解釈する

16　教会に属する多くの人が、個人やグループで、聖書に書かれた神のことばを熱心に研究しています。このことは、信者が聖書を正しく理解し、聖書を日常生活に適用できるようにするための貴重な機会を教会に与えます。ある意味でこれは現代、特にいえることです。なぜなら、聖書を読むことは、特に哲学・科学・歴史研究において、神のことばと人文科学の間の生き生きとした出会いをもたらしうるからです。このみことばと文化の出会いによって、人々は神と人間と事物に関する真理と価値を知ることができるようになります。この出会いはまた新たな諸問題に継続して取り組むことを可能にします。こうして理性は信仰を求めます。その結果、人々は神の啓示と人類への期待に従って、真理といのちのために協力して働くようになります (51)。

同時に、聖書が恣意的ないし文字どおりの意味で解釈される危険もあります。根本主義に見られるとおりです。こうした解釈はテキストに忠実であろうとする望みを示すとともに、テキストのあり方に関する誤解を示しています。そこから、こうした解釈は深刻な誤りに陥り、また不毛な論争を引き起こします (52)。聖書を読む際のもう一つの危険は、聖書の「イデオロギー的な」読み方、ないし、聖書を信仰と切り離して単なる人間のことばとして読む読み方から生まれます（二ペトロ1・19－20、3・16参照）。そこから、聖書に関する見解の対立ないし分裂が生じます。聖書はみことばを力強く宣べ伝え、信者の生活の源泉となるものです。聖書の不適切な読み方が、教導職の役割をあいまいにすることもあります。教導職は、聖書と聖伝の両方の意味での神のことばに奉仕するのです。一般に、みことばに関する解釈学の役割についての知識の不足ないし不正確さが見られます。みことばの解釈学は、教会の聖伝とのつながりと教導職への従順のもとに、人間的手段と啓示された手段とから基準を引き出さなければなりません。

今日では、第二バチカン公会議とそれに続く教導職の文書 (53) に基づいて、他の側面も注目しなければなりません。それは、みことばが教会の司牧

活動の中で適切なしかたで伝えられるためです。わたしたちは神と人間の書である聖書を、歴史的かつ文字どおりの意味と神学的かつ霊的な意味とを正しく組み合わせて読まなければなりません(54)。それゆえ、テキストの正しい解釈は歴史的・批判的方法に基づくべきであり、また歴史的・批判的方法は他のさまざまな方法によって補われなければなりません(55)。これが聖書解釈の基盤です。しかし、完全で全体的な意味に到達するために、『神の啓示に関する教義憲章』に述べられた神学的基準を用いる必要があります。すなわち、「聖書全体の内容と一体性……、教会の生きた聖伝全体……、信仰の類比」(56) です。現代、教会共同体を造り上げるために、徹底した神学的・司牧的考察が必要とされています。教会共同体は、神のことばとしての聖書に関する適切かつ実り豊かな知識に基づいて築かれなければなりません。神のことばは、教会の中に生きておられる、イエス・キリストの十字架と復活の神秘のうちに含まれます。

教皇ベネディクト十六世はいいます。「わたしは、神学者が、公会議が望んだしかたで、『神の啓示に関する教義憲章』に従って、聖書を解釈し、愛することを望みます。神学者が聖書の内的な一致を体験することができますように。そのために現代では『正典的な釈義』が役立ちます（もちろんこれはまだ始まったばかりにすぎません)。そして、次に聖書の霊的解釈を行うことができますように。この聖書の霊的解釈は、外面的に敬虔になることではなく、内面からみことばの前に進み出ることです。この点において何かを行うこと、すなわち、歴史的・批判的釈義と並んで、この釈義とともに、またこの釈義のうちに、現代の神のことばとしての生きた聖書への導入を行うことは、きわめて重大な課題だと思われます」(57)。

このことについて、『カトリック教会のカテキズム』や、聖書が神の民の中に生み出したさまざまな声や伝統、そして神学や人文科学の研究の貢献に注意を払う必要があります。

これに関連して、教会が聖なる秘跡をともに祝うたびごとに行う、神のことばの解釈のことも考慮すべきです。感謝の祭儀で朗読される朗読聖書の『緒言』はこのテーマについて次のように述べます。「キリスト自身の意志により、新しい神の民はすばらしい多様性をもつメンバーから成り立っているので、神のことばに関して各自に与えられている務めと役割も異なっている。信者は神のことばを聞いて黙想するが、神のことばを公式にのべることは、

聖なる叙階によって教導の役割を与えられた者、または同じ役務を果たすよう委任された者だけがこれを行うのである。このように、教えと生活と礼拝の中に、教会は自らのすべてと信じるすべてのことを永続させ、あらゆる世代に伝えていく。こうして、時代の推移に伴い、教会における神のことばの実現を目指して、神の真理の満ち満ちた状態に達しようと絶えず努めるのである」(58)。

旧約と新約――唯一の救いの営み

17　さまざまな理由で、多くの人々の聖書に関する知識とその扱い方はかならずしも十分なものではありません。難解に見える旧約の箇所を取り上げるのを躊躇することがあります。そこから、ある箇所の朗読を脇に置いたり、恣意的に選んだり、拒絶したりする危険が生じます。教会の信仰は、旧約をキリスト教の聖書の一部と考え、旧約がもつ不変の価値と、旧約と新約の間のきずなを認めます(59)。それゆえ「旧約のキリスト教的な読み方」を中心に置く教育が緊急に求められています。そのために典礼の実践が役立ちます。典礼は常に、旧約朗読を新約の完全な理解のために不可欠なものとしてきたからです。イエスご自身がこのことをエマオの記事の中で確認しておられます。師であるかたは「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明された」（ルカ24・27）のです。典礼における旧約朗読は、聖書本文を完全かつ詳細に読むための貴重な手段として役立ちます。典礼では、答唱詩編が、朗読された箇所についての祈りと黙想へと招きます。そして、第一朗読と福音のテーマが関連づけられます。このテーマをまとめるのは、キリストの神秘に基づく計画です。まことに、「新約は旧約の中に隠れ、旧約は新約の中で明らかにされる（Novum in Vetere latet et in Novo Vetus patet）」(60) のです。

大聖グレゴリオはいいます。「旧約の約束は新約において現れます。かつて隠されたしかたで告げられたことが、今や公に告げ知らされます。それゆえ旧約は新約の預言であり、新約は旧約の説明なのです」(61)。

現代、新約はある意味で聖書朗読の中で親しまれています。朗読聖書や聖務日課の祈りに収められたさまざまなテキストは、福音に中心的な価値を置きます。福音は、3年周期の主日・祝祭日用朗読配分と、1年周期の週日用朗読配分の中で全体が読まれます。朗読聖書は聖パウロと他の使徒の偉大な

教えも重視しています(62)。

第1章についての質問

1．救いの歴史における神のことばに関する知識

啓示、神のことば、聖書、聖伝、教導職に関して、信者（小教区、修道会、運動団体）はどのように考えていますか。信者は神のことばのさまざまな意味の違いを理解していますか。イエス・キリストが神のことばの中心であることを理解していますか。神のことばと聖書はどのような関係にありますか。理解が難しいことは何ですか。その理由は何ですか。

2．神のことばと教会

神のことばに近づくこと――このことが、どのようにして、キリストのからだである教会に属することに関する認識を深め、教会の宣教への心からの参加を促しますか。神のことばと教会に関して、信者はどのように理解していますか。釈義と神学研究において、また信者が聖書に触れるとき、聖書と聖伝は適切に関係づけられていますか。信仰教育（カテケージス）は神のことばに基づいてなされていますか。聖書は十分に重視されていますか。神のことばの宣教における教導職の重要性と責務は認識されていますか。信仰に基づいて、真の意味で神のことばに耳を傾けていますか。明確にすべき点、強調すべき点は何ですか。

3．神のことばにおける教会の信仰のさまざまなしるし

『神の啓示に関する教義憲章』はどの程度受け入れられていますか。『カトリック教会のカテキズム』はどの程度受け入れられていますか。神のことばの使徒職において司教がもつ教導職としての特別な役割は何ですか。みことばの宣教において、叙階された奉仕者、司祭、助祭の果たす職務は何ですか（『教会憲章』25、28参照）。信者は神のことばと奉献生活の関係をどう理解していますか。将来の司祭の養成において神のことばをどのように用いることができますか。神の民（司祭、助祭、奉献生活者、信徒）の中で、神のことばに関するどのような教育が必要とされていますか。

4．神のことばとしての聖書

なぜ現代のキリスト信者は熱心に聖書を探究するのでしょうか。聖書は信仰生活にどのような影響を及ぼしますか。非キリスト者の中で聖書はどのように受け入れられていますか。知識人の中で聖書はどのように受け入れられていますか。聖書は常に正しく扱われていますか。広く見られる問題は何ですか。霊感のたまものと聖書の真理に関して、信者はどう理解していますか。信者は、聖書の霊的な意味が、神の意図した最終的な意味であることを理解していますか。旧約はどのように受け入れられていますか。福音のほうがよく読まれる場合、福音に関する知識と読み方は十分なものですか。現代、多くの人が「難しい」と考える聖書の箇所はどこですか。この問題にどう対応すればよいでしょうか。

5．神のことばへの信仰

信者は神のことばをどうとらえていますか。信者は深い信仰をもって神のことばに耳を傾け、神のことばによって信仰を新たにしようとしていますか。信者は何のために聖書を読んでいますか。信者は聖書を読むときに、どのような識別基準を用いていますか。

6．マリアと神のことば

なぜマリアは神のことばを聞くための模範また母なのですか。人々は神のことばを、マリアがなさったように受け入れ、生きていますか。どうすればマリアは信者にとって、神のことばを聞き、黙想し、生きるための模範となることができるでしょうか。

第2章
教会生活における神のことば

「そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命をかならず果たす」（イザヤ55・11）。

教会は神のことばによって生まれ、神のことばによって生きる

18　教会は、自らが常に神のことばによって招かれ、新たにされていると告白します。教会はこのことを愛と力をもって宣べながら、まず神のことばを「うやうやしく聞きます」。そして、内的な驚きにとらえられながら、謙虚で信頼に満ちた信仰をもって神のことばを受け入れます(63)。その模範はマリアです。マリアはみことばを聞いて、それを行いました（ルカ1・38参照）。だから主はマリアを教会の模範としたのです。

教会共同体も同じように聖書に近づきます。「実際、聖書において、天にまします父は、深い愛情をもって、常に自分の子どもたちと会って、互いに語り合うのである」(64)。それゆえ聖書は、教会の心と手の中にゆだねられます。聖書は、「全能の神から人類に送られた手紙」(65)、いのちの書、わたしたちがキリストのからだに示すように最高の尊敬を示す対象だからです(66)。教会共同体は聖書のうちに、教会、人類、そして全被造物に対する神の計画を見いだします。それゆえ「教会は、今日も、今までと同じように、聖伝とともに聖書をおのが信仰の最高の規範と考えている」。そして、聖書を力強く宣べ伝え、「魂の糧、霊的生命の泉」(67) としてこれに近づきます。

キリスト信者は教会から聖書を受け取ります。キリスト信者は教会とともに聖書を読み、教会とともに考え、教会とともに望みます。こうしてキリスト信者は、あらゆるみことばとの出会いが目指す究極の目標を目指します。すなわち、キリストが教えたように、信仰、希望、愛の生活の中で神のみ旨を行うことによって、師であるかたに従うことです（ルカ8・19－21参照）。

神のことばは歴史を通して教会を支える

19　神の民は常にみことばから力を汲み取ります。このことは、預言者が神の民に語り、イエスが群衆や弟子に教え、使徒が初代教会に語りかけたとき

から、今に至るまで見られます。それゆえ、特に聖書に書かれたみことばの存在が、各時代の聖書学と教会の歴史をどのように特徴づけてきたかを注意深く調べなければなりません。

教父の時代、聖書は、神学、霊性、そして司牧生活の中心であり源泉でした。教父は聖書の「霊的な」読み方と呼ばれるものの比類のない教師です。この「霊的な」読み方は、忠実に行うならば、「文字」すなわち具体的かつ歴史的な意味を破壊しません。かえって、霊において「文字」を読むことを可能にします。中世においても、聖書は神学的考察の基盤でした。中世の学者は聖書の4つの意味を区別しました（文字的意味、寓意的意味、道徳的意味、上昇的意味）(68)。古くからある「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」の伝統は修道院的な祈りの形式です。「霊的読書」は芸術的な霊感の源泉となり、さまざまなかたちの説教や民間信心を通じて信者に伝えられました(69)。現代では、分析的な精神の高まり、科学の進歩、キリスト者の分裂、そこから生じるエキュメニズムの責務が、困難と論争を伴いながらも、より適切な方法論と、聖伝の中で深められた聖書の神秘の理解をもたらしています。現在、教会は、第二バチカン公会議に基づいて、みことばの中心性に基づく刷新を経験しています。

歴史的な多様性とともに、地理的な多様性も存在するといえます。神のことばは聖書の中に存在し続けるので、それは5大陸の部分教会への福音宣教のわざによって広がります。みことばのインカルチュレーションが部分教会の中で行われることによって、みことばは、多くの民族の信仰を活気づける源泉、教会の交わりの基盤、みことばの神秘の汲み尽くしえない豊かさのあかし、文化と社会に霊感を与え、それを変容させるのための永遠の源となります。

聖霊の祈りの力によって、神のことばは教会生活のあらゆる側面に行き渡り、それらを生かす

20　聖霊は教会を導いて真理をことごとく悟らせます（ヨハネ16・13参照）。こうして聖霊は教会に神のことばの真の意味を理解させ、ついにはみことばが啓示された偉大な瞬間そのものへと教会を導きます。すなわち、御父の啓示である、ナザレのイエス、神の御子です。聖霊は聖書の魂であり、その解釈者です。聖書は聖霊の霊感のもとに書かれたからです。それゆえ聖書は「そ

れが書かれたのと同じ霊の光のもとに読まれ、解釈されなければならない」(70)のです。教会は聖霊に導かれながら「聖書をますます深く理解するよう努力」します。それは、おのが子どもたちを養うためです。その際、教会は、特別な意味で東方教会と西方教会の教父の研究や(71)、釈義的・神学的研究、また聖人の生涯と信仰のあかしからも学びます。

このことに関連して、『朗読聖書の緒言』は次のように述べます。「人の耳に響く神のことばが心の中に効果を上げるには、聖霊の働きかけが必要である。聖霊の息吹と助けによって、神のことばは典礼行為の基礎となり、また生活全体の規範と支えになる。したがって、聖霊の働きは、あらゆる典礼行為に先立ち、それに伴い、その後に続くばかりでなく、神のことばの宣言において信者の集会全体に向かって告げられるすべてのことを、一人ひとりの心に思い起こさせ（ヨハネ14・15－17、25－26、15・26－16・15参照）、皆の一致を固めると同時に、たまものの多様性を促進し、その種々の働きを高揚するのである」(72)。

ですから、キリスト教共同体は、聖霊の働きによって日々築き上げられます。すなわち共同体は、神のことばに導かれ、照らしと回心と慰めのたまものを受けます。聖霊がこのたまものをみことばを通じて与えるからです。「かつて書かれたことがらは、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望をもち続けることができるのです」（ローマ15・4）。

教会の第一の務めは、信者が、聖霊の導きのもとに神のことばと出会うとはどういうことであるかを理解できるように助けることです。特に教会が教えなければならないのは、次のことです。このような出会いがどのようにして聖書の霊的な読み方によって生じるのか。聖書と聖伝と教導職は聖霊によってどのように内的な意味で結び合わされているか。そして、洗礼や他の秘跡の中で与えられる聖霊に導かれるために、信者は何をしなければならないかということです。ダマスコの聖ペトロスはいいます。「聖書の霊的な意味を味わった人は、聖書のもっとも単純なことばの意味ともっとも深遠なことばの意味は一つであることを知っています。これらの二つの意味はともに人間の救いを目指しているからです」(73)。

教会はさまざまなしかたでみことばによって養われる

21　「教会の説教は、キリスト教そのものと同じように、聖書によって養われ、導かれる必要がある」(74)。聖パウロは祈り求めます。「主のことばが、‥‥速やかに宣べ伝えられ、あがめられるように」(一テサロニケ3・1)。この願いはさまざまなしかたで、すなわち教会生活のさまざまな場で実現されます。そのために必要なのは、熱心な信仰、使徒としての献身、思慮深い司牧的配慮です。この司牧的配慮は、継続的、創造的に、また、さまざまな経験の共有によって豊かにされながら行われなければなりません。現代のあらゆる教会共同体に求められているのは、聖書を基盤とした司牧的生活、いいかえれば、聖書から絶えず霊感を受けながら行われる司牧的生活です。

こうした一致と協力という観点において、教会は、神のことばとの出会いがもつ生き生きとした性格を知る必要があります。このような出会いが教会の司牧活動の源泉です。わたしたちが告げ知らせ、耳を傾けるみことばは、典礼と教会の秘跡的生活の中で祝われることを求めます。こうして神のことばは、教会の交わりと愛と宣教の経験を通して、教会生活の基盤となります(75)。

a 典礼と祈り

22　「典礼において、儀式とことばが密接に結ばれていることを明らかにするために」(76)。教会は、個人的また共同の祈りだけでなく、典礼の祈りの中で独自のしかたで語られる神を見いだし、迎え入れることを学んできました。実際、聖書は典礼や預言のことばです。聖霊は聖書の中で、書かれた文字を超えて、実際に世において行われたキリストの出来事を宣べ、あかしします。典礼が聖書の知識や聖書への愛を深めることを知っている教会は、典礼におけるみことばの使用に関する第二バチカン公会議の文字と精神を実践し続けなければなりません。それは質的な意味でも量的な意味でも、活発な刷新が行われることを求めます。信者も公会議のさまざまな指針をともに考察することが求められます。

このことに関連して、次のことを考慮することが不可欠です。すなわち、「キリストはご自身のみことばのうちに現存しておられる。それは、聖書が教会で読まれるときは、キリスト自身が語られるからである」ということです(77)。それゆえ、「典礼行事にとって、聖書はもっとも重要なものである」

(78)。そこで、典礼行為においてみことばと出会うあらゆる時に特別な注意を払う必要があります。すなわち、感謝の祭儀（主日）、さまざまな秘跡、説教、典礼暦年、聖務日課、準秘跡、さまざまな民間信心と秘義教話です。

第一の座を占めるのは、特に主日にささげられる感謝の祭儀です。感謝の祭儀は本来「神のことばの食卓とキリストのからだの食卓」(79) とから成る一つの食卓です。「感謝の祭儀は、交わりが絶えず告げ知らされ、養われるための、特別な場です」(80)。多くのキリスト信者にとって、神のことばと出会うおもな機会である主日のミサは、現代でも依然としてみことばに触れるかけがえのない時です。したがって、主日の感謝の祭儀の中で、みことばを記念し、心から喜びをもってみことばと出会うことができるために、真の意味での司牧的熱意をもたなければなりません。

具体的にいえば、ことばの典礼に最大限の注意を払う必要があります。ことばの典礼は、感謝の祭儀の中だけでなく、他の秘跡の中でも行われます。そのために、テキストをはっきりと、よく聞こえるように読まなければなりません。同じことは説教にもいえます。説教は、はっきりとみことばを語って人々を力づけ、信仰の光のもとに、聖書に語られた生涯と歴史の出来事を解釈しなければなりません。これらのことはすべて信者の祈りに支えられながら行われます。信者の祈りは、それ自体として、今ここで語られる神に対する賛美と感謝と祈願となります。このことに関連して、『ミサの朗読配分』(81) と聖務日課の祈りに、特別な注意を払う必要があります。

現代の教会は、司牧活動を通じ、どうすれば信者が神のことばと出会うこれらの重要な機会にもっとあずかれるようにできるかを考えるよう、何よりも求められています。

b 福音宣教と信仰教育

23　「ことばの奉仕、すなわち、司牧的説教、信仰教育、各種のキリスト教教育――この中で典礼中の説教は特別の地位を占めるべきであるが――これらは、聖書のことばによって、健全な栄養と聖なる活力を与えられる」(82)。教皇ヨハネ・パウロ二世はいいます。「福音宣教や信仰教育のわざは、神のことばに注意深く耳を傾けることにより活気づけられます」(83)。これが、第二バチカン公会議の最大のはっきりと目に見える成果です。この成果を継続、

拡大し、その質を高め、確信をもって奨励し、支持しなければなりません。教会は、自らの最大の宝として神のことばのたまものを受け取りながら、神のことばを最大の務めとしていることを知っています。すなわち、みことばを他の人々に告げるという務めです(84)。たとえばここでは、キリスト教入信の準備やキリスト信者の継続教育のために、典礼暦の中で最初に行われるみことばの告知や信仰教育のような、みことばへの奉仕の機会を挙げることができます(85)。

そのため、『カテケジス一般指針』やさまざまな地方教会の「信仰教育指針」の内容に従って、みことばを伝えるさまざまな方法と、時代の違いや霊的・文化的・社会的状況に応じて変化する信者の必要とを考慮する必要があります(86)。神のことばの光のもとに民間信心を適切に照らし、浄め、評価することにも注意を払うべきです。民間信心はしばしば神のことばから生じるからです。このことに関連して、教会の中にすでに存在するもの、またこれまでに述べたものを含む、みことばを伝えるさまざまな手段に注意を向けなければなりません。すなわち、朗読聖書、聖務日課、信仰教育、みことばの祭儀などです。

聖書に直接触れることは、福音宣教において重要な役割を果たします。実際、福音宣教が第一に目指すのは聖書です。「具体的にいえば、信仰教育は『真の意味での「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」、すなわち、教会に住まわれる聖霊に従って聖書を読むことへの導入』とならなければなりません」(87)。同時に、福音宣教の本質的な内容も聖書です。信仰教育は「常に聖書に触れることによって、聖書と福音の思想・精神・態度を吸収し、それらに満たされなければなりません」(88)。

学校の中で、特に宗教教育の中で聖書を教えることには、特別な文化的な価値があります。

『カトリック教会のカテキズム』は、教会の交わりのための有効かつ正当な手段として、また、信仰教育の確かな規範として、特別な役割を果たします(89)。『カトリック教会のカテキズム』は聖書に基づく信仰教育の代わりとなることを意図するのでなく、教会に関する完全な見方をまとめることを目指しています。

神のことばは、識字能力のない人も含めた、すべての人に伝えられます。したがって、現代のさまざまなマス・メディアの手段が特に役立ちます。神

のことばの奉仕職が成果を上げるためには、マス・メディアのさまざまな手段を適切に更新しつつ、創造的に用いることが必要です。

文化と社会の大きな変化から信仰教育に求められていることがあります。それは、人々が、歴史、科学、道徳的問題などのテーマに関する聖書の「困難な」箇所を説明できるように助けることであり、また、神、人間、道徳的行為に関する旧約の思想の諸問題についての理解を深めることです。

c 釈義と神学

24　「したがって、聖書研究はあたかも神学の魂のようなものでなければならない」(90)。この釈義と神学の分野における第二バチカン公会議以後の成果について、主が与えてくださった真理の霊のたまものをたたえずにはいられません。さらに、神のことばはわたしたちのただ中に住まわれるがゆえに（ヨハネ1・14参照）、同じ霊に駆り立てられて、わたしたちは、みことばが現代人の中で働く新たなかたちを識別し、みことばに関する人類の期待と挑戦を考察しようと努めます。

今日、これまでほとんど表明されなかったようなかたちで、さまざまな重要な考えが示されています。それは次のようなものです。――教会の考え方に従って聖書を研究し、説明するという、釈義学者と神学者の課題。――教会の生きた聖伝との関連で聖書のことばを解釈し、教えること。また、聖書のことばとの関連で教会の生きた聖伝を解釈し、教えること。――釈義と神学における教父の遺産を重視すること。――教会の教導職の教えの導きに従うこと。――忠実かつ知性をもって釈義と神学の課題を遂行すること (91)。

この点について、『司祭の養成に関する教令』が司祭養成における神学教育とその方法に関して当時述べたことを思い起こすのは有益です。そこで述べられた大部分のことは今なお今後の実施課題となっています。『司祭の養成に関する教令』に示された方針を実行することが必要です。すなわち、まず神学課程の基準として聖書の主題から出発します。聖書の主題の研究と教育は、司祭職に関する教理の適切な要約を示し、神の民に関する考察の源泉として役立ちます。公会議の指針に立ち戻ることによって、神のことばそのものを豊かにできます。神のことばは神学の諸学科の教えの中で、また「諸文化に耳を傾けること（auditus culturæ）」に基づく対話の継続の中で、実現する

からです(92)。

神の啓示と、現代人の生活とものの考え方との関係にも注意を向けなければなりません。それには次のような課題があります。――神のことばを用いて最近の人間学の諸思潮を考察すること。――「人間の霊魂が真理の観想へと飛翔していく両翼のようなもの」(93) である理性と信仰の関係、また、神に由来する唯一の真理を伝える手段を研究すること。――偉大な諸宗教と対話しながら、神の名においてより公正で平和な世界を築くこと。

キリスト教共同体は、聖書学者が、「適切な支援」を与えられながら、神のことばの奉仕者を熱心に助けてくれることを心から望みます。それは、神のことばの奉仕者が「精神を照らし、意志を強め、人の心を神への愛に燃え立たせるような聖書の糧を神の民に与えうるようにする」(94) ためです。

d 信者の生活

25 「聖書を知らないことは、キリストを知らないことである」(95)。「このゆえに、すべての聖職者（と信徒）は、絶えず聖書を読みまた熱心に研究しなければならない」(96)。

聖書に基づく信仰教育が進展するにつれて、聖書の霊的な意味は、神の民の生活における神のことばの中で、もっとも魅力的で将来性のあることがらとなっています。キリスト信者の最高の召命は、みことばと出会い、みことばを祈り、みことばを生きることです。教皇ヨハネ・パウロ二世がいうとおり、「個人や共同体が、今や幅広く聖書に親しんでいます」(97)。しかしながら、聖書に親しむ人の数はもっと多くならなければなりません。また、みことばへの近づき方も、教会への奉仕という、みことばの最終目標に沿ったものでなければなりません。真の意味でのみことばの霊性に必要なのは次のことです。すなわち、「聖書を読むにあたっては、神と人間との会話ができるよう、それに祈りを加えることを忘れてはならない。実際、われわれは祈る場合には、神に話しかけ、神のことばを読む場合には、神の話を聞くのである」(98)。聖アウグスチヌスはいいます。「あなたの祈りは神に向けて語ったことばです。あなたが聖書を読むとき、あなたに語りかけるのは神です。あなたが祈るとき、あなたは神に語りかけるのです」(99)。そこから、第一に優先しなければならないことが生じます。

まずわたしたちは、神のことばを、内的な意味でも外的な意味でも、「貧しい心」で受け止めなければなりません。それは神のことばに完全な意味でこたえるためです。「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためです」（二コリント8・9）。それゆえ、わたしたちは、イエスが御父のことばを聞き、それをわたしたちに告げ知らせたのと同じしかたに基づいて、神のことばを聞かなければなりません。すなわち、あらゆるものを完全に捨てて、貧しい人に福音を告げ知らせる用意ができていなければなりません（ルカ4・18参照）。「無力な人々、貧しい人々が聖書を手にするのを見て喜ぶことができる。その彼らは、霊的で実存的な観点から確かな聖書学そのものからの光よりもいっそう突っ込んだ光を聖書の解釈と現在化にもたらしてくれるかもしれない」(100)。

何よりも、教会は、伝統的に「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」と呼ばれた聖書の読み方を奨励しなければなりません。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」は4つの段階（読書、黙想、祈り、観想）から成ります。この実践は、教会の初期の時代にさかのぼり、教会の歴史全体に見られます(101)。この祈りの伝統は修道院に由来しますが、現代、聖霊は、教会の教導職を通じて、それが聖職者(102)、小教区共同体、運動団体、家庭、そして青年の中で行われることを促しています(103)。教皇ヨハネ・パウロ二世はいいます。「みことばに聞くことが、昔から今日に至るまで有効な伝統であるレクチオ・ディヴィナ（霊的読書）の中で、神との生き生きとした出会いとならなければなりません。レクチオ・ディヴィナは、わたしたちの生活を問い、方向づけ、それにいのちを与える生きたことばを、聖書の本文の中に読み取らせます」(104)。「またそのために、新たな方法も用いることができます。その際、新しい方法は、注意深く検討され、時代に合ったものとしなければなりません」(105)。教皇ベネディクト十六世は青年に対して特別に呼びかけます。「わたしは皆さんが聖書に親しむように、強く勧めます。聖書をいつも手に携えてください。それは、聖書が皆さんにとって、行くべき道を指し示す羅針盤となるためです」(106)。ベネディクト十六世はすべての人のためにいいます。「祈りとともに聖書を熱心に読むことにより、内的な対話が生まれます。この対話の中で、聖書を読む人は神が語ることばを聞きます。また、

その人は、祈りのうちに、開かれた信頼の心をもって、神にこたえます」(107)。

神の民全体の中で「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」が行われるようになったのは比較的最近のことです。それゆえ、司祭、奉献生活者、信徒に対して、忍耐強く啓発的な継続教育を行うことが必要です。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」の実践は、わたしたちが聞いた神のことばそのものから生じる、神体験の共有（collatio）にまでなるはずです(108)。神のことばは、教会共同体の霊的生活のさまざまな実践に霊感を与える第一の源泉とならなければなりません。たとえば、霊操や黙想、さまざまな信心と信心業です。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」の実践の重要な目標（またそれが真の実践であるかどうかを示す基準）は次のことです。すなわち、人が知恵をもってみことばを個人的に読めるように成長すること。つまり、キリスト信者が実生活を識別し、そこから「希望についての説明」（一ペトロ3・15参照）ができるようになることです。これがキリスト信者の聖性のあかしの基本だからです。

聖チプリアノは、教父の思想と一致しながらいいます。「あなたは時には熱心に祈り、時には読書をするようにしてください。神と語るその時こそ、神があなたとともにおられます」(109)。

「あなたのみことばは、わたしの道の光、わたしの歩みを照らすともしび」（詩編119・105）。いのちを愛する主は、どんなときにも、みことばが信者の生活のすべてを照らし、導き、慰めることを望まれます。労働のときも、休みのときも。苦しみのときも、家族や社会への責務を果たすときも。喜びのときも、悲しみのときも。こうしてすべての人がおのおのの置かれた状況の中で、よいものを大事にすること（一テサロニケ5・21参照）を見分け、また、神のみ旨を知って、それを行うことができるようになるのです（マタイ7・21参照）。

第2章についての質問

1．教会生活における神のことば

自分の教会共同体また信者の間で、神のことばはどの程度重視されていますか。どのような意味で神のことばはキリスト信者を養う糧となっていますか。キリスト教が「書物の上だけの宗教」に陥る危険はありますか。個人の

生活の中で、また主日の信者の集いの中で、神のことばは敬われ、よく読まれていますか。週日に神のことばは敬われ、よく読まれていますか。典礼暦の特別な季節に神のことばは敬われ、よく読まれていますか。

2．神の民の教育における神のことば

自分の共同体や信者一人ひとりに対して、神のことばに関する教えを包括的かつ全体的に伝えるためにどのようなことが行われていますか。養成中の司祭、奉献生活者、共同体の奉仕者（カテキスタなど）は、それぞれの司牧的奉仕職における聖書の扱いについて適切な養成や、定期的な継続養成を受けていますか。信徒のための継続的な養成コースはありますか。

3．神のことば、典礼、祈り

信者は典礼と個人の祈りの中でどのように聖書に接していますか。信者はことばの典礼と感謝の典礼の関係をどのように理解していますか。感謝の祭儀で記念されるみことばと、キリスト信者の日常生活の関係をどのように理解していますか。神のことばは説教の中に真の意味で反映していますか。なすべき課題はどのようなものですか。ゆるしの秘跡の中で、神のことばを聞くことも同時に行われていますか。聖務日課の中で、神のことばを聞くこと、また神のことばとの対話は行われていますか。神のことばを聞き、それと対話することは、信徒の中でも行われていますか。神の民は聖書に触れる十分な機会をもっていますか。

4．神のことば、福音宣教、信仰教育

第二バチカン公会議と教会の教導職の教えから見て、神のことばと信仰教育に関する積極的な側面と消極的な側面はどのようなものですか。信仰教育（キリスト教入信と継続養成）のさまざまなかたちの中で神のことばはどのように扱われていますか。教会共同体は、聖書に書かれた神のことばに十分な注意を払い、その研究を行っていますか。行っている場合、どのように行っていますか。さまざまな人（子ども、青少年、青年、成人）に対して、どのように聖書に関する入門教育が行われていますか。聖書に関するどのような入門講座が行われていますか。

5．神のことば、釈義、神学

神のことばは釈義と神学の魂となっていますか。「啓示されたみことば」としての性格は十分理解され、尊重されていますか。聖書に関する学問的研究は、適切な信仰の基盤によって促され、支えられていますか。聖書本文を扱う際の通常の方法はどのようなものですか。神学研究の中で聖書はどのような役割を果たしていますか。共同体の司牧的生活の中で聖書は十分考慮されていますか。

6．神のことばと信者の生活

神の民の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。聖職者の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。信徒の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。マリアの貧しく信頼に満ちた態度は「マリアの賛歌」の中に明らかに示されていますか。なぜ物質的な豊かさが神のことばを熱心に聞くための妨げとなるのですか。感謝の祭儀や他の典礼の中で、神のことばは信仰を伝えるための強力な手段となっていますか。あるいはなっていませんか。さまざまなキリスト信者が聖書に無関心だったり、積極的な関心をもたないのはなぜですか。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」は行われていますか。それはどのようなかたちで行われていますか。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」を推進する要因、あるいは妨げる要因はどのようなものですか。

第3章
教会の宣教における神のことば

「イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある箇所が目に留まった。『主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである』。イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは、『この聖書のことばは、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した』と話し始められた」（ルカ4・16－21）。

教会の使命は、人となった神のことば、キリストを宣べ伝えることである

26　「福音宣教の務めの中で『みことばの奉仕者』であるために、まず自分がみことばに養われること。これが教会にとって、新しい千年期の初めの優先課題であることは間違いありません」(110)。そのために必要なのは、師であるかたの学びやに行き、みことばが神の国の宣教の中心であることを学ぶことです（マルコ1・14－15参照）。この宣教はことばと行いをもって、すなわち教えと生活のあかしをもって行われます。神のことばからもたらされる神の国は、真理と正義、愛と平和の国です。この国はすべての人に与えられます。教会は、みことばを宣べ伝えながら、神の国の建設に参加します。教会は神の国の力を明らかにし、世の救いのためにこの国を示します。神の国の福音は地の果てにまで宣べ伝えられます（マタイ28・19、マルコ16・15参照）。宣教と、宣教のことばを聞くことが、真の信仰の保証です。

「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」（一コリント9・16）。この聖パウロのことばは特に現代において緊急の課題となっています。すべてのキリスト信者は、このことばを単なる宣言でなく、召命として考えるべきです。すなわち、世のために福音に奉仕するという召命です。イエスはいわれました。「収穫は多い」（マタイ9・37）。そしてこの収穫はさまざまです。特にアフリカやアジアにおいて、多くの人は福音を聞いたことがありません。

福音を忘れた人もいます。今も福音を聞きたいと願う人もいます。

過去と現在のさまざまな困難によって、主のことばを聞こうとする神の民の旅路がしばしば妨げられています。資金の不足を含むさまざまな理由により、多くの地域では、聖書のテキストや、聖書翻訳とその配布が実際に必要とされています。さまざまなセクトが、聖書の正しい解釈をめぐって特別な問題を引き起こしています。みことばを人々にもたらすことは大きな課題です。そのためには心から「教会とともに（cum Ecclesia）」考えようとする姿勢が必要です。まず、みことばが聞く人の心を造り変える力を信頼することが必要です。「というのは、神のことばは生きており、力を発揮し、……心の思いや考えを見分けることができるからです」（ヘブライ4・12）。第二に、現代、確実にまたはっきりと求められているのは、回心、正義、希望、友愛と平和の源泉として、宣言とあかしにおいてみことばを用いることです。第三に、みことばへの奉仕には、大胆な心、勇気、貧しさの精神、謙遜、堅忍と思いやりが必要です。

教皇パウロ六世の使徒的勧告『福音宣教』は、宣教のあり方を教えるものとして、今も現代的な意味をもっています。教皇ベネディクト十六世の回勅『神は愛』も、愛と、神のことばの宣教と、秘跡を祝うことの間の密接な関係を強調しています(111)。神は愛です。ですから、神のことばを受け入れたならば、正義と愛のわざを通じて愛を実践することなしに神のことばを宣べ伝えることはできません。回勅『神は愛』は、神のことばに基づく福音宣教に関して、今日特に重要と考えられる目標と課題を要約しています(112)。

聖アウグスチヌスは述べます。「このすべてのことの中で主要なことは、律法と聖書全体の豊かさと目的が、悦び所有すべき神を愛し、その悦ぶべき神をわれわれとともに悦ぶことのできるひとを愛することである、と知ることである。ただし人は自己を愛するように命ぜられるには及ばない。だからこの目的を知り、実現できるようになるために、神の摂理によるすべての時間的な配剤がわれわれの救いのためになされたのである。‥‥そこで聖書全体をあるいはせめて一部分なりとも自分では理解できたと思っている人はだれでも、聖書を理解することによって、その人が神と隣人とに対するふたつの愛を建てるところまでいかないとしたら、まだ聖書を理解したとはいえない」(113)。

あらゆる時代のすべての人は、神のことばに近づくことができなければならない

27　教会は、使徒の大胆さをもって神のことばを宣べ伝える自由を主張するとともに（使徒言行録4・13、28・31）、「キリスト信者には、聖書に近づく多くの機会が与えられなければならない」(114) と述べます。

教会の宣教においては聖書が必要です。聖書は宣教の基本的な内容を含むからです。教会が強く勧めているにもかかわらず、実際には大部分のキリスト信者が個人的に聖書に触れていないことを認めなければなりません。聖書に触れている人も、聖書を宣べ伝えるに際して、多くの神学的・方法論的な不安を抱えています。聖書が教会との交わりをもつことなく、主観的で恣意的な解釈にゆだねられたり、教会の中の他のことがらと同様に私的な信心の対象におとしめられる危険も存在します。それゆえ教会は、みことばに関する堅実で信頼できる司牧活動を推進する必要があります。

こうした取り組みから、特別な計画が実践されることになります。たとえば、聖書を司牧計画の中で完全な意味で重視しなければなりません。司教の指導のもとで、各教区において聖書を基盤とする司牧計画を立てる必要があります。こうした司牧計画は、すでに教会のすばらしい典礼行為の中に存在する聖書を用いることができます。そして、特に青年や成人のために「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」の実践を行うことを通して、聖書と直接触れる機会を与えることが可能です。こうして、神のことばを、司祭と信徒、したがって小教区全体、奉献生活者の共同体と運動団体の交わりの基盤とし、この交わりを通じて示すことが可能になります。

そのために、教区、教会管区、全国レベルでの聖書を中心とした司牧活動は特別な役割を果たします。聖書を基盤とした司牧計画は、聖書に親しむ実践を広めます (115)。そして信徒の聖書運動を推進します。特に青年のための聖書ないし福音の勉強会の指導者を養成します。また聖書に基づく信仰教育講座を提供します。これは、移住者や真理を求める人をも対象としなければなりません。

ここで、1968年以来、教皇パウロ六世が設立した世界カトリック聖書連盟が、神のことばに対する公会議の取り組みを促進することに努めてきたことを指摘するのはふさわしいことです。ほとんどすべての司教協議会が世界カ

トリック聖書連盟の会員となっています。それゆえすべての大陸にこの組織の支部が存在します。世界カトリック聖書連盟の目的は、聖書をさまざまな言語で提供すること、また、正確な翻訳を通じて、すべての人が聖書を知り、その教えを生きることができるように助けることです。聖書の翻訳は司教の司牧的配慮のもとで行われます。この翻訳聖書が典礼で使用されることが適当な場合もあります。教会共同体はまた、聖書を人々が入手しうる価格で配布するよう努めなければなりません。

さらに、神のことばを伝達するために、さまざまな方法と新しい言語形式およびメディアを思慮あるしかたで組み合わせて用いなければなりません。たとえば、ラジオ、テレビ、演劇、映画、音楽、歌、さらにはCD、DVD、インターネットなどです(116)。

奉献生活者は、神のことばを伝える上で特別な役割を果たさなければなりません。第二バチカン公会議はいいます。奉献生活者は「神のことばを読み、黙想することによって『イエス・キリストを知ることのあまりのすばらしさ』（フィリピ3・8）を習得するために、何よりもまず聖書を毎日手にしなければならない」(117)。こうして彼らは、特に貧しい人、小さな人、社会から除け者にされた人のための教育と福音宣教という課題を果たすための新たな力を得ます。教父に倣って、奉献生活者は聖書を日々「思いめぐらす」必要があります。聖アンブロジオがいうように、人が聖書を読み始めると、神は地上の楽園の中をこの人とともに歩みます(118)。教皇ヨハネ・パウロ二世もいいます。「神のことばは、キリスト教のあらゆる霊性の第一の源です。神のことばが、生きている神、そして救い、聖化する神の意志との個人的な関係を育てます。まさにこのことのために、奉献生活の会の初めの時から、とりわけ隠世修道生活において、神のことばの黙想（レクチオ・ディヴィナ）と呼ばれるものが非常に大切にされてきました。このようにして、神のことばは生活に影響を及ぼし、聖霊のたまものである知恵の光を生活の上に放ちます」(119)。

神のことば――キリスト者の一致の恵み

28　教会の司牧活動の主要な目的の一つは、キリスト者の一致です。実際、神のことばと洗礼は、信じる者をキリストと一つに結びつける根本的な要素です。このことに基づいて、エキュメニズム運動は完全な一致に向けた歩み

を続ける必要があります。教会の聖伝の光のもとで解釈された神のことばに立ち戻ることだけが、キリストおよび兄弟との完全な出会いを保証することができます(120)。二階の広間で行われたイエスの告別説教は、このような一致が、主が与える御父のみことばをともにあかしすることのうちにあることをはっきりと強調します（ヨハネ17・8参照)。

それゆえ、神のことばを聞くことがエキュメニカルな側面をもつことを常に考慮しなければなりません。今日、聖書は、諸教会また諸教会共同体の祈りと対話におけるおもな一致点と考えられています。これは大いに喜ぶべきことです。第二バチカン公会議の教えに従って、さまざまな団体が聖書の普及のために協力してエキュメニカルな聖書翻訳を進めています(121)。公会議後、教会の教導職はエキュメニズムの分野で大きな貢献を行ってきました(122)。教導職の文書を注意深く読み、個々の状況に対応しながら、キリスト者の一致に向けた歩みをはっきりと示すしるしとその促進が期待されています。教皇ベネディクト十六世はいいます。「わたしたちのエキュメニズムの務めにとって、神のことばを聞くことは優先的な課題です。実際、教会の一致をもたらし、築くのは、わたしたちではありません。教会は自分で自分を造るのでもなければ、自分だけで生きるのでもありません。教会は、神の口から出る、造り主であるみことばによって生きています。神のことばをともに聞くこと。聖書の『霊的読書（レクチオ・ディヴィナ)』を行うこと、すなわち、祈りと結びつけて聖書を読むこと。古びることも尽きることもない、神のことばの新しさに驚くこと。わたしたちの偏見や自分の考えに合わないことばに耳をふさぐ傾向に打ち勝つこと。あらゆる時代の信者との交わりのうちに聞き、また学ぶこと。これらすべてのことが、信仰の一致を実現するために歩むべき道です。これが、みことばを聞いてそれにこたえることなのです」(123)。

神のことば――諸宗教対話のための光

29　諸宗教対話は教会の歴史を通じて常に行われてきました。しかし、今日それは新たな必要性とこれまでにない課題を帯びています。神学的研究は、諸宗教対話の諸課題を検討し、その司牧的な結果を評価しなければなりません。このテーマに関してこれまで述べられた教会教導職の教え(124)を考慮しながら、次の点を考察し、評価することが必要です。

a ユダヤ教徒との対話

30　ユダヤ教徒に対して特別な注意を向けなければなりません。キリストとユダヤ人は、同じ契約に基づく、アブラハムの子です。神は常にご自分の約束に忠実なかたなので、最初の契約を無効にされないからです（ローマ9－11章参照）。教皇ヨハネ･パウロ二世はいいます。「この神の民は、天地の造り主である神によって集められ、導かれました。人は文化によって自らの自然な能力を用います。その意味で、この神の民の存在は、単なる自然的事実でも、文化的事実でもありません。むしろ、この民の存在は超自然的な事実です。この民はあらゆることに耐え忍びました。彼らは契約の民だからです。そして、人間の不忠実にもかかわらず、主はご自分の契約に忠実だからです」(125)。ユダヤ人は、キリスト教徒が旧約と呼ぶ、聖書の正典の大部分をキリスト教徒と共有します。そこで、教皇庁聖書委員会の文書『キリスト教徒の聖書におけるユダヤの民とその聖書』(126) は、信仰における旧約聖書と新約聖書の密接な結びつきを考察します。このことは『神の啓示に関する教義憲章』でもすでに述べられています (127)。このことに関連して、二つのことを特別に考慮すべきです。すなわち、ユダヤ人の聖書解釈の独自性。そして、反ユダヤ主義のあらゆる形態を退けなければならないということです。

b 諸宗教対話

31　教会は福音をすべての造られたものにもたらすよう招かれています（マルコ16・15参照）。教会はこの使命を果たすために、多くの諸宗教の宗教者と出会います。これらの宗教者も自らの聖典をもち、彼らのしかたで神のことばを理解します。教会は至るところで、「よい知らせ」を積極的に探求する人や、自覚せずにただ「よい知らせ」を待ち望む人に出会います。教会には、救いをもたらすみことばをすべての人に宣べ伝える責務があります（ローマ1・14参照）。

何よりもまず、わたしたちは、キリスト教が書物の上だけの宗教ではなく、主イエス・キリストに受肉した神のことばに基づく宗教であることを思い起

こさなければなりません。諸宗教の聖典との関連で聖書を考察する際には、宗教混交や、表面的な考察や、真理の歪曲に陥らないよう留意しなければなりません。多くのセクトは、教会と関係のない目的や方法のために聖書を用います。ですから、教導職の権威ある解釈に基づいて、神のことばを純粋に保つことに特に注意しなければなりません。

積極的な観点からいうと、諸宗教とその文化を知り、彼らの中にあるみことばの種子を見分けるように努めなければなりません。神のことばを聞くことは、あらゆるかたちの暴力の排除をもたらすということを知ることが重要です。こうしてみことばは、心でも行いでも、正義と平和を推進させるために働きます(128)。

神のことば――現代世界のパン種

32　神のことばとの出会いはさまざまな文化（思想体系、倫理的な原理、人生観など）の中で起こります。これらの諸文化はしばしば経済や科学技術の影響を受け、世俗主義によって導かれ、マス・メディアのさまざまな手段を通じて宣伝されています。こうしたメディアを「世俗的な聖書」と呼ぶこともできます。文化との対話はこれまでにもまして緊急を要する課題です。文化との対話は、時としてきわめて骨の折れる仕事ですが、みことばを宣べ伝える上で大きな可能性をもっています。みことばは探求の豊かな源泉です。そして、探求する人に対して、主はこたえを与えて解放をもたらしてくださいます。

いいかえれば、神のことばは多元主義的で世俗的な世界の中にパン種として入ります。この世界は芸術、科学、政治、メディアから成る「現代のアレオパゴス」です（使徒言行録17・22参照）。こうして神のことばは「文化あるいは諸文化のうちに福音の力を持ち込む」(129)のです。それは、これらの文化を浄め、高め、神の国の道具とするためです。

この課題は、「道であり、真理であり、いのちである」（ヨハネ14・6）イエス・キリストに関するカテケージスを行うことも求めます。このカテケージスを表面的なしかたで行ってはなりません。むしろそれは、人がさまざまな対立する立場と対決できるための適切な準備を与えます。キリストの神秘と、それが人々の生活にもたらす恵みをはっきりと示さなければなりません。そのために、聖書が文化と、共通の「生き方（エートス）」に及ぼす、いわ

ゆる「影響作用史（Wirkungsgeschichte）」(訳注1) を研究する必要があります。この諸文化の中で、聖書は、特に西洋において、まさしく「大いなる体系」(訳注2) と呼ばれ、重視されるからです。

神のことばと人間の歴史

33　教会は、主に向かって歩む旅路の中で、神のことばがさまざまな出来事や時のしるしの中で読み取られることを知っています。こうした出来事やしるしを通じて、神はご自身を歴史の中で現されるからです。第二バチカン公会議は述べます。「教会は時のしるしを探究して、福音の光のもとにそれを解明する義務を常にもっている。そうすることによって教会は、人生と来世の生命の意味、およびこの両者の相互関係について人間が抱く永久の質問に対して、それぞれの世代に適する方法をもって答えることができる」(130)。教会は、人間の歴史の中にあって、「他の人々と一緒に自分も参加している現代の出来事、必要、要求の中に、……神の現存または神の計画の真のしるしを見分ける」(131) よう努めなければなりません。こうして教会は人類がいのちと歴史の主と出会うための助けとなるのです。

それゆえ、キリストが神の国の種として植えた神のことばは、人間の歴史を歩みます（二テサロニケ3・1参照）。イエスが栄光のうちに再び来られるとき、みことばは神の国の喜びに完全にあずかるようわたしたちを招きます（マタイ25・23参照）。この確かな約束にこたえて、教会は熱い祈りの叫び声を上げるのです。「マラナ・タ」（一コリント16・22）、「主イエスよ、来てください」（黙示録22・20）。

第3章についての質問

1．現代世界における神のことばの宣教

司牧的経験からいって、神のことばを聞くことを促す要因、またそれを妨げる要因は何ですか。内面的な不安や、カトリック以外のキリスト教の諸教派からの刺激が信仰の刷新をもたらすことはありますか。世俗主義、この世のさまざまなメッセージからの絶え間ない攻撃、キリスト教の教えに反する生活様式などが神のことばを聞くことを妨げることがありますか。こうした諸問題がある中で、神のことばをどのように宣べ伝えるべきですか。

2．聖書に容易に近づく機会

「キリスト信者には、聖書に近づく多くの機会が与えられなければならない」という『神の啓示に関する教義憲章』22のことばはどの程度事実と合致していますか。おおよそのものでよいので、この点に関する統計資料を示してください。個人また共同体全体において聖書のみことばを聞くことは多くなっていますか。

3．聖書の普及

教区共同体における聖書使徒職はどのように行われていますか。教区は司牧計画を立てていますか。司牧計画を実行する人は適切な養成を受けていますか。人々はカトリック聖書連盟について知っていますか。みことばと出会うためのどのような手段が用いられていますか（聖書研究、みことばによる祈りの会、聖書講座、聖書の日、「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」）。キリスト信者がもっともよく用いる手段はどれですか。どのような翻訳聖書（全訳・部分訳）がありますか。家庭において聖書はどのように読まれていますか。世代（子ども、青少年、青年、成人）に応じてどのような養成が行われていますか。どのようなマス・メディアの手段が使われていますか。どの手段が重要だと考えますか。

4．エキュメニカル対話における神のことば

現代世界でみことばを宣べ伝えるには、生活のあかしの一貫性が必要です。現代のキリスト信者の生活の中で、こうした生活のあかしの一貫性は見られますか。それを促進するにはどうすればよいですか。エキュメニカル対話において部分教会は『神の啓示に関する教義憲章』の原則をどのように実践していますか。姉妹教会とのエキュメニカルな議論の中で聖書は取り上げられていますか。エキュメニカル対話は神のことばにとってどのような役割を果たしますか。神のことばに関するエキュメニカルな一致点はどのようなものですか。聖書協会世界連盟との協力は可能ですか。聖書の使用に関する対立がありますか。

5．ユダヤ教徒との対話における神のことば

ユダヤ教徒との対話を優先課題としていますか。聖書に関するどのような一致点がそのために役立つでしょうか。聖書が反ユダヤ主義を煽るために用いられることがありますか。

6．諸宗教対話・異文化対話における神のことば

固有の聖典を有する宗教者と、キリスト教の聖書に基づいた対話を行っていますか。聖書が神の霊感によって書かれたことを信じない人が神のことばに触れることは可能ですか。神のことばは無神論者のためにも存在するでしょうか。すべての人にとって豊かな意味をもつ「大いなる体系」として聖書に近づくことがありますか。聖書を参照しつつ異文化対話を行ったことがありますか。キリスト教共同体がセクトに対抗するために助けとなる手段は何ですか。

結び

「キリストのことばがあなたがたのうちに豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい」（コロサイ3・16－17）。

信者の生活の中で神のことばを聞く

34　人が神と出会うには、みことばに熱心に耳を傾けることが不可欠です。人は、みことばに心を開き、みことばが心の中に生まれるようにすることによって、霊に従って生きるようになります。じつに、だれも神のことばの深みを究め尽くすことはできません。しかし、今述べた態度をとることによって初めて、みことばは人をとらえ、回心させます。そして、みことばの豊かさと秘密を見いださせ、視野を広げます。ついには自由と、人間としての完全な成長を約束します（エフェソ4・13参照）。聖書を知ることは教会に与えられたたまものの一つです。教会は、聖霊に心を開く信者にこの知識を伝えます。

証聖者聖マクシモス（580－662年）はいいます。「みことばを機械的に繰り返すだけで、聞こうとしないならば、いくらみことばを語っても、その人の行動はみことばを響かせることがありません。しかし、みことばを宣べ、かつそれを行うなら、みことばは悪魔を退け、人々の心の中に神を住まわせ、義のわざを進めることができます」(132)。そのため、人は単純さと神をあがめる祈りをもって、心の中で沈黙のうちに賛美をささげなければなりません。マリアが行ったように。おとめマリアは、自分が聞いた神のことばをすべて受けとめ、愛のうちにそれを生きたからです（申命記6・5、ヨハネ13・34－35参照）。こうして、信じる者は「弟子」となり、今や「神のすばらしいことば」（ヘブライ6・5）を味わうことができます。そのために、信じる者は神のことばを教会共同体の中で生き、近くの人にも遠くの人にも宣べ伝え、肉となったみことばであるイエスの招きのことばを実現します。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ1・15）。

質問一覧
（各章の終わりに掲げた質問の一覧）

序論についての質問

１．神のことばについての今回のシノドスに特に現代的な意味を与えるような、どのような「時のしるし」が皆様の国にありますか。人々はこのシノドスに何を期待していますか。

２．前回の聖体についてのシノドスと、神のことばについての今回のシノドスにはどのような関係がありますか。

３．皆様の部分教会で、聖書の体験や実践は行われていますか。それはどのようなものですか。聖書を研究するグループは存在しますか。それはどのようなもので、どんな活動をしていますか。

第１章についての質問

１．救いの歴史における神のことばに関する知識

啓示、神のことば、聖書、聖伝、教導職に関して、信者（小教区、修道会、運動団体）はどのように考えていますか。信者は神のことばのさまざまな意味の違いを理解していますか。イエス・キリストが神のことばの中心であることを理解していますか。神のことばと聖書はどのような関係にありますか。理解が難しいことは何ですか。その理由は何ですか。

２．神のことばと教会

神のことばに近づくこと――このことが、どのようにして、キリストのからだである教会に属することに関する認識を深め、教会の宣教への心からの参加を促しますか。神のことばと教会に関して、信者はどのように理解していますか。釈義と神学研究において、また信者が聖書に触れるとき、聖書と聖伝は適切に関係づけられていますか。信仰教育（カテケージス）は神のことばに基づいてなされていますか。聖書は十分に重視されていますか。神の

ことばの宣教における教導職の重要性と責務は認識されていますか。信仰に基づいて、真の意味で神のことばに耳を傾けていますか。明確にすべき点、強調すべき点は何ですか。

3．神のことばにおける教会の信仰のさまざまなしるし

『神の啓示に関する教義憲章』はどの程度受け入れられていますか。『カトリック教会のカテキズム』はどの程度受け入れられていますか。神のことばの使徒職において司教がもつ教導職としての特別な役割は何ですか。みことばの宣教において、叙階された奉仕者、司祭、助祭の果たす職務は何ですか（『教会憲章』25、28参照）。信者は神のことばと奉献生活の関係をどう理解していますか。将来の司祭の養成において神のことばをどのように用いることができますか。神の民（司祭、助祭、奉献生活者、信徒）の中で、神のことばに関するどのような教育が必要とされていますか。

4．神のことばとしての聖書

なぜ現代のキリスト信者は熱心に聖書を探究するのでしょうか。聖書は信仰生活にどのような影響を及ぼしますか。非キリスト者の中で聖書はどのように受け入れられていますか。知識人の中で聖書はどのように受け入れられていますか。聖書は常に正しく扱われていますか。広く見られる問題は何ですか。霊感のたまものと聖書の真理に関して、信者はどう理解していますか。信者は、聖書の霊的な意味が、神の意図した最終的な意味であることを理解していますか。旧約はどのように受け入れられていますか。福音のほうがよく読まれる場合、福音に関する知識と読み方は十分なものですか。現代、多くの人が「難しい」と考える聖書の箇所はどこですか。この問題にどう対応すればよいでしょうか。

5．神のことばへの信仰

信者は神のことばをどうとらえていますか。信者は深い信仰をもって神のことばに耳を傾け、神のことばによって信仰を新たにしようとしていますか。信者は何のために聖書を読んでいますか。信者は聖書を読むときに、どのような識別基準を用いていますか。

6．マリアと神のことば

なぜマリアは神のことばを聞くための模範また母なのですか。人々は神のことばを、マリアがなさったように受け入れ、生きていますか。どうすればマリアは信者にとって、神のことばを聞き、黙想し、生きるための模範となることができるでしょうか。

第 2 章についての質問

1．教会生活における神のことば

自分の教会共同体また信者の間で、神のことばはどの程度重視されていますか。どのような意味で神のことばはキリスト信者を養う糧となっていますか。キリスト教が「書物の上だけの宗教」に陥る危険はありますか。個人の生活の中で、また主日の信者の集いの中で、神のことばは敬われ、よく読まれていますか。週日に神のことばは敬われ、よく読まれていますか。典礼暦の特別な季節に神のことばは敬われ、よく読まれていますか。

2．神の民の教育における神のことば

自分の共同体や信者一人ひとりに対して、神のことばに関する教えを包括的かつ全体的に伝えるためにどのようなことが行われていますか。養成中の司祭、奉献生活者、共同体の奉仕者（カテキスタなど）は、それぞれの司牧的奉仕職における聖書の扱いについて適切な養成や、定期的な継続養成を受けていますか。信徒のための継続的な養成コースはありますか。

3．神のことば、典礼、祈り

信者は典礼と個人の祈りの中でどのように聖書に接していますか。信者はことばの典礼と感謝の典礼の関係をどのように理解していますか。感謝の祭儀で記念されるみことばと、キリスト信者の日常生活の関係をどのように理解していますか。神のことばは説教の中に真の意味で反映していますか。なすべき課題はどのようなものですか。ゆるしの秘跡の中で、神のことばを聞くことも同時に行われていますか。聖務日課の中で、神のことばを聞くこと、また神のことばとの対話は行われていますか。神のことばを聞き、それと対話することは、信徒の中でも行われていますか。神の民は聖書に触れる十分

な機会をもっていますか。

4．神のことば、福音宣教、信仰教育

第二バチカン公会議と教会の教導職の教えから見て、神のことばと信仰教育に関する積極的な側面と消極的な側面はどのようなものですか。信仰教育（キリスト教入信と継続養成）のさまざまなかたちの中で神のことばはどのように扱われていますか。教会共同体は、聖書に書かれた神のことばに十分な注意を払い、その研究を行っていますか。行っている場合、どのように行っていますか。さまざまな人（子ども、青少年、青年、成人）に対して、どのように聖書に関する入門教育が行われていますか。聖書に関するどのような入門講座が行われていますか。

5．神のことば、釈義、神学

神のことばは釈義と神学の魂となっていますか。「啓示されたみことば」としての性格は十分理解され、尊重されていますか。聖書に関する学問的研究は、適切な信仰の基盤によって促され、支えられていますか。聖書本文を扱う際の通常の方法はどのようなものですか。神学研究の中で聖書はどのような役割を果たしていますか。共同体の司牧的生活の中で聖書は十分考慮されていますか。

6．神のことばと信者の生活

神の民の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。聖職者の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。信徒の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。マリアの貧しく信頼に満ちた態度は「マリアの賛歌」の中に明らかに示されていますか。なぜ物質的な豊かさが神のことばを熱心に聞くための妨げとなるのですか。感謝の祭儀や他の典礼の中で、神のことばは信仰を伝えるための強力な手段となっていますか。あるいはなっていませんか。さまざまなキリスト信者が聖書に無関心だったり、積極的な関心をもたないのはなぜですか。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」は行われていますか。それはどのようなかたちで行われていますか。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」を推進する要因、あるいは妨げる要因はどのようなものですか。

第３章についての質問

１．現代世界における神のことばの宣教

司牧的経験からいって、神のことばを聞くことを促す要因、またそれを妨げる要因は何ですか。内面的な不安や、カトリック以外のキリスト教の諸教派からの刺激が信仰の刷新をもたらすことはありますか。世俗主義、この世のさまざまなメッセージからの絶え間ない攻撃、キリスト教の教えに反する生活様式などが神のことばを聞くことを妨げることがありますか。こうした諸問題がある中で、神のことばをどのように宣べ伝えるべきですか。

２．聖書に容易に近づく機会

「キリスト信者には、聖書に近づく多くの機会が与えられなければならない」という『神の啓示に関する教義憲章』22のことばはどの程度事実と合致していますか。おおよそのものでよいので、この点に関する統計資料を示してください。個人また共同体全体において聖書のみことばを聞くことは多くなっていますか。

３．聖書の普及

教区共同体における聖書使徒職はどのように行われていますか。教区は司牧計画を立てていますか。司牧計画を実行する人は適切な養成を受けていますか。人々はカトリック聖書連盟について知っていますか。みことばと出会うためのどのような手段が用いられていますか（聖書研究、みことばによる祈りの会、聖書講座、聖書の日、「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」）。キリスト信者がもっともよく用いる手段はどれですか。どのような翻訳聖書（全訳・部分訳）がありますか。家庭において聖書はどのように読まれていますか。世代（子ども、青少年、青年、成人）に応じてどのような養成が行われていますか。どのようなマス・メディアの手段が使われていますか。どの手段が重要だと考えますか。

４．エキュメニカル対話における神のことば

現代世界でみことばを宣べ伝えるには、生活のあかしの一貫性が必要です。

現代のキリスト信者の生活の中で、こうした生活のあかしの一貫性は見られますか。それを促進するにはどうすればよいですか。エキュメニカル対話において部分教会は『神の啓示に関する教義憲章』の原則をどのように実践していますか。姉妹教会とのエキュメニカルな議論の中で聖書は取り上げられていますか。エキュメニカル対話は神のことばにとってどのような役割を果たしますか。神のことばに関するエキュメニカルな一致点はどのようなものですか。聖書協会世界連盟との協力は可能ですか。聖書の使用に関する対立がありますか。

5．ユダヤ教徒との対話における神のことば

ユダヤ教徒との対話を優先課題としていますか。聖書に関するどのような一致点がそのために役立つでしょうか。聖書が反ユダヤ主義を煽るために用いられることがありますか。

6．諸宗教対話・異文化対話における神のことば

固有の聖典を有する宗教者と、キリスト教の聖書に基づいた対話を行っていますか。聖書が神の霊感によって書かれたことを信じない人が神のことばに触れることは可能ですか。神のことばは無神論者のためにも存在するでしょうか。すべての人にとって豊かな意味をもつ「大いなる体系」として聖書に近づくことがありますか。聖書を参照しつつ異文化対話を行ったことがありますか。キリスト教共同体がセクトに対抗するために助けとなる手段は何ですか。

注

1――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』2（*Dei Verbum*）。

2――ドイツのルペルトゥス『聖霊のわざについて』（Rupertus Abbas Tuitiensis, *De operibus Spiritus Sancti*, I, 6: *SC* 131, 72-74）。

3――教皇レオ十三世回勅『プロヴィデンティッシムス・デウス（1893年11月18日）』（*Providentissimus Deus: DS* 1952 [3293]）、教皇ベネディクト十五世回勅『スピリトゥス・パラクリトゥス（1920年9月15日）』（*Spiritus Paraclitus: AAS* 12 [1920], 385-422）、教皇ピオ十二世回勅『ディヴィノ・アフランテ・スピリトゥ（1943年9月30日）』（*Divino afflante Spiritu: AAS* 35 [1943], 297-325）参照。

4――世界代表司教会議第2回臨時総会最終報告『神のことばで世の救いのためにキリストの秘義を祝う教会（1985年12月7日）』（Synodus Episcoporum, Relatio finalis Synodi episcoporum *Exeunte cœtu secundo*: Ecclesia sub verbo Dei mysteria Christi celebrans pro salute mundi: *Enchiridion del Sinodo dei Vescovi*, 1, Bologna 2005, 2733-2736）。

5――教皇ベネディクト十六世「『啓示憲章』発布40周年国際会議参加者へのあいさつ（2005年9月16日）」（Ad Conventum Internationalem *La Sacra Scrittura nella vita della Chiesa: AAS* 97 [2005], 957）。教皇パウロ六世使徒的書簡『スンミ・デイ・ヴェルブム（1963年11月4日）』（*Summi Dei Verbum: AAS* 55 [1963], 979-995）、教皇ヨハネ･パウロ二世「一般謁見（1985年5月22日）」（*L'Osservatore Romano* [23 maii 1985], 6）、同「教会における聖書解釈について（1993年4月23日）」（*Discorso sull' interpretazione della Bibbia nella Chiesa: L'Osservatore Romano* [25 aprilis 1993], 8-9）、教皇ベネディクト十六世「お告げの祈りのことば（2005年11月6日）」（*L'Osservatore Romano* [7-8 novembris 2005], 5）参照。

6――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』21。

7――聖ヒエロニモ『コヘレトの言葉注解』（S. Hieronymus, *Commentarius in Ecclesiasten,* 313: *CCL* 72, 278）。

8――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』22。

9――教皇庁聖書委員会『キリスト教徒の聖書におけるユダヤの民とその聖書（2001年5月24日）』（Pontificia Commissio Biblica, *Le peuple juif et ses*

Saintes Écritures dans la Bible chrétienne: Enchiridion Vaticanum 20, Bologna 2004, pp. 507-835）参照。

10――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』2。

11――同。

12――同。

13――同参照。

14――『ローマ・ミサ典礼書（規範版第3版、2002年）』総則368。

15――教皇パウロ六世『第4回フランス宗教教育会議（1964年4月1－3日）への手紙』（*Lettre au IV*ème *Congrès national français de l'enseinement religieux: La Documentation Catholique* nº 1422 [19.04.1964], p. 503）。

16――大聖グレゴリオ『道徳論』（S. Gregorius Magnus, *Moralia,* 20, 3: *CCL* 143A, 1050）。

17――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』3。

18――聖エフラエム『楽園についての賛歌』（S. Ephræm, *Hymni de paradiso,* V, 1-2: *SC* 137, 71-72）。

19――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』4。

20――聖イレネオ『異端反駁』（S. Irenæus, *Adversus Hæreses,* IV, 34, 1: *SC* 100, 847〔小林稔訳、『キリスト教教父著作集3／II　エイレナイオス　異端反駁IV』教文館、2000年、128頁〕）。

21――オリゲネス『ヨハネ福音書注解』（Origenes, *Commentarii in Johannem,* V, 5-6: *SC* 120, 380-384〔小高毅訳、『ヨハネによる福音書注解』創文社、1984年、166－167頁〕）。

22――聖ベルナルド『「天使ガブリエルは……遣わされた」（ルカ1章26節以下）についての説教』（S. Bernardus, *Super Missus est,* Homilia IV, 11: *PL* 183, 86）参照。

23――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』3。

24――同24参照。

25――同4参照。

26――同5参照。

27――同。

28――同2、5参照。

29――同2参照。

30――同21参照。
31――イサアク・デ・ステラ『説教』（Isaac de Stella, *Sermo* 51: *PL* 194, 1862-1863; 1865）。
32――聖アンブロジオ『ルカ福音書注解』（S. Ambrosius, *Expositio Evangelii secundum Lucam,* 2, 19: *CCL* 14, 39）参照。
33――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』7。
34――同26参照。
35――同8。同21参照。
36――『カトリック教会のカテキズム』825参照。
37――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』8。
38――同7。
39――同10。
40――同9。トリエント公会議教令『聖書と使徒の伝承について』（Decretum de libris sacris et de traditionibus recipiendis: *DS* 1501）参照。
41――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』10。
42――同8。
43――同21。
44――『カトリック教会のカテキズム』120参照。
45――J. Ratzinger, *Un tentativo circa il problema del concetto di tradizione:* K. Rahner - J. Ratzinger, *Rivelazione e Tradizione,* Brescia 2006, 27-73参照。
46――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』9。同24参照。
47――同21。
48――同11。
49――教皇庁聖書委員会『教会における聖書の解釈（1993年4月15日）』（Pontificia Commissio Biblica, *L'interprétation de la Bible dans l'Église,* cap. I, C; D: Enchiridion Vaticanum 13, Bologna 1995, pp. 1555-1733）参照。
50――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』第3－第6章。
51――教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『信仰と理性（1998年9月14日）』13－15（*Fides et Ratio: AAS* 91 [1999], 15-18）。
52――教皇庁聖書委員会『教会における聖書の解釈（1993年4月15日）』（Pontificia Commissio Biblica, *L'interprétation de la Bible dans l'Église,*

cap. I, F: Enchiridion Vaticanum 13, Bologna 1995, pp. 1628-1634）参照。

53――Cf. *ibidem,* cap. IV, A; B, pp. 1703-1715.

54――『カトリック教会のカテキズム』117参照。

55――教皇庁聖書委員会『教会における聖書の解釈（1993年4月15日）』（Pontificia Commissio Biblica, *L'interprétation de la Bible dans l'Église,* cap. I: Enchiridion Vaticanum 13, Bologna 1995, pp. 1568-1634）参照。

56――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』12。『カトリック教会のカテキズム』109－114参照。

57――教皇ベネディクト十六世「スイス司教団への演説（2006年11月7日）」（*Discorso ai Vescovi della Svizzera: L'Osservatore Romano* [10 novembris 2006], 4）。

58――『朗読聖書の緒言（規範版第2版、1981年）』8。

59――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』15－16参照。

60――聖アウグスチヌス『七書の諸問題』（S. Augustinus, *Quæstiones in Heptateucum,* 2, 73: *PL* 34, 623）参照。第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』16参照。

61――大聖グレゴリオ『エゼキエル書講話』（S. Gregorius Magnus, *Homiliæ in Hiezechielem,* I, 6, 15: *CCL* 142, 76）。

62――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』18－19、教皇ヨハネ・パウロ二世「一般謁見（1985年5月22日）」（*L'Osservatore Romano* [23 maii 1985], 6）参照。

63――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』1。

64――同21。

65――大聖グレゴリオ『書簡摘要』（S. Gregorius Magnus, *Registrum Epistolarum,* V, 46, 35: *CCL* CXL, 339）。

66――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』21参照。

67――同。

68――『カトリック教会のカテキズム』115－119参照。

69――カルトゥジア会のグイゴ二世『修道院生活者の梯子あるいは祈りの方法についての論考』（Guigus II Prior Carthusiæ, *Scala claustralium sive*

tractatus de modo orandi: PL 184, 475-484）。

70――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』12。

71――同23。

72――『朗読聖書の緒言（規範版第2版、1981年）』9。

73――ダマスコのペトロス『フィロカリア』（Petrus Damascenus, *Liber* II, vol. III, 159: *La Filocalia,* vol. 3º, Torino 1985, 253）。

74――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』21。

75――教皇庁聖職者省『カテケジス一般指針（1997年8月15日）』47（Congregatio Pro Clericis, *Directorium generale pro catechesi:* Enchiridion Vaticanum 16, Bologna 1999, pp. 663-665）参照。

76――第二バチカン公会議『典礼憲章』35（*Sacrosanctum Concilium*）。

77――同7。

78――同24。

79――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』21。

80――教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに（2001年1月6日）』36（*Novo Millennio Ineunte: AAS* 93 [2001], 291）。

81――『朗読聖書の緒言（規範版第2版、1981年）』参照。

82――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』24。

83――教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに（2001年1月6日）』39（*Novo Millennio Ineunte: AAS* 93 [2001], 293）。

84――教会法第762条参照。

85――教皇庁聖職者省『カテケジス一般指針（1997年8月15日）』第1部第2章（Congregatio Pro Clericis, *Directorium generale pro catechesi: Enchiridion* Vaticanum 16, Bologna 1999, pp. 684-708）参照。

86――このことと関連して、民間信心と神のことばの関係に注目する教皇庁典礼秘跡省『民間信心と典礼に関する原則とガイドライン（2002年4月9日）』87－89（Congregatio de Cultu Divino et Disciplina Sacramentorum, *Direttorio su pietà popolare e liturgia*）を考慮すべきである。

87――教皇庁聖職者省『カテケジス一般指針（1997年8月15日）』127（Congregatio Pro Clericis, *Directorium generale pro catechesi:* Enchiridion Vaticanum 16, Bologna 1999, p. 794）。

88――同。
89――教皇ヨハネ・パウロ二世使徒憲章『ゆだねられた信仰の遺産（1992年10月11日）』4（*Fidei Depositum: AAS* 86 [1994], 117）参照。
90――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』24。教皇レオ十三世回勅『プロヴィデンティッシムス・デウス（1893年11月18日）』第2部末（*Providentissimus Deus: ASS* 26 [1893-94], 269-292）、教皇ベネディクト十五世回勅『スピリトゥス・パラクリトゥス（1920年9月15日）』第3部（*Spiritus Paraclitus: AAS* 12 [1920], 385-422）参照。
91――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』12、同『教会の宣教活動に関する教令』22（*Ad Gentes*）参照。
92――第二バチカン公会議『司祭の養成に関する教令』16（*Optatam Totius*）、教会法第252条、東方教会法第350条参照。
93――教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『信仰と理性（1998年9月14日）』序文（*Fides et Ratio: AAS* 91 [1999], 5）。
94――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』23。
95――聖ヒエロニモ『イザヤ書注解』（S. Hieronymus, *Commentarii in Isaiam,* Prol.: *PL* 24, 17）。
96――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』25。
97――教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに（2001年1月6日）』39（*Novo Millennio Ineunte: AAS* 93 [2001], 293）。
98――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』25。
99――聖アウグスチヌス『詩編注解』（S. Augustinus, *Enarrationes in Psalmos,* 85, 7: *CCL* 39, 1177）。
100――教皇庁聖書委員会『教会における聖書の解釈（1993年4月15日）』（Pontificia Commissio Biblica, *L'interprétation de la Bible dans l'Église,* IV, C. 3: Enchiridion Vaticanum 13, Bologna 1995, p. 1725〔和田幹男訳、「教会における聖書の解釈」、英知大学キリスト教文化研究所『キリスト教文化研究所紀要』第16巻第1号、2001年、313頁〕）。
101――カルトゥジア会のグイゴ二世『修道院生活者の梯子あるいは祈りの方法についての論考』（Guigus II Prior Carthusiæ, *Scala claustralium sive tractatus de modo orandi: PL* 184, 475-484）参照。
102――第二バチカン公会議『司祭の養成に関する教令』4、教皇ヨハネ・パ

ウロ二世シノドス後の使徒的勧告『現代の司祭養成（1992年3月25日）』47（*Pastores Dabo Vobis: AAS* 84 [1992], 740-742）参照。

103――教皇ベネディクト十六世「ローマとラツィオ州の青年との集会における講話（2006年4月7日）」（*Incontro con i giovani romani: L'Osservatore Romano* [7 aprilis 2006], 5）、「2006年世界青年の日メッセージ（2006年2月22日）」（*L'Osservatore Romano* [27-28 februarii 2006], 5）。

104――教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに（2001年1月6日）』39（*Novo Millennio Ineunte: AAS* 93 [2001], 293）。

105――教皇ベネディクト十六世「『啓示憲章』発布40周年国際会議参加者へのあいさつ（2005年9月16日）」（Ad Conventum Internationalem *La Sacra Scrittura nella vita della Chiesa: AAS* 97 [2005], 957）。

106――教皇ベネディクト十六世「2006年世界青年の日メッセージ（2006年2月22日）（*L' Osservatore Romano* [27-28 februarii 2006], 5）。

107――教皇ベネディクト十六世「『啓示憲章』発布40周年国際会議参加者へのあいさつ（2005年9月16日）」（Ad Conventum Internationalem *La Sacra Scrittura nella vita della Chiesa: AAS* 97 [2005], 957）。

108――教皇ヨハネ・パウロ二世シノドス後の使徒的勧告『奉献生活（1996年3月25日）』94（*Vita Consecrata: AAS* 88 [1996], 469-470）参照。

109――聖チプリアノ『ドナトゥスに送る』（S. Cyprianus, *Ad Donatum,* 15: *CCL* IIIA, 12〔吉田聖訳、「ドナートゥスに送る」、『南山神学』第24号、2000年、199頁〕）。

110――教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに（2001年1月6日）』40（*Novo Millennio Ineunte: AAS* 93 [2001], 294）。

111――教皇ベネディクト十六世回勅『神は愛（2005年12月25日）』（*Deus Caritas Est: AAS* 98 [2006], 217-252）参照。

112――同20－25（*AAS* 98 [2006], 233-237）参照。

113――聖アウグスチヌス『キリスト教の教え』（S. Augustinus, *De doctrina Christiana,* I, XXXV, 39; XXXVI, 40: *PL* 34, 34〔加藤武訳、『アウグスティヌス著作集6』教文館、1988年、70－71頁〕）。

114――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』22。教会法第825条、東方教会法第654条、第662条第1項参照。

115――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』25参照。

116――教皇庁聖職者省『カテケジス一般指針（1997年8月15日）』160－162（Congregatio Pro Clericis, *Directorium generale pro catechesi:* Enchiridion Vaticanum 16, Bologna 1999, pp. 845-847）参照。

117――第二バチカン公会議『修道生活の刷新・適応に関する教令』6（*Perfectæ caritatis*）。

118――聖アンブロジオ『書簡』（S. Ambrosius, *Epistula* 49, 3: *PL* 16, 1154B）参照。

119――教皇ヨハネ･パウロ二世シノドス後の使徒的勧告『奉献生活（1996年3月25日）』94（*Vita Consecrata: AAS* 88 [1996], 469）。

120――第二バチカン公会議『エキュメニズムに関する教令』21（*Unitatis Redintegratio*）参照。

121――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』22参照。

122――教皇ヨハネ･パウロ二世回勅『キリスト者の一致（1995年5月25日）』（*Ut unum sint: AAS* 87 [1995], 921-982）。教皇庁キリスト教一致推進評議会『エキュメニズム新指針』(Pontificium Consilium ad Unitatem Christianorum Fovendam, *Directorium œcumenicum noviter compositum: AAS* 85 [1993], 1039-1119）も参照。

123――教皇ベネディクト十六世「キリスト教一致祈祷週間を終える夕の祈りでの講話（2007年1月25日）」（*Allocutio: Il mondo attende la testimonianza comune dei cristiani: L'Osservatore Romano* [27 ianuarii 2007], 4-5）。

124――第二バチカン公会議『教会の宣教活動に関する教令』22、同『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』2－4（*Nostra Ætate*）、教皇庁教理省宣言『主イエス――イエス・キリストと教会の救いの唯一性と普遍性について（2000年8月6日）』20－22（Congregatio pro Doctrina Fidei, *Declaratio de Iesu Christi Ecclesiæ unicitate et universalitate salvifica Dominus Iesus: AAS* 92 [2000], 761-764）参照。

125――教皇ヨハネ･パウロ二世「シンポジウム『キリスト教の領域における反ユダヤ主義の起源』参加者へのあいさつ（1997年10月31日）」（*Ai partecipanti all'incontro di studio su Radici dell'antigiudaismo in ambiente cristiano: Insegnamenti di Giovanni Paolo II*, 20/2, Libreria Editrice

Vaticana, Città del Vaticano 2000, 725）。

126――教皇庁聖書委員会『キリスト教徒の聖書におけるユダヤの民とその聖書（2001年5月24日）』（Pontificia Commissio Biblica, *Le peuple juif et ses Saintes Écritures dans la Bible chrétienne:* Enchiridion Vaticanum 20, Bologna 2004, pp. 507-835）。

127――第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』14－16参照。

128――教皇ベネディクト十六世「2006年世界平和の日メッセージ――平和は真理のうちに（2005年12月8日）」（*Insegnamenti di Benedetto XVI*, I, Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano 2006, 954-962）、同「2007年世界平和の日メッセージ――平和の中心である人間の人格（2006年12月8日）」（*L'Osservatore Romano* [13 decembris 2006], 4-5）参照。

129――教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『要理教育（1979年10月16日）』53（*Catechesi Tradendæ: AAS* 71 [1979], 1320）。

130――第二バチカン公会議『現代世界憲章』4（*Gaudium et Spes*）。

131――同11。

132――証聖者聖マクシモス『神学とオイコノミアについての二〇〇の断章』（S. Maximus Confessor, *Capitum theologicorum et œconomicorum duæ centuriæ,* IV, 39: *PG* 90, 1084）。

訳注

1――「影響作用史」（Wirkungsgeschichte）は、ドイツの現代哲学者H・G・ガダマー（Hans-Georg Gadamer 1900－2002年）が『真理と方法』（*Wahrheit und Methode* 1960年〔邦訳『真理と方法Ⅰ』轡田収ほか訳／『真理と方法Ⅱ』轡田収・巻田悦郎訳、法政大学出版会、1986／2008年〕）で述べた解釈学の概念。過去が過去との断絶に対する歴史的意識にもかかわらず、依然としてわれわれにいつもすでに語りかけ、働きかけていること。

2――「大いなる体系」（Great Code）は、現代カナダの文学批判理論家ノースロップ・フライ（Northrop Frye 1912－1991年）が『大いなる体系』（*The Great Code: The Bible and Literature* 1982年〔邦訳『大いなる体系――聖書と文学』伊藤誓訳、法政大学出版局、1995年〕）で述

べた語。本書の中でフライは聖書を神話という大いなる体系として位置づけた。

略号

AAS　*Acta Apostolicæ Sedis*
ASS　*Acta Sanctæ Sedis*
CCL　*Corpus Christianorum Series Latina*
DS　*H. Denzinger-A. Schönmetzer, Enchiridion Symbolorum. Definitionum et Declarationum de rebus fidei et morum*
PG　*Patrologia Græca*
PL　*Patrologia Latina*
SC　*Sources Chrétiennes*

資料 2

「教会生活と宣教における神のことば」
世界代表司教会議第12回通常総会
（2008年10月5日～26日）
提題解説（Lineamenta）の質問に対する回答

第一部

日本カトリック司教協議会

《提題解説の質問に対する回答について》

日本カトリック司教協議会は、提題解説とその質問全体を考慮した結果、質問のすべてに答えるよりも、次回シノドスのテーマに関して、現在もっとも重要かつ緊急と思われる点を提示し、それらについて重点的にシノドスで討議されることを要望する。なぜなら、世界レベルの会議であるシノドスは、現代の教会に共通する課題を取り上げ、それらについて全世界の教会で共通理解をもち、実現していくことを目指すべきと考えるからである。

したがって、日本カトリック司教協議会としては、この第一部を公式回答とし、日本の教会全体から得られた回答を要約したものを第二部として提示することとする。なお、この第一部は、提題解説の序論5番のシノドスの目的にいくらか呼応している。

《提言》

1. 聖書の統合的理解を目指す

シノドスは、旧約聖書と新約聖書のつながり、旧約聖書の難解な箇所の真の意味の読み取り、啓示の発展を考慮した聖書全体の明快な説明などについて、世界的視野で指導し、理解を促す必要がある。啓示、教導職、信条、典礼との有機的関係も考える必要がある。したがって、「聖書解釈学の適当な方法を奨励すること」（序論5番）も大切である。

2. 信仰教育（カテケージス）と聖書の関係

教会はかつて教義の証明のために聖書を単に援用していた嫌いがある。またこれまでは要理教育が重要視されてきた（その点『カトリック教会のカテキズム』は聖書と聖伝とのつながりを考慮し、聖書と要理を統合した理想のかたちに近づけようとしていると思われる）。しかし、これからは信仰を支えるためにまずは聖書と向き合うという姿勢が大切であろう。ところが、現段階ではまだ聖書を軸とした要理教育はまとめ上げられていない。信仰宣言の根拠づけを聖書で補強するのではなく、聖書を出発点として信仰に向き合うよう指導することが今後の課題である。ただし、聖書が典礼や教会の教えと歴史の中で理解されてきたことも忘れてはならず、聖書偏重は避けるべきである。

3. 生活と聖書の関係

キリスト者は、一般的にまだ、信仰を生きるために聖書を十分活かしているとはいえない。レクチオ・ディヴィナだけでは不十分であり、みことばを生活と結びつけながら理解し、それを互いに分かち合い、生活に生かすことが重要である。現実の中に神の働きがあるということを読み取ることが重要なので、もっと自分自身で読み取り、伝えていかなければならないだろう。聖書が信者の信仰生活に浸透し、それを生かすようになるためには具体的にどうすればよいか、これはこれからも継続して取り組むべき大きな課題である。

4.「世界の貧しい人に慰めと希望を与えること」

これは、提題解説の序論5番でシノドスの主要な目的の一つして挙げられているが、本文に反映されていない。貧困問題は現代世界の深刻な問題の一つである。全世界の教会の実践の中から吸い上げられた回答をもとにして、シノドスで、聖書が苦しむ人、悩む人、貧しい人にとって真に慰めと希望になるための具体策が示されることを求める。

5. 諸宗教対話における聖書

2006年FABC主催で開催された「アジア宣教大会」のテーマは「アジアにおけるイエスの物語“The Story of Jesus in Asia”」であった。この内容は、

「生活の中で、イエスをどう語るか」、「他の宗教を信じている人の中でイエスをどう語るか」、「アジアの文化の中でイエスをどう語るか」という3つの主題で深められた。アジアの諸宗教と諸文化およびアジアの人々の生活の中で、キリスト教経典としての聖書、「教祖」としてのキリスト、キリスト教教義などを前面に出すのではなく、「イエスの物語を語る」という方法で、より普遍的に人間性の根源に訴えることが大切であると思われる。これに関連して、「福音宣教とインカルチュレーションを正しく導くこと」（序論5番）もシノドスの重要な務めであると考える。

第二部

N. B.

⑴ 日本のカトリック教会は、日本人の信者約45万人、外国籍信者約50万人から成るが、合わせても全人口の1％に満たない。しかし、460年近い歴史、学校教育、さまざま福祉活動などによって日本社会に少なからず影響を与えてきた。

⑵ 本回答は、①16教区のうち14の教区、②日本カトリック管区長協議会（男子）および ③日本女子修道会総長管区長会から提出されたものをシノドス代表がまとめ、特別臨時司教総会（2007年10月5日）において確認されたものである。しかし、これは、司教協議会の公式回答ではなく、日本の教会の声をある程度反映した回答である。

序論　なぜ神のことばについてのシノドスを行うのか

序-1　シノドスに現代的な意味を与える「時のしるし」とシノドスへの期待

A. 時のしるし

⑴ 日本社会：(a) 世俗主義、消費主義、IT革命。(b) 少子高齢化、自殺や殺傷、離婚や家庭内暴力、いじめ、心の病の増加、環境保全。(c) グローバル化の中での市場原理主義、能率優先、弱者排除の論理、国内経済格差の拡大、ワーキング・プア。(d) 日米軍備再編と改憲の動き、平和運動、テロ対策問題。(e) 多文化共生、絶対神の不在、相対主義、教育環境の不具合。(f) ニューエイジやセクトへの関心、神を知らない人間・熟年・高齢者による心の拠

りどころ、真の解放・救いの希求。聖書への興味の高まり。
⑵ 教会内：(a) 主日ミサ参加者の減少、青少年の教会離れ、召命の減少、信仰と生活および教会と社会の遊離、信徒の役割の増大。(b) 聖書に親しむ人の増加、聖書の普及、聖書の講座・勉強会・分かち合いの増加。司祭や信徒リーダーの養成が急務。殉教の意義の理解。

B. シノドスへの期待

※ ほとんどの信者がシノドスということばを知らない。
⑴ 現代の教会が抱える諸問題の原因について討議し、今回の提題の内容をすべての信者が実践し身につくような施策と具体的なプログラムを立案していただきたい。
⑵ 神のことばを聞き分かち合う運動が教会の中に定着するために、信徒の生活における聖書の位置づけを明確にし、神のことばに基づいたキリスト者としての生き方について具体的指針を出し、信徒が積極的に神のことばを伝えていくよう励ます。
⑶ 現代の人々、特に青少年や苦しみ傷ついた人たちに、神のことばが人生の根源的な意味と希望を与える力となるように､具体的な司牧的指針を示す。
⑷ 非キリスト教的世界のただ中にある宣教地の教会が宣教司牧を推進する上での示唆。
⑸ 聖書のとらえ方や解釈に関する教会の明確な公式見解を全信者に浸透させる文書。

序-2　前回の聖体についてのシノドスと今回のシノドスとの関係

⑴ 聖体と神のことばは、ミサの構造そのものが示しているように、ともに、復活した主の現存を教会に体験させ、教会を生かし変えていく糧であるから、不可分の関係にある。その意味で両シノドスは補完関係にあり、従来の「秘跡中心」から「聖体と聖書中心」へバランスよく移行する教会の動きを推進することになる。
⑵ 聖体は信仰者だけに与えられるが、神のことばは信仰者以外の人にも与えられ、大きな影響を及ぼす。教会は、聖体に養われて、神のことばを告げ知らせる使命をもつ。

序-3　聖書の体験や実践、聖書を研究するグループ

A. 聖書の体験や実践

⑴ レベル別：個人、家庭、小教区、教区、修道会、修道院、カトリック学校や施設など。

⑵ グループ別：信徒、小・中・高生、女性、高齢者、求道者、幼稚園や学校の職員や保護者、諸運動のグループなど。

⑶ 種類：(a) 個人：聖書通読、聖書愛読マラソン、写聖。(b) 祈りの集いと分かち合い：Lectio Divina、聖書100週間、聖書深読会、セブン・ステップ（AsIPA［=Asian Integral Pastoral Approach　アジアの総合的司牧アプローチ］）。(c) 勉強会：司祭の指導による主日の朗読聖書を題材とするなど。(d) 講座：聖書講座、Lectio Divina入門講座、キリスト教入門講座、学校での宗教授業。(e) 黙想会やみことばの祭儀。(f) グループ・ミーティング：傾聴のトレーニング、「神のことばを伝えるための委員会」企画の集会や研修会など。(g) 病者訪問、少年院・刑務所慰問、ホームレス援助、アルコール依存症者援助などの実践。(h) 聖地巡礼。

B. 聖書研究

⑴ 初歩的な研究をする小さなグループは多い。教区レベルでの聖書研究グループのない教区もある。

⑵ 全国的に、幼稚園・学校の保護者、信徒同士、修道共同体で司教、司祭、専門家とともに行っている。『ゼーヘル』（毎日の聖書朗読の手引き）を用いた勉強会。教会学校リーダーによる聖書の研究と分かち合い。

第1章　啓示、神のことば、教会

1-1　救いの歴史における神のことばに関する知識

A. 啓示、神のことば、聖書、聖伝、教導職に関する信者の理解

⑴ 多くの信者が、それらが人々を神へ導くために大切であると理解している。しかし、かならずしもその一つひとつを明確に意識し、日常の信仰生活に役立てているとはいえない。

⑵ 聖書や聖伝などは、個人や共同体が出会う困難、苦しみ、救いへの渇望が理解され、共感されるところから出発しなければ、深く理解されることは

ない。
⑶ 聖伝に基づく聖書の理解を絶えず心がけ、教会全体の理解を具体的に進める方法を考える必要がある。

B. 信者による神のことばのさまざまな意味の違いの理解
⑴ 信仰教育、日常生活の中での祈り、みことばに触れる体験によって理解が異なる。

C. イエス・キリストが神のことばの中心であることの理解
⑴ 多くの信者は、このことをある程度理解しているが、イエスの生き方とみことばを自分の生活の中心に据えることがうまくできていない。

D. 神のことばと聖書の関係
⑴ イエス・キリストは神のことばそのものであり、神の霊感によって書かれた聖書はこのイエス・キリストを告げ知らせ、救いの恵みをもたらすものである。
⑵ 一般的に神のことばとして旧約聖書を理解するのは難しい。聖書の時代背景や文化等を知るための努力と勉強が必要であり、生活に生かすために祈りと努力が大切。

1-2　神のことばと教会
A. 神のことばと教会の一員としての自覚および宣教への参加との関係
⑴ 教会共同体とともに神のことばを聞き、それを実生活に具体化する勧めを説教で聞くとき　キリストのからだである教会への帰属意識を深めるし、その使命である宣教についても連帯責任を感じざるをえなくなる。これは日本教会の課題でもある。
⑵ 信者は「神のことばで生かされ生きる教会のあり方」をどのように具体的に示してよいか難しいと感じている。信徒の宣教参加のためにも、司牧的配慮と司祭の指導が不可欠。

B. 聖書と聖伝の関係
⑴ 一般に、聖書と聖伝は当然尊敬をもって受け入れられ、適切に関係づけ

られているが、聖伝について基本的な教育はまだ十分になされていない。
⑵ 教導職には、教会の伝統的な解釈や意味、教父たちや神学者たちが教会の歴史の中で教えてきたことに基づいて聖書を読み深めることが重要であることを教える務めがある。

C. カテケージスにおける聖書の利用
⑴ 一般に、信仰教育において聖書は重視されており、神のことばに基づいてなされている。
⑵ 司牧者は、信仰教育における聖書の重要性をさらに認識し、カテキスタを養成すべき。
⑶ 要理問答形式あるいは聖書の勉強のどちらかに偏らないようにすべきである。

D. 宣教における教導職の重要性
⑴ 教導職の重要性と責務は一般信徒にもかなり認識されていると考えられる。自己流の読み方を避けるために、司牧者による適切な個人指導や全体を対象とした講座が必要。
⑵ 信徒が求めているものにこたえられるような教導職の責務の果たし方が求められている。
⑶ 教導職は、権威主義的にならず、文書も、高圧的ではなく平易な文章で提示すべき。

E. 明確にすべき点、強調すべき点
⑴ みことばは「読む、見る」態度より「聞く」態度で受けとるべきもの。
⑵ キリスト教が道徳と化すことを避けるべきである。神のことばが魂に働きかけ、いのちの力となることを実感することのできるはっきりとした養成がまず必要である。
⑶ 明確にすべき点は「キリスト＝啓示の完成」、「教会」と「聖書」と「聖伝」との関係。

1-3　神のことばにおける教会の信仰のさまざまなしるし

A.『神の啓示に関する教義憲章』の受容状況

⑴ 『神の啓示に関する教義憲章』は、至るところで聖書に対する関心を高めたが、聖書の専門家が不足している。
⑵ 信徒はほとんど読んでおらず、学んだはずの司祭もあまり実践していないと思われる。

B.『カトリック教会のカテキズム』の受容状況

⑴ 司牧者が呼びかけて家庭に一冊そろえるよう努力している。ただし、利用は一部に限られている。一般の信者や求道者には分量と内容の難しさのため敬遠されがちである。
⑵ 日本司教協議会発行の『カトリック教会の教え』のほうが多く読まれている。

C. 神のことばの宣教における叙階された奉仕者（司教、司祭、助祭）の役割

⑴ 叙階された奉仕者は、生活に密着した福音の読み方を学び、黙想と実践によっていわば福音を体験し、信者にわかりやすく、生活に響くように伝える。
⑵ 司教は、教皇との一致のうちに「神のことば」を権威をもって解釈し、その基本的な要素をできるだけ平易なことばで説明し、信者が日々みことばに生きるよう導き促す。

D. 神のことばと奉献生活の関係

⑴ 信者は、神のことばを徹底的に生きる人が奉献生活者であると理解している。
⑵ 奉献生活者は「神のことば」であるキリストとそのからだである教会に徹底的に奉献され、永続的に結ばれることによって、神の恵みと永遠の救いの喜びをあかしする者。

E. 司祭養成における神のことば

⑴ 神学校では、聖書の勉強以外に定期的にみことばの分かち合いをしている。
⑵ 神学生は、現在の聖書研究に沿って学び、神のことばの釈義を今の自分

に生かす具体的な解釈をし、神のことばに生かされ、キリストとの出会いを深めていく体験をすべき。
⑶ 神学生には、特に信徒・修道者・司祭が神の前に同じ立場でともにみことばを分かち合う方法と実践を習慣づけることが重要である。
⑷ 神学生は、神のことばで人々を養う人となってほしい。現代に生きる信徒に世界的視野、特に正義と平和問題にも視野を広げられる指導ができるようになる必要もある。

F. 神の民における神のことばに関する教育
⑴ キリストを中心とした信仰共同体をつくるために、神の民のおのおのが自分の役割を果たしつつ、民全体が、神のことばに生かされ、熱誠と喜び、励まし、必要な対話、議論、希望に力づけられるようなコミュニケーションを促進させる必要がある。
⑵ 神の民の中での神のことばに関する養成は、司教の責任のもと、継続的、組織的、有機的、体系的であることが必要である。

1-4　神のことばとしての聖書

A. 現代のキリスト信者が熱心に聖書を探求する理由
⑴「聞く」だけの時代から「自由に読める」今、聖書を学び、心の糧を得たいとの渇望。
⑵ 種々の問題と向き合い、現実を深く生きているからこそ、みことばに真摯に耳を傾ける。戦争や貧富の格差、人生の意味を真剣に考え、神のみ旨を知るために聖書を探求する。
⑶ 聖書を重視する「分かれた兄弟たち」との出会いと対話を通して、カトリック信者は、自分たちもすでにもっているみことばの宝庫という遺産を再発見しつつある。

B. 聖書の信仰生活に対する影響
⑴ 聖書は生き方の根源を示し、信仰生活を鼓舞し、力と糧を与えている。
⑵ 奉献生活者の生活形態はみことばの影響を一日中持続させるためにあるといえる。

C. 非キリスト者や知識人の間での聖書の受容状況

⑴ 聖書は、一般にキリスト教の聖典として知られ、もっとも多く読まれている書物である。一般の人は、偉人物語や古典文学として、またヨーロッパの教育・文化の理解のために読む。知識人は自分の知的関心事に共感できる聖書の部分だけを読む傾向がある。彼らの間では聖書の知識が教養のしるしとなっているが、信仰には結びつかない場合が多い。

⑵ 一般の人は、天地創造、処女懐胎、友のために命を捨てること、死と復活などが理解できないというが、福音を告げられるなら、造り主とのきずなを自覚できるかもしれない。

⑶ 教会が、わかりやすく、近づきやすいかたちで聖書を提示し、多くの人がどのように聖書を読み、学べばよいかを教える指針を出せばよい。

D. 聖書の扱い方、聖書に関する問題

⑴ 日本の社会では、聖書が恣意的に解釈され、それが宣伝されている。新宗教団体やカルト的セクト集団によって利用されていることもある。

⑵ 信者たちに、聖書を正しく理解するための基礎知識を得させ、彼らが、全聖書、特に旧約聖書の霊的およびキリスト教的意味を発見するよう助けることが急務である。

⑶ 「教導職」にある司祭たちも、適切かつ十分に聖書を理解しておく必要がある。

E. 霊感と聖書の真理

⑴ 一般に信徒の間では、霊感と聖書の関係に関して十分な理解がなされていないようだ。

F. 聖書の霊的な意味

⑴ 霊的な意味が神の意図した最終的な意味であることを理解している人はあまりいない。

⑵ 聖書を自己流で解釈しないために、『ゼーヘル』（毎日の聖書朗読の手引き）などを読む。

G. 旧約聖書

⑴ 主日のミサで読まれるようになったが、新約聖書に比べて読む人が少ない。たとえば次のような理由が挙げられる：かつてある司祭は信徒が旧約聖書を読むのを禁じた、分厚い、内容が難しい、旧約の神は父性的で厳しい、残虐な場面や掟が多い、時代が古く、異民族の固有名詞が多いなど。
⑵ 説教やカテケージス、聖書講座で、旧約と新約は一体をなしており、前者なしには後者は理解できないことを、実例を挙げて解説する必要がある。

H. 福音書についての知識と読み方について
⑴ イエス・キリストはユダヤ人であることをもう少し詳しく説明する必要がある。
⑵ 不十分であるが、現実の生活の中で福音の豊かさに気づき、助けられている。

I. 難しい箇所と対応の方法
⑴ イスラエル中心思想、戦争、殺人、異教徒の絶滅、掟の列挙。申命記7・1－8、民数記21・1－3、21－35、ヨシュア記6・1－7・2、8・1－29、サムエル記上13、15、詩編137・9他。
⑵ マリアの処女性と懐胎、悪霊、イエスの奇跡、イエスの兄弟の登場、マルタとマリアの対比、マタイ10・34－39、20・1－16、神の子の死、復活、最後の審判、黙示録他。
⑶ 哲学・神学・聖書について知識を備えている聖職者と修道者や信徒とともに協力し、研鑽、切磋琢磨することで、聖書理解に新たな光と刷新をもたらすと期待される。

1-5　神のことばへの信仰

A. 神のことばと信仰
⑴ 一般に信徒は、自分の信仰生活をいつもみことばに照らして軌道修正したり、みことばから信仰の力、いやし、慰めを得たり、そこから社会生活を変革したりするまでには至っていないと思われる。教会は、聖書によって信仰を新たにしていく方法を信者に示すべき。

B. 信者は何のために聖書を読んでいるか

⑴ みことばを通して示される神の望みと計画を受け止め、その望みにかなうような生き方や振る舞いができるため、弱いときの神の恵みと導きを求めるため、自分の霊魂の救いのため、イエスや神の愛を感じ、その愛を他の人に実践するために聖書を読んでいる。

C. 聖書朗読の識別基準

⑴ 「神のことば」、「救いのことば」、「いのちのことば」、「真理」として信じる。

⑵ 教会公認の聖書である。教会における聖書の解釈のもとに、信仰の導きに従って「神がわれわれの救いのために書かれた神のことばとして望んだ真理」として受け入れる。①文学類型、②聖書作者の時代、社会、文化背景を土台として聖霊の照らしに従い個人的に語りかけられることを聞くこと。

1-6　マリアと神のことば

⑴ マリアは、いかなる危機的状況の中でも、日常の平凡な生活の中でも、常にみことばを受け止め、思いめぐらし、神への全幅の信頼と絶対的な希望をもって実行した。

⑵ マリアのように、まず教会の指導者たちが「聞き、思いめぐらす」べき。

⑶ イエスのことば、および出来事を聖書と結びつけている（ヨハネ２・5）。

⑷ マリアは、聖書を取り入れたロザリオによる黙想を通して大いに理解される。

⑸ マリアを見て、教会の中に女性を対等に見て尊重する態度、行動が培われるべき。

第２章　教会生活における神のことば

2-1　教会生活における神のことば

A. 教会共同体または信者の間での聖書の重要性

⑴ カトリック人口が45万人（全人口の0.3％）の国で主日のパンフレット『聖書と典礼』が毎週11万部発行。外国籍信徒のため英、西、葡語などでも同様のパンフレットを発行。

⑵ 『毎日のミサ』は平日ミサ出席者の４割近くの部数が発行されている。

主日に限らず、週日でも、神のことばは非常に大切なものになっている。
⑶ ミサの中の聖書のことばがどれだけ心の糧になっているか疑問だが、少しずつ生活の分かち合いに深化されて生活を養う糧となっている。

B. 信者の糧としての聖書の意味

⑴ かつての『カトリック要理』で教育を受けた信者たちは、信仰形成の糧として聖書が不可欠であるということを十分理解していない。
⑵ 神のことばによって絶えず励まされ、謙虚さや信頼を教えられ、変えられた。神のことばは、キリストに似た者になる霊的成長のために必要な霊的な食物である。
⑶ みことばによって養われ、照らされ、支えられているという体験があれば、それが自分と共同体の糧になる。教会の優先課題は、みことばによる大人の霊的な養成。

C. キリスト教は「書物の宗教」に陥る危険があるか

⑴「みことば」が説明対象にとどまっている場合があることは否めない。現実に生きる生身の人間に共感できず、キリストの生き方につながっておらず、いのちを与えるみことばが生活と結びつかないならば「書物の上の宗教」に陥る危険がある。それ以上に「儀式だけの宗教」に陥る危険のほうがより心配。

D. 個人の生活で、また主日および週日に神のことばが敬われ、よく読まれているか

⑴ 多くの信徒が主日ミサ以外に聖書に触れる機会はあまりない。朗読奉仕者の指導が十分ではなく、会衆がみことばを典礼の場で聞く態度も不十分である。説教が頼り。
⑵ 週日に聖書を読んで信仰を深めようとする人はごく稀。毎日のミサの聖書朗読箇所を忠実に読むことが勧められるが、手引書が必要。
⑶ 生活に追われている多くの人にとって、ミサのみことば、説教が実生活と結びつけられるとき、初めて生きるものとなる。その点、『聖書と典礼』の役割は大きい。

E. 典礼暦の特別な季節に神のことばは敬われ、よく読まれているか

⑴ これらの季節に種々の黙想会や研修会があり、神のことばはよく読まれている。

⑵ 所定の典礼を無難にこなしているのみで、みことばをよく読んで味わうまでに至らない小教区もある。

＜提案：女子奉献生活者＞

⑴ ミサ、聖書朗読も形式的なものから、聞く、黙想する、吟味する、こたえる工夫が必要。

⑵ 聖書朗読は大切な役目であるため、もっと準備と養成が必要。

⑶ 教会内で、聖書をわかりやすく伝える人が、小さな集まり、学習会、分かち合いを通して、聖書を信徒にもっと身近で親しみのあるものにする必要がある。

⑷ 司祭、あるいは代理の神のことばについての基本的な教養、個人的な読み、準備、祈りが必要。みことばを伝える意識をもつこと。

⑸ 教会文書は、各国の現代社会の中でもっと受肉したものにしていく必要があり、入手しやすくわかりやすい解説、広い公布などで、それらを奨励し関心をもたせる努力が必要。

2-2　神の民の教育における神のことば

A. 聖書の包括的な教育

⑴ ある教区では、神のことばに関する教えが神の民全体に浸透していない。

⑵ 黙想会、勉強会、養成コース等があるが、すべてをカバーしているとは思えない。

⑶ 聖書の分野で信徒のリーダーの養成が急務である。司教団は再吟味する必要がある。

B. 聖書の扱いについての神学生、奉献生活者、共同体の奉仕者（カテキスタなど）の養成

⑴ 奉献生活者は、初期養成、生涯養成のいずれにも聖書コースがある。修道女連盟、教区主催、地区主催のもの、その他の各会独自のみことばに関する養成コースもある。

⑵ 教区司祭には養成の機会が非常に少ない。カテキスタの養成が必要。

C. 信徒のための養成コース

⑴ 聖書講座では、聖書を宣教・司牧活動の基礎としてどう生かすかについての養成はなされていない。講座は、都市部で交通の便のよいところで行われ、郡部では難しい。

⑵ 信徒養成は、司祭、修道女、信徒の協力体制の中で入信準備、聖書講座、受洗後のアフターケアーがなされることが大切。

⑶ ある教区には、集会祭儀司式者養成コース、AsIPAのリーダー養成コースがある。

2-3　神のことば、典礼、祈り

A. 典礼と個人の祈りにおいて聖書に触れることについて

⑴ 主日のミサ：多くの小教区では、信徒が当番で聖書を朗読している。主日のミサ朗読箇所を前もって読む。質問があれば司祭に尋ねている。インターネットで福音の解説を読む。

⑵ 少数の信者は毎日のミサで聖書に触れ、あずからなくても、『毎日のミサ』を読む。

⑶ ある教区では、一般に祈禱書に基づく共通の祈りをする。

⑷ ことばの祭儀で聖書の朗読と黙想、詩編の聖歌が、特に熱心に行われている教会もある。

⑸ みことばに触れるようにとの指導や勧めの機会はまだ一部にとどまっている。

B. ことばの典礼と感謝の典礼についての理解

⑴ 一般に理解はまだ十分ではない。これは司式司祭についてもいえる。感謝の典礼が優位で、ことばの典礼はそれに従属するものと理解されがち。

⑵ ことばの祭儀と感謝の祭儀をつなぐのは司祭の説教である。ある人は、ことばの祭儀は、耳から聞く聖体祭儀であると理解している。

C. 典礼の中の神のことばと生活の結びつき

⑴ ある信者にとって、ミサで朗読される神のことばは、その日、あるいは

その一週間の日常生活を照らす指針であり、光、慰め、勧告、あるいは教訓、時には、人々に伝えるべきことがらであったりする。
⑵ ある場合は、みことばの理解が倫理にのみ偏り、自己批判の材料、否定的な理解にとどまる。感謝の祭儀で記念されるみことばと信者の日常生活は、多くの場合、遊離している。
⑶ 信徒は、聖書のことばが日常生活とかかわるような説教やカテケージスを求めている。

D. 説教は聖書の説明になっているか
⑴ ある説教は、聖書を反映しており、信者の生活の糧になっている。
⑵ 別の説教は、内容が生活感に乏しく、共同体の育成の観点も弱い。信者の生活に真の意味で反映されていない。もっとみことばそのものの意味を明らかにしてほしい。司祭の説教は聖書について十分に研究し、味わい、黙想して正しく信徒に伝えられ、かつ日常生活での信徒の生き方をみことばから説き起こし、力を与える語りであってほしい。
⑶ 神学生のときから毎日神のことばを黙想する習慣を身につけるべき。

E. ゆるしの秘跡での聖書
⑴ 四旬節や待降節に個別告白赦免を伴う共同回心式が行われる場合を除けば、ゆるしの秘跡の中で神のことばが読まれることはまだ一般化していないと思われる。
⑵ ゆるしの秘跡では聖書のことばを一つでも引用すると信者に強い印象を与える。

F. 聖務日課の中で神のことばを聞き、それと対話すること
⑴ 聖務日課の詩編は司祭、修道者にとって大切な祈りの場。詩編唱和の後の「神のことば」を聞いて、短い沈黙をし、対話をすることもある。神とのつながりを確認するしるし。
⑵ 一般に小教区において「教会の祈り」は、ロザリオほど意欲的に行われていない。

G. 信徒は神のことばを聞き、対話しているか

⑴ 多くの日本人にとって、神は「遠くにあって人間を圧倒する存在」であり、卑下が美徳という道徳観から、神と対話するに至らない。
⑵ 多くの信者にとって、祈りは神への嘆願。「神のことばを聞き、それにこたえる」という養成がなされていない。対話としての祈りについて、もう少し説明がほしい。
⑶ 一番必要なことは、生活や信仰を真実に生き生きと分かち合える共同体づくりである。その中でみことばは生きたものとなる。そのために小共同体、リーダーの養成が必要。

H. 聖書に触れる機会

序-3を参照。
⑴ 神の民がみことばを味わい、そこから霊的エネルギーを得るという体験はまだ端緒。
⑵ 神の民は聖書に触れる機会と時間を自分で作るべき。

2-4　神のことば、福音宣教、信仰教育

A. 神のことばと信仰教育に関する積極的な面と消極的な面

⑴ 積極的な面
(a) 聖書を信仰教育の基本テキストとして活用し、それに対応した参考テキストが作られた。
(b) 信徒の役割が重視されてきた。特に、チームで子ども、青年、大人を世話する。
⑵ 消極的な面
(a) 『カトリック教会のカテキズム』を基本に、系統立てた「要理教育」も不可欠。
(b) 啓示と神のことばについての教えに関する無知やあいまいさ、聖書の勝手な解釈がある。

B. 信仰教育における聖書の活用

⑴ 信仰講座が聖書中心に行われるようになってきたが、神のことばが知識として与えられ、心に納得のいくことばとして受け止められていない。
⑵ 小・中・高生たちを、聖書について学ぶだけではなく、福音を「味わう」

よう導くべき。
⑶「信仰教育はあくまで要理であり、その要理を補足・補強するために聖書を使う」のではなく、みことばを通して神から直接教えを受けるという考え方が必要。たとえば主日の前に、朗読箇所の逐語的または総合的な説明、質疑応答や感想、分かち合いをし、ミサ後、次週の聖書の箇所を、旧約との関連で解説し、現実の生活にどう取り入れるかを話す。
⑷ 一方、聖書だけに偏ってはならず、要理の内容や信徒の義務権利なども教えるべき。

＜課題：女子奉献生活者＞
⑴ 生活の中に生きた神のことばを体験し、それを分かち合うための同伴が必要。
⑵ 信仰教育では、知的な面が重視され、信仰体験という霊的、共同体的側面が不足。
⑶ 学校教育の場において、真理を求めている現代の若者に聖書の魅力を伝えきれない。
⑷ 青少年に通じることばと教導する側のことばのギャップが大きいことや地域の行事、子どもたちの社会活動が活発になるにつれ、教会離れで子どもの姿が激減した。この年齢層に関しては、信仰教育の場を設けることも難しい。
⑸ 働いている人のため参加しやすいコースがあるとよい。学ぼうとしている人は多い。

C. 聖書研究
⑴ 宣教に聖書は不可欠で勉強しなければならないという信徒が徐々に出てきた。

D. 聖書の入門教育あるいは講座
⑴ 教区レベルで行われているところもある。ある教区ではほとんどの小教区において聖書を学ぶプログラムを実施しているが、内容や方法については各現場に任されている。

2-5　神のことば、釈義、神学

A. 神のことばは釈義と神学の魂／神学研究における聖書の役割

⑴ 聖書は神学研究を照らし、それにいのちを与える決定的なもので、神学の諸分野の研究の基礎、目的、権威となる。
⑵ 現代の世界が直面している新しい諸問題を神の啓示と信仰の光で考察する研究が急務。
⑶ 釈義を中心に偏ると、聖書と生活とのつながりを理解することが難しくなる。
⑷ 司祭養成において、聖書を教えるだけでなく、民からいのち、祈り、愛することを学ぶべき。

B.「啓示されたみことば」としての性格は十分理解され、尊重されているか

⑴ 啓示されたみことばに対する敬虔な態度、尊敬を示す態度は不足しているようだ。

C. 聖書に関する学問的研究は、適切な信仰の基盤によって促され、支えられているか

⑴ 聖書の原文の意味を理解するために、教会全体の生きた聖伝と信仰の類比によって研究を進めなければならないことから、信仰は必要不可欠となる。
⑵ みことばの研究の中で聖書の方言への翻訳を期待する声もある。

D. 聖書本文を扱う際の通常の方法

(a)「文学類型」を見極め、(b) 聖書作者の時代における社会・文化的背景を考慮し、(c) 教会の聖伝と信仰の類比による聖書全体の一貫性に留意する。

E. 共同体の司牧的生活における聖書

⑴ 聖書は共同体の司牧的生活の中で十分考慮されている。
⑵ 共同体で、カリスマ的分野もすべて聖書、教会の教導、会の文書の順に深められている。

2-6　神のことばと信者の生活

A. 神の民と聖職者の霊的生活に与える聖書の影響

⑴ 聖書に親しむことによって、信仰のとらえ方が聖書的になり、霊的に成長してきている。

⑵ 聖職者には神のことばは霊的生活の基盤、心の糧、価値基準、共同体に「奉仕する」際の大きな励みと安らぎを覚える源泉となっている。

⑶ 宣教師、修道者は特に熱心に聖書を霊的生活の基本として重んじ、霊的読書や信心書とははっきり区別して、聖書を第一の信仰の書と位置づけている。

⑷ 青少年司牧や宣教のためにも、聖書に触れる習慣を教会生活の中に導入すべきである。

⑸ 受洗のときの司祭の「聖書に帰れ」ということばが洗礼後の方向性を決定づけた。

(6) 小教区内の地区は、みことばの分かち合いを中心に置くことで、互いがつながり、互いに愛を実践し、互いのことを思いやることのできる共同体となるべきである。

B. マリアの賛歌

⑴ 謙遜で信頼に満ちたマリアの態度は、信者の信仰生活に具体的な光となっている。

⑵ マリアの賛歌は、神に対する信頼に満ちた態度であるとともに、この世に対する厳しい批判の目から見た人間の希望、神への信頼のあかしでもある。

C. 物質的な豊かさが神のことばを聞く妨げになっているのはなぜか

⑴ 豊かになると、神のことばを聞かなくても絶えず満腹状態であり、平穏無事に生きることができるから、霊的なものへの関心が薄らぎ、心を神に向けることが少なくなる。

⑵ 物質的な豊かさを求めるために、情報量が多く、テレビ、インターネット、音楽などにより沈黙が得られず、日常生活に追われ、神のことばに耳を傾けることが少なくなる。

⑶ 豊かさは手軽に心地よさ、快適、快楽につながっていて、知らず知らずのうちに大切なことを忘れさせるか、後回しにさせる。神のことばに耳を傾

けることは容易ではない。
⑷ 物質的な豊かさは、精神的な欲求や渇望をごまかし、真理に向かう意欲と熱意を妨げ、福音の豊かさと魅力から人々の心を引き離す。神に頼る必要がなくなる。
⑸ 物質的豊かさを神に感謝し、それらを他者のために使用するという道もある。

D. 感謝の祭儀や他の典礼の中で神のことばは信仰を伝える強力な手段となっているか

⑴ 司祭と参加する信者たちの態度にもよるが、ある信者にとって、強力な手段となっている。特に感謝の祭儀、みことばの祭儀、祈りの集いなどで読まれる聖書は、具体的な神の語りかけである。
⑵ ある信者にとっては、そう思われない。多くの教会で、典礼の式次第が淡々と進行するだけ。「ことばの典礼」においてみことばを十分に聞いても、その霊的糧を十分に味わい、自分の生活の中でそれを根づかせるまでには至っていない。

E. キリスト信者が聖書に無関心、あるいは積極的な関心をもたないのはなぜか

⑴ ある信者にとって、秘跡中心だから自分で読む必要がない。勝手な解釈は許されないと厳しくいわれた。
⑵ 人が「福音化」されるためには、「秘跡とみことば」が不可欠であるという考え方が公会議で打ち出された。しかし、40数年経った今でもまだ十分浸透していないと思われる。

F. レクチオ・ディヴィナについて

⑴ これは、司祭・修道者には知られているが、信徒にはほとんど知られていない。
⑵ ある修道会では、合計一時間半程度「Lectio Divina」の時間が設けられている。修道者にとって、「Lectio Divina」は恵みであると同時に修業という側面もある。

G. レクチオ・ディヴィナを推進する要因と妨げる要因

⑴ 推進する要因：司牧者の勧め、適切なガイダンスなど。みことばに魅せられたこと。仲間同士で聖書を読むことは、神との出会いを豊かにする。実践して得る喜びの体験が少しずつ広まっている。会憲に記されている。修道会の初期養成、自己養成のため行う。

⑵ 妨げる要因：「活字離れ」、「読書嫌い」。時間の確保が難しい。説明が不十分。慣れていない。面倒くさい、億劫。教え、導く人がいない。司祭に体験がないと信徒まで浸透しない。現世から超越して、神のもとにとどまるまでに、潜心の時間と努力がいる。

第3章　教会の宣教における神のことば

3-1　現代世界における神のことばの宣教

A. 神のことばを聞くことを促す、また妨げる要因

⑴ 促す要因

(a) 信じ、希望し、愛する能力を家庭や学校で培うことが、「よい土地」づくりとなる。

(b) 聖書に接する機会を増やすことによってみことばに飢え渇くようになるはず。

(c) 病気、災難、家族の帰天、高齢化社会、不安定な世界情勢、神への渇望。教会や学校でキリスト教的雰囲気に触れて。人との出会い、教皇、キリスト者一般に対する信頼。

(d) 他のキリスト信者からの刺激。

(e) 「みことば」は、「読む」ことより「聞く」ほうが自分の中により深く入り込む。

⑵ 妨げる要因

(a) 聖書の難解な解説、すべて自分の力でやっていけるという傲慢、不遜な考えに陥るとき。

(b) 邦訳聖書に対する不満のために、個々の信徒があまり聖書を読む習慣をもっていない。

(c)「福音化」されるためには、「秘跡とみことば」が不可欠であるという考え方がまだない。

(d) 世俗化した生活、世俗主義が放つマスコミ全体が、聖書への関心を妨げている。
(e) 洗礼を受けたことの意味、キリスト者が何者かを理解していないことが原因。
(f) 多くの信徒は、聖書は理解しがたいと考え、神のことばに飢え渇く状態にない。
(g) 現代世界の諸問題と教会がかけ離れているので、神のことばは別世界のことばとなる。

B. 内面的な不安や他のキリスト教諸教派が信仰刷新の刺激になりうるか
⑴ 神のことばを聞く点でカトリック以外のキリスト教から学ぶところが大である。
⑵ 生きる意味を探すよう促す心配事や苦しみなどが神のことばを聞くのを助ける。

C. 世俗主義、世間からの攻撃、反キリスト教的な生活様式は神のことばを聞くことを妨げるか
⑴ 世俗的な価値観に影響された親たちは、子どもたちに受験や部活や習い事を優先させる。
⑵ 世俗主義、消費主義、多元主義などが、みことばを受け容れることを妨げている。
⑶ 福音と相対する考え方、地域共同体での生活習慣なども妨げとなる。

D. 神のことばをどのように宣教すべきか
⑴ 現代の諸問題をキリストのことばに照らして学び、それを「行動による愛」によって伝える。
⑵ 世俗化した時代にあって、生活をもってキリスト者であることの新しさと希望を宣言しなければならない。これは確実に他の人々に考えさせる。
⑶ 諸宗教および現代社会と対話し、地方の伝統と文化を評価しつつ、教会の価値観を伝える。
⑷ 生活の場において信仰体験を分かち合うことがなければ福音宣教にならないと思う。

⑸ まず社会をよく見て、みことばの種が落ちて実る環境づくりをし、次に人間の霊的な側面をもう一度正しく評価し直して、みことばをその霊性の精進に結びつけていく。
⑹ 特にインターネットなどのITを活用した宣教は、大きなよい影響をもたらしうる。
⑺ 神のことばを宣言する共同体が、愛、ゆるし、正義を実践する共同体となる努力。
⑻ 人間の根源的な欲求にこたえるものを聖書のメッセージがもっていることを明示する。

3-2　聖書に容易に近づく機会

2-3 A、Hなど参照。
⑴ 典礼が日本語になった時点から始まり、共同訳聖書の完成でさらに増大した。
⑵ 主日のミサ、聖書通読、聖書勉強会、祈りの集い、分かち合い、聖書講座など。

＜問題：女子奉献生活者＞

主日以外に「聖書を学ぶ会」を年齢層別に組織できないものか。超小教区で横の連絡を取り、情報を交換し、どこの教会でもあずかれるようにするとよい。信者全体が高齢化しているので、聖書に親しむよりは単純な祈りや分かち合いのほうが多いように思われる。子どもたちにやさしく聖書を伝える努力が欠けている。若い世代のほうが継続的に読んでいるが、聖書の集いに参加しているのは一部の熱心な信者に限られている。聖書に触れたい信者は多いが、人材に乏しい。信徒がそこまで養成されていない。ミサ後に聖書を読み、分かち合う会のお知らせをしても、無関心、忙しさ、分かち合いが苦手などの理由で参加者は少ない。正しい分かち合いの知識と指導が必要。

3-3　聖書の普及

A. 各教区における聖書使徒職、司牧計画

⑴ 信徒養成の一環として、「聖書の分かち合いリーダーの養成コース」を設けている。

⑵ 聖書を基盤とした司牧計画を立てようとの教区中枢の動き（小共同体活動）はある。
⑶ ある教区は、教区全体で、みことばに親しむことに具体的に取り組んでいる。
⑷ 毎月主日の典礼の解説を発行。季刊、月刊、週刊などの広報活動。
⑸ 聖書は各家庭に普及している。個人的に聖書を贈呈。カトリック学校の保護者に配布。

B. カトリック聖書連盟（Catholic Biblical Federation）について
⑴ 聖書協会のことは知っていても、カトリック聖書連盟はほとんどの人が知らないだろう。

C. みことばと出会うための手段
3-2参照。
⑴ 一般社会での聖書の普及率は、毎年全人口の１割を越えている。
⑵ ラジオ番組「心のともしび」、『カトリック新聞』、出版物、インターネット。
⑶ このシノドスを機に、普遍教会レベルで聖書の解説の普及を推進する。
⑷ Lectio Divina、聖書深読の会、聖書の分かち合い他。

D. 翻訳聖書（日本語）
⑴ E. ラゲ（Emile RAGUET, m.e.p.）私訳『新約聖書』（1910年）
⑵ フランシスコ会聖書研究所『原文からの批判的口語訳の全聖書分冊』（1958 − 2002年）
⑶ 同『新約聖書』サンパウロ［旧中央出版社］（1979年）
⑷ バルバロ、デル・コル訳『口語訳旧約新約聖書』ドン・ボスコ社（1964年）
⑸ 共同訳聖書実行委員会『聖書・新共同訳』日本聖書協会（1987年）
⑹ 新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店（2004年）
⑺ 旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書』岩波書店（2004 − 2005年）
⑻ 本田哲郎私訳『小さくされた人々のための福音上・下』新世社（1998年）
⑼ 山浦玄嗣私訳『ケセン語訳新約聖書』（福音書の方言訳四巻）イー・ピッ

クス大船渡印刷（2002－2004年）
⑽ DVD聖書
⑾ 電子聖書
※ プロテスタントによる多数の日本語訳聖書も刊行されている。

E. 家庭における聖書朗読

⑴ 家庭で聖書を読む習慣はほとんどない。子どもたちを聖書養成にいかに参加させるか。

F. 世代に応じた信仰養成講座

⑴ 世代に応じた養成は信仰養成講座や小共同体づくり入門講座のかたちで行われているが、修道者が大半で信徒の参加が少ない。子どものときから聖書を読むことを習慣づけるべき。
⑵ 教会学校、青少年には年齢別の要理クラス、YGT（Youth Gathering In Tokyo）、「祈りと生活の作業所」の活動、サマーキャンプで聖書を学ぶ会がある。幼児教育で絵、カード、CD、聖歌のテープを使っている。成人は聖書講座などで養成。奉献生活では、毎日のミサ、霊的読書、みことばの分かち合いで養成されている。信仰入門教育において「みことばに根ざす信仰」の実践やその模範が必要である。

G. マス・メディアとその重要性

⑴ カトリック出版による月刊誌。通信講座。ホームページ（小教区、教区ほか）。ラジオ、テレビ、DVD、CD、インターネット。音楽。マルチメディア。携帯電話。子ども向け聖書物語、『こじか』などの小冊子、絵本、ビデオ、漫画の聖書。英語と仏語による子どもの要理クラスの豊富な資料。マス・メディアの重要性はいうまでもない。

3-4　エキュメニカル対話における神のことば

A. 生活のあかしの一貫性

⑴ 宣教の意識の高い人は、常に生活のあかしの一貫性を心がけている。
⑵ 生活のあかしの一貫性はキリストが優先された人々（病人、苦しむ人々、排除された人々……）とのかかわりを実際もつことで見られるのではないか。

B. エキュメニカル対話における部分教会の実践

⑴ 特にみことばを聞くことを基礎にした、祈りの出会い、「クリスマス会」の共同企画。

⑵ 社会に平和と正義を実現するためのエキュメニカルな活動。

C. エキュメニカルな対話や議論で聖書が用いられているか

⑴ 聖書原典の日本語への翻訳は、欧米語同士では想像できないような困難を伴うだけに、『聖書・新共同訳』は、エキュメニカルな対話、一致へ貢献している。

⑵ エキュメニカルな運動のために聖書をよく理解することと同時に、聖伝に基づく解釈を大事にし、聖書の翻訳と活用において、カトリック教会の立場を保持することも大切。

⑶ ともに祈り、親交を深めることはしたが、聖書に基づいた対話は行わなかった。カトリックとプロテスタントでは聖書のある箇所について根本的な解釈の違いがあるため。

⑷ 聖書を用いてともに祈り、協力する機会が増えている。たとえば、朝祷会、祈祷週間、市民クリスマス、聖書100週間、テゼの祈り、アルファコース、黙想会、聖書リレー朗読、日本宗教者会議、聖書展、講演会、正義と平和関係、環境問題、生命倫理、憲法9条擁護、ホームレス援助、聖書研究、聖書学会等。

D. 神のことばに関する一致点や対立点は何か

⑴ 聖書において教会は一つ。聖書は対話のきずなになり、一致を可能にするだろう。

E. 聖書協会世界連盟との協力は可能か

⑴ 聖書に関する出版物をカトリックは何ら抵抗なく利用している。

3-5　ユダヤ教徒との対話における神のことば

⑴ ユダヤ教徒に接する機会がほとんどないのでわからない。

⑵ 聖書からの反ユダヤ主義はないが、パレスチナ問題は一般の人々に躓き

を与えている。
⑶ ユダヤ教徒を尊重して、「旧約聖書」を、たとえば「最初の契約の書」などと改称するのは、対話促進の助けとなるのではないかという声もある。
⑷ 旧約聖書は一致点であり、聖書を本当に理解するのに、ユダヤ教徒との対話が必要。

3-6　諸宗教対話・異文化対話における神のことば

A. 固有の聖典をもつ宗教者との、聖書に基づいた対話

⑴ 諸宗教の対話はアジア、したがって日本において特に重大である。対話の方式を確立して相違点をも明白にし、よりよき社会の発展のためにどのように協力できるかを考える時。
⑵ 諸宗教との対話において神のことばは有益なものとしてそのまま告げられる場合もあるだろうが、聖書を引用することは少なくとも注意を要する。
⑶ 他宗教の経典に対する深い尊敬の念をもたなければ、真の諸宗教の対話とならない。互いを人間として尊重し認め合うことから始め、他の宗教と「連帯し」、他の宗教から学び、そこにおける神のことばの働きを見いだそうとする謙虚な態度が要求される。日本には、諸宗教対話に関する書籍が多い。カトリックの立場をはっきりさせながらも、その人の宗教を大切にしたマザーテレサの言動は、諸宗教の対話の模範になると思う。

B. 神のことばを信じない人が神のことばに触れることは可能か

⑴ 聖書はどんな人にとっても、豊かな意味をもち影響を与えている。
⑵ 日本では、文化的、思想的な面からでも聖書を知るならば、神のことばとして受け入れられるであろう。キリスト教の神やイエスを信じていない人々でも、聖書のことばから神の尊さと近しさを感じることは可能。

C 神のことばは無神論者のためにも存在するか

⑴ 神は、すべての人に語られたのだから、神のことばは彼らのためにも存在する。
⑵ みことばを座右の銘にしている「無神論者」もいる。

D. 聖書はすべての人にとって「大いなる体系」として豊かな意味をもつか

⑴ 神のことばとの出会いは、「大いなる体系」、「社会倫理要綱」を通して行われる。
⑵ 神のことばをキリスト教が独占しているというナイーブな態度は他宗教や異文化との対話を不可能にすると思われる。

E. 聖書を用いた異文化との対話
⑴ 教会は世界のキリスト教化、換言すればキリスト教を軸にした諸文化の一元化、ヨーロッパ化を布教国に求めてきたのではないか。大切なことは文化の福音化にある。
⑵ 日本において、キリスト教はヨーロッパ文化の一つとしてみなされているので、異文化対話の必要を感じる。日本において「聖書」を使って対話するというよりも、心情、文化理解からの対話、聖書の正しい学問的理解の普及を目指した対話、正義と平和の行動を通しての対話、祈りの雰囲気をともにした対話などが優先されるであろう。

F. 教会がセクトに対抗するのを助ける手段
⑴ まず相手をよく知ること。セクトは、聖書の限られた部分や語句を誤って解釈する場合が多いので、対抗する手段は聖書に対する正しい理解と釈義の確信をもつようにすること。
⑵ セクトと戦う最良の方法は、カトリック教会との完全で喜びに満ちた交わりの中で深いつながりをもつグループのよさ、つまり「人間の痛みや悩みを聞き取り、ともに歩もうとする姿勢」を人々に語り示すキリスト者の共同体をつくることである。

＜その他の意見＞　この提題解説の内容、その目指すところ、意味がよくわからない。あまりにも上からものをいっている感じがする。この文書の対象を明確にする必要がある。

SYNODUS EPISCOPORUM

SYNOD OF BISHOPS
XII ORDINARY GENERAL ASSEMBLY

(5 OCTOBER – 26 OCTOBER 2008)

THE WORD OF GOD
IN THE LIFE AND MISSION
OF THE CHURCH

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許可する。ただし営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項により、いっさい自由である。

世界代表司教会議第12回通常総会　報告

2009年2月16日　第1刷発行
翻訳・編集　カトリック中央協議会　司教協議会秘書室研究企画
発行所　カトリック中央協議会
東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
〒135-8585 ☎03-5632-4411